

国道117号線第一次改築関係発掘調査報告書

やしきだ
屋敷田Ⅲ遺跡

1998

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

国道117号線第一次改築関係発掘調査報告書

屋敷田Ⅲ遺跡

1998

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

国道117号線は、小千谷市から信濃川沿いに、上日町市・中里村・津南町を縦断し長野県へと続く重要幹線国道です。近年の著しい産業・経済の発展は本国道においても交通量の増化を仰げ、国道の整備拡充が急がれています。その中で、中里村と津南町とを分ける清津川にかかる清津橋は、老朽化とともに交通の大きな障害となっていました。この問題を解決するため、中里村から津南町に至る1.5km間の改築工事が進められました。改築工事は平成8年8月に終了し、現在では清津川をまたぐ清津大橋が雄大な姿を見せています。

本書は、国道117号線の改築工事に先立ち、発掘調査を行った津南町「屋敷田Ⅲ遺跡」の発掘調査報告書です。津南町には全国的にも知られている旧石器時代や縄文時代草創期の遺跡が数多く存在しており、今回の発掘調査の成果が注目されていました。

調査の結果は、遺構こそ検出されなかったものの、縄文時代草創期の無文土器と隆起線文土器が多数出土しました。また、それらと一緒に出土した尖頭器や石匙は、縄文時代の日本でもっとも古い段階の石器であるという可能性が高く、今後の石器研究における貴重な資料となりました。

これらの調査結果が、縄文時代草創期の研究資料として活用されるとともに、県民の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸甚です。

最後に、発掘調査に際して、多人なご協力とご援助を賜りました津南町教育委員会並びに地元の方々、また、調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮を賜った建設省北陸地方建設局、同長岡国道工事事務所に対し、深甚なる謝意を表します。

平成10年3月

新潟県教育委員会

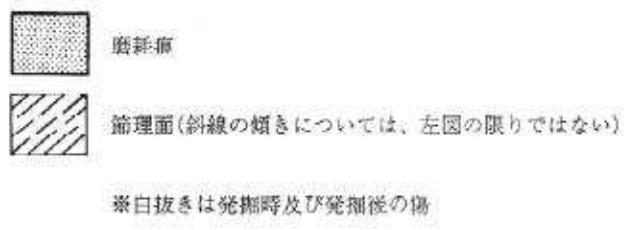
教育長 平野清明

例　　言

- 1 本報告書は新潟県中魚沼郡津南町大字下船渡乙字屋敷田1609番地ほかに所在する屋敷田Ⅲ遺跡(やしきださんいせき)の発掘調査記録である。発掘調査は一般国道117号線第一次改築工事に伴い、新潟県が建設省から受託して実施した。
- 2 発掘調査は平成5年度及び6年度に新潟県教育委員会(以下、「県教委」と略す)が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、「埋文事業団」と略す)に調査を委託したものである。
- 3 発掘調査は初年度は平成5年10月25日から12月10日まで、次年度は平成6年4月18日から6月30日まで実施した。整理及び報告書作成にかかる作業は平成7年度から9年度の冬期間に行った。
- 4 出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管している。遺物の許記は「ヤシキ」の略記号を用い、出土地点・層位等を併記した。
- 5 本書の作成は埋文事業団調査課第二係職員が当たり、寺崎裕助(同第二係長)の指導のもと中澤 級(同主任調査員)・江口友子(同文化財調査員)が担当した。報告書の執筆は中澤・江口・甲田 治(同文化財調査員)が当たった。執筆分担は第Ⅲ章・第V章・第VI章2が中澤、第I章・第IV章・第VI章1が江口、第II章が甲田である。第Ⅶ章1～3が江口、第Ⅶ章4が中澤である。第Ⅷ章の自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。編集作業は中澤・江口が担当した。
- 6 本書は本文と図版からなる。第一次調査の図面図版は本文中に写真図版は本文中と巻末に、第二次調査の図面図版・写真図版は巻末にまとめた。
- 7 石器の使用痕について、凡例に付した。
- 8 遺物集中出土地点は集中区と略し、その後に集中区番号を付した。
- 9 各集中区遺物分布図中の土器・石器の実測図は、図版10～18に掲載の実測図中から代表的なものを選出して載せた(縮尺は図版10～18の土器実測図の35%、石器実測図の72%に縮小して掲載した)。また、グリッドごとに取り上げた遺物は当該グリッドの中央に記号を付して示した。層別遺物出土状況には、実測図掲載の土器・石器の実測図番号と剖片・碎片の占数をそれぞれ載せた。
- 10 引用・参考文献は著者と発行年(西暦)を〔 〕で文中に示し、巻末に括して掲載した。
- 11 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。厚く御礼申し上げる。(敬称略、五十音順)
荒川勝利、安藤広道、岡村道雄、小熊博史、小野 昭、小野塚永治、神林昭一、可児通宏、小林達雄、駒形敏朗、坂本 彰、佐藤雅一、田中耕作、立木宏明、津南町、津南町教育委員会、廣田永二、平野卓治、宮尾 亨、宮沢 邸、渡辺秀雄

凡 例

- 1 石器実測図では磨耗痕、節理面を下図のとおり表現した。



- 2 実測図の遺物番号は、土器・石器ごとに通し番号とし、観察表と写真図版の番号も同様に付した。
3 石器石材組成表等における石器石材で石材名すべてを表記できないものは以下のとおり略した。
珪質頁岩……珪質……………チャート……チャ
粘板岩……粘板……………安山岩……安山……………無斑晶質安山岩……無斑
4 土色・土器胎土等の色調の表記は、農林水産省農林水産会議・財團法人日本色彩研究所監修「新版標準土色帳」によった。
5 第3~13表の中の数字は遺物点数を表す。
6 図版3~9の層位別遺物出土状況の数字は遺物番号を表す。
7 各図・写真的縮尺はそれぞれの図版に示した。

目 次

第 I 章 調査に至る経緯	1
第 II 章 遺跡の位置と環境	3
1 地理的環境	3
2 周辺の遺跡	5
第 III 章 第一次調査の概要	8
1 調査の方法と経過	8
A 平成5年度	9
B 平成6年度、平成7年度	9
2 調査体制	12
第 IV 章 第二次調査の概要	18
1 調査の方法と経過	18
A 調査方法	18
B 調査経過	18
2 調査体制	20
3 整理作業	21
第 V 章 遺跡	22
1 概観	22

2 グリッドの設定	22
-----------	----

3 基本層序	22
--------	----

第 VI 章 遺 物 25

1 土 器	25
-------	----

A 縄文土器	26
--------	----

B その他の土器	29
----------	----

2 石 器	29
-------	----

第 VII 章 自然科学分析 43

1 はじめに	43
--------	----

2 試 料	44
-------	----

A Hグリッド	44
---------	----

B G3グリッド	44
----------	----

C 深 挖 (3)	44
-----------	----

D C 地 点	44
---------	----

3 分析方法	46
--------	----

A 重鉱物分析	46
---------	----

B 火山ガス比分析	46
-----------	----

4 結 果	46
-------	----

A Hグリッド	46
---------	----

B G3グリッド	46
----------	----

C 深 挖 (3)	47
-----------	----

D C 地 点	47
---------	----

5 考 察	51
-------	----

A 地点間の対比	51
----------	----

B 各段丘の形成時期と地形変遷	51
-----------------	----

C ロームの成因	53
----------	----

第Ⅷ章 まとめ	55
1 県内草創期遺跡の立地について	55
2 遺物出土状況	55
3 縄文時代草創期の土器について	56
4 石器	59
《要約》	62
《引用・参考文献》	63

挿図目次

第1図 屋敷田Ⅲ遺跡と周辺の遺跡	2
第2図 津南地域の段丘模式断面図	4
第3図 遺跡周辺の段丘分布図	4
第4図 周辺の遺跡分布図	6
第5図 第一次調査トレンチ位置図	8
第6図 屋敷田Ⅰ・Ⅱ遺跡火山灰分析結果及び試料採取地点断面	10
第7図 20トレンチ周辺拡張部分の破碎礫出土状況	10
第8図 第一次調査検出遺構及び出土遺物実測図	14
第9図 第一次調査出土遺物実測図1	15
第10図 第一次調査出土遺物実測図2	16
第11図 平成7年度第一次調査(屋敷田Ⅱ遺跡)風景	17
第12図 平成7年度第一次調査(屋敷田Ⅰ遺跡)風景	17
第13図 12トレンチ土坑断面	17
第14図 12トレンチ土坑完掘	17
第15図 2トレンチ(五箇ヶ台式土器出土)完掘	17
第16図 20トレンチ破碎礫出土状況	17
第17図 20トレンチ周辺拡張部分破碎礫出土状況	17
第18図 20トレンチ周辺拡張部分破碎礫出土状況	17
第19図 20トレンチ周辺拡張部分破碎礫出土状況	17
第20図 20トレンチ周辺拡張部分完掘	17
第21図 第二次調査範囲区分図	19
第22図 発掘調査風景	19

第23図 整理作業風景	21
第24図 クリッド設定図	23
第25図 土層柱状図	24
第26図 集中区1・6 上器接合図	26
第27図 主な石器の部位名称と計測基準	31
第28図 集中区3 母岩別石器分布図	33
第29図 集中区6 母岩別石器分布図	34
第30図 自然科学分析用試料採取拠点図	45
第31図 Hグリッド(A地点)柱状図及び試料採取位置図	45
第32図 G3グリッド(A地点)柱状図及び試料採取位置図	45
第33図 深掘③(B地点)柱状図及び試料採取位置図	45
第34図 C地点柱状図及び試料採取位置図	45
第35図 Hグリッド(A地点)火山ガラス比	48
第36図 G3グリッド(A地点)火山ガラス比	48
第37図 深掘③(B地点)重鉱物組成及び火山ガラス比	49
第38図 C地点重鉱物組成及び火山ガラス比	50
第39図 早津・新井(1981)の「位置図」	52
第40図 県内縄文時代草創期遺跡分布図	57
第41図 周辺の遺跡と段丘分布図	59
第42図 石核、両極石器、剝片類	61

表 目 次

第1表 段丘の対比と遺跡の位置	4
第2表 周辺の遺跡一覧表	6
第3表 集中区分土器出土数	25
第4表 層位別土器出土数	25
第5表 集中区分石器出土数	30
第6表 層位別石器出土数	30
第7表 集中区1・4・5・7・8 石器石材組成表	32
第8表 集中区3 各母岩の特徴	33
第9表 集中区3 石器石材組成表	33
第10表 集中区6 各母岩の特徴	34
第11表 集中区6 石器石材組成表	34
第12表 集中区9 石器石材組成表	36
第13表 集中区外の石器石材組成表	37
第14表 土器観察表1	39
第15表 土器観察表2	40

第16表 石器観察表1	41
第17表 石器観察表2	42
第18表 H グリッド(A 地点)火山ガラス比分析結果	48
第19表 G-3 グリッド(A 地点)火山ガラス比分析結果	48
第20表 深掘③(B 地点)重鉱物及び火山ガラス比分析結果	49
第21表 C 地点重鉱物及び火山ガラス比分析結果	50
第22表 新潟県内の縄文時代草創期遺跡一覧	58

図 版 目 次

図 面

- 図版1 全体図1
- 図版2 全体図2
- 図版3 集中区1 遺物分布図
- 図版4 集中区3 遺物分布図
- 図版5 集中区4 遺物分布図
- 図版6 集中区6 遺物分布図
- 図版7 集中区7・8 遺物分布図
- 図版8 集中区9 遺物分布図
- 図版9 集中区外の遺物分布図
- 図版10 土器実測図1(1~60)
- 図版11 土器実測図2(61~81)
- 図版12 集中区1・4・7・8 石器実測図(1~13)
- 図版13 集中区3 石器実測図(14~29)
- 図版14 集中区6 石器実測図(30~52)
- 図版15 集中区6・9 石器実測図(53~73)
- 図版16 集中区外石器実測図1(74~87)
- 図版17 集中区外石器実測図2(88~101)
- 図版18 集中区外石器実測図3(102~114)

写 真

- 図版19 遺跡周辺の航空写真
- 図版20 1・2. 遺跡遠景
- 図版21 1・2. 平成6年度調査区査柵
- 図版22 1. 調査前現況 2. 平成5年度調査状況 3. 河道2断面
- 図版23 1・2. 平成5年度調査区完掘 3. 集中区1 遺物出土状況
- 図版24 1. 河道1断面 2. 無文土器出土状況 3. 石匙出土状況 4. 半月形石器出土状況
5. 打製石斧山上状況 6. 集中区1 遺物出土状況 7. 集中区3 遺物出土状況

8. 集中区 8 押型文土器出土状況 9. 集中区 5 弥生土器出土状況

図版25 第Ⅰ群土器 A 類

図版26 第Ⅰ群土器 B~E 類、その他の土器

図版27 第Ⅰ群土器 A 類文様

図版28 第Ⅰ群土器 A 類口縁部・握口縁部・接合部断面

図版29 集中区 1 石器、集中区 4 石器、集中区 7 石器、集中区 8 石器

図版30 集中区 3 石器

図版31 集中区 6 石器

図版32 集中区 6 石器、集中区 9 石器

図版33 集中区外の石器 1

図版34 集中区外の石器 2

図版35 集中区外の石器 3、H. 6 ~ 7 第一次調査出土土器・石器

図版36 H. 6 ~ 7 第一次調査出土石器

図版37 試料中の火山ガラス及び軽鉱物

図版38 試料中の重鉱物及び火山ガラス

第Ⅰ章 調査に至る経緯

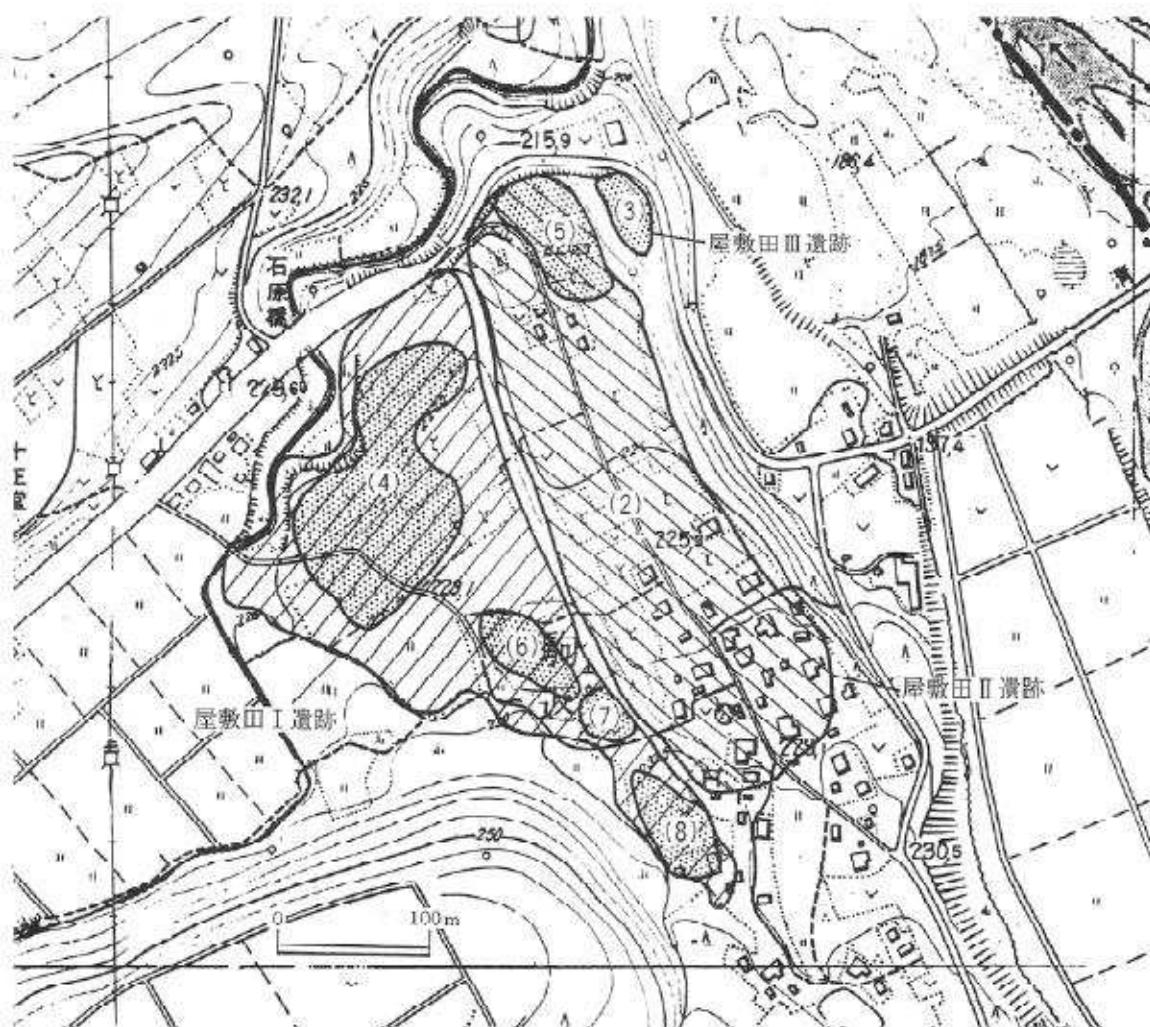
遺跡の発見 信濃川と、その支流清津川が作り出した中魚沼郡内の河岸段丘上には、多くの遺跡が存在し、地元の研究者等によって以前から遺物の収集が行われてきた。『津南郷土資料』〔小松1988〕には、すでに屋敷田遺跡が紹介されており、長岡市立科学博物館の中村孝三郎はこの地で初めて石製釣針を発見し新聞に発表している。また、「津南町史資料編上巻」〔津南町史編さん委員会1984〕には縄文時代草創期から晩期に至る屋敷田遺跡の遺物が報告されているが、そのほとんどは地元の研究者石沢寅義の収集によるものである。昭和48年8月、県教委は中魚沼郡津南町人字下船渡乙字屋敷田地内の分布調査を行い、押型文土器、花模下層式土器、馬高式土器、縄文晩期初頭などの縄文土器、及7月石器時代の石刃、縄文時代草創期の有舌尖頭器等の石器類が表面採集された。その結果、東西100m、南北410mの範囲を旧石器時代～縄文時代晩期までの屋敷田遺跡として登録した。

一般国道117号の改築 中里村と津南町は清津川によって隔てられており、この間、国道117号線は河岸段丘を下り清津橋を渡ったあと、再び段丘を上がるという経路をとっていた。そのため傾斜のある急カーブと幅の狭い老朽化した清津橋とが、交通渋滞と冬季間の交通事故の原因となっていた。これらの問題を解決するため、建設省は国道117号線の中里村から津南町に至る1.5km間の改築工事を計画した。これを受け、平成2年11月、県教委は屋敷田遺跡周辺の踏査を行った。その結果、改築工事範囲から万遍なく土器や石器類が採集され、北東のト位段丘へも遺跡の範囲が広がる可能性の高いことから、その範囲を加えた5,000m²について、第一次調査が必要である旨を建設省と津南町教育委員会に通知した。

第一次調査 平成5年2月の協議で、建設省は当遺跡の第一次調査及び第二次調査を平成5年度に行ってほしいという要望であったが、遺跡が二つの段丘上に位置することや調査員の派遣が困難など、調査区内の用地買取等の懸案事項が未解決であることなどにより、努力目標として了解を得ていた。その後の協議の結果、工事期限等を考慮して、平成5年度に津南町側の段丘ト段にあたる1,200m²の第一次調査を終了させることになった。このため、小千谷バイパスの第一次調査を終了した調査員3名が平成5年10月12日～22日に当遺跡の第一次調査を行った。この結果、河道が二筋検出され、その底部付近から縄文時代草創期の土器と石器が集中して出土したことから、中段との段丘崖部分を除いた1,000m²を第二次調査範囲として確定した。しかし、残りの調査可能期間を考えると平成5年度に調査を終了させることは困難なため、再度建設省と協議を行い、橋脚部分の425m²のみを終了させることになった。急遽、発掘調査計画の策定や作業員募集などの準備作業に入り、10月25日より発掘調査に着手した。

遺跡名の変更(第1図) 前述のとおり、平成5年度以降の当遺跡の第一次・第二次調査では屋敷田遺跡と呼称してきたが、平成7年刊行の「屋敷田Ⅱ遺跡」〔佐藤ほか1995〕では、地元の考古学研究家等の助言をもとに、既存の屋敷田遺跡を屋敷田Ⅰ遺跡、その下の段丘に立地する遺跡を屋敷田Ⅱ遺跡(?)と区分している。さらにその下の段丘に立地する遺跡(?)を俗称地名から大下り遺跡(当事業団第二次調査区域に該当)としているが(広田ほか1994)、前述したように、調査当初から屋敷田遺跡として呼称してきたことや、調査区の所在地の小字名が「屋敷田」であること、隣接する上段の遺跡をそれぞれⅠ、Ⅱと区分していることなどを考慮して、今回の調査遺跡は屋敷田Ⅲ遺跡として、県教委に登録した。また、長岡市立科学博物館研究報告(駒形・小熊1989)においても、屋敷田Ⅰ(4)、Ⅱ(5)、Ⅲ(6)の遺跡名が使用されているが、遺跡名

の混乱を避けるためにも、今後は前述した段丘区分による遺跡名に統一して使用することにした。なお、前掲研究報告(駒形・小熊1989)で使用されている屋敷田Ⅰ・Ⅱ遺跡は前述の段丘区分と一致するが、屋敷田Ⅲ遺跡(6)、居平遺跡(7)、駒返り十二社遺跡(8)に関しては前述の屋敷田Ⅰ遺跡に含まれるので、県教委及び長岡市立科学博物館、津南町と協議し、屋敷田Ⅰ遺跡内の各地点として変更することにした。



第1図 屋敷田III遺跡と周辺の遺跡
(津南町発行「津南町管内図2」1:10,000原図 昭和60年)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境(第2・3図、第1表)

屋敷田Ⅲ遺跡は新潟県の南部、中魚沼郡津南町大字ト船渡乙字屋敷田に所在する。津南町は人口約13,000人、面積171.4km²の町である。長野県境に位置し、中津川の渓谷の奥には、平家の落人伝説で知られる秘境秋山郷がある。水資源が豊かで東京電力系の6か所の発電所から関東方面へ電力を供給している。また、苗場山麓の農地開発やスキー場を中心とした観光開発が進められている。

甲武信岳に水源地をもつ信濃川が町の北側を南西から北東につらぬき、隣の中里村へと続いていく。その支流である清津川、中津川、志久見川が南側から信濃川に合流しているが、屋敷田Ⅲ遺跡は清津川が信濃川に合流する地点から南へおよそ800mのところに位置する。

町の地勢はこれらの河川によって作られた河岸段丘とそれをとりまく山地からなる。津南町周辺は日本で一、二を争うほど河岸段丘がよく発達しており、特に信濃川右岸によく発達している(第3図)。その傾向はそのまま十日町市に入ても續くが、十日町橋より下流に至ると、左岸の方の発達がよくなっていく。

津南—十日町の段丘の名称には、標式地である津南の段丘面にある集落名が使われている。7段の洪積段丘(高位から、谷上面、米原Ⅰ面、米原Ⅱ面、卯ノ木面、朴ノ木坂面、貝坂面、正面面)と2段の沖積段丘(大割野Ⅰ面、大割野Ⅱ面)が発達している。段丘は、形成の時代が古いものほど高位にあり、新しいものほど低位になる。この津南の広大な河岸段丘は、悠久の太古から当間山の隆起と気候変化による海水面変動に伴う信濃川や中津川などの河川浸食(側方浸食、下方浸食)によって形成されたと考えられる。7段の洪積段丘のうち、高位の谷上面と米原面の形成された時代は、今から約50万年前の洪積世中期とされ、以下の4段の形成は洪積世後期と推定されている。

段丘を構成する地層を上からみていくと、まず数十cmの腐植土があり、その下に数cmないし数mのローム層がある。ローム層は古い段丘面ほど厚く、新しいものほど薄くなり(谷上面のローム層は5~8mに達するが、貝坂・正面面では1mを越えない)。沖積世に形成された大割野Ⅰ・Ⅱ面には全くみられない。ローム層の下(大割野Ⅰ・Ⅱ面では腐植土の下)が砂礫層(段丘堆積物)で、これはローム層より厚く数m、所によっては十数mもの厚さがある。ローム層の厚い洪積世中期の段丘の砂礫層は深い。洪積世後期の段丘のロームがあまり厚くない場合の砂礫層は地表に近くなる。貝坂面・正面面は、ともに船山付近で10m以上の砂礫層が堆積している。砂礫層のさらに下部は、洪積世初期までに形成された古い時代の層で、大体は魚沼層の腐食疊であるが、大割野より上流の低位段丘では火山噴出物を交えている。魚沼層の疊は腐食が進むとしばしば粘土化し、非常にやわらかくなっている。

段丘模式断面図(第2図)をみると、最高位の谷上面は、他の段丘面に比べて起伏に富み、上部との境は明瞭ではない。また、下部の米原面との間にほんのりとした段丘崖が認められず、傾斜と起伏の違いによって区別している。それぞれの区別はローム層によって分けられている。

谷上面の分布は扇状地状の所に発達し、山地と接しており、標高450~600mを測る。米原面は津南の段丘面のうち、最大の広がりを持つ。中津川の左右両岸のほか、信濃川左岸にも分布しており、標高340~520m

を測る。

卯ノ木面は米原面の段丘崖の下に発達しており、その分布はごく狭く限られる。標高300~350mを測る。

朴ノ木坂面は信濃川とその支谷に沿って発達し、米原面や卯ノ木面の段丘崖の下に発達しており、標高250~400mを測る。

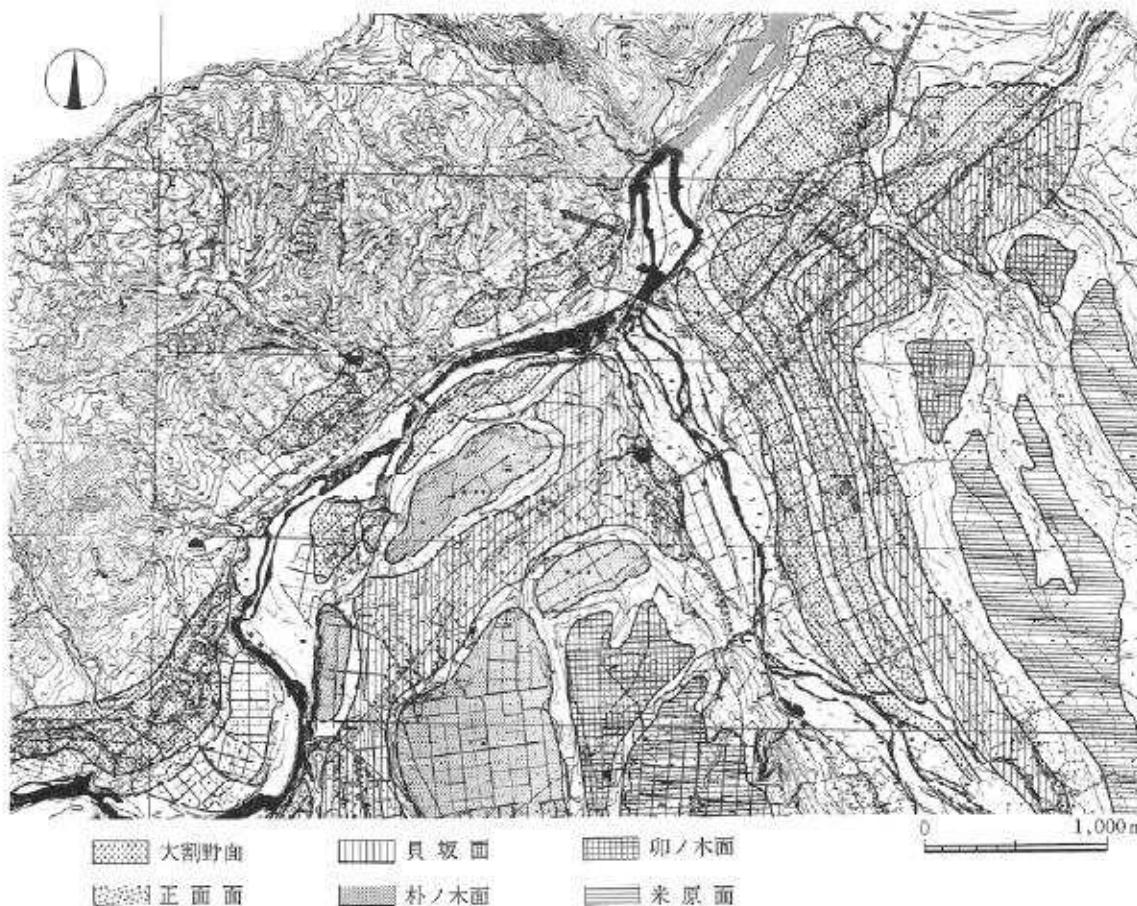
貝坂面は信濃川とその支谷に沿って発達し、段丘面はきわめて平坦であり、標高230~380mを測る。信

第1表 段丘の対比と遺跡の位置

地質時代	ルーム番	風化带	遺跡・中里・十日町古跡		春秋ほか (1986)	遺跡の正統	
			津南・中里	小千谷		津南・中里	
元新世			大野野上遺跡	五名坂遺跡	T1.0	・古曾	卯ノ木面 (場所未定)
		上部	大野野上遺跡	神之瀬遺跡	T2		
		中部	大野野上遺跡	下草平遺跡	T3	・信濃 中里入塩	山外・出汎・土 (越後中期)
		下部	大野野上遺跡	下草平遺跡	T7		
更新後			-KG2-		(T4)		
		上部	V1				
		中部	K1				
		下部	M1	見松遺跡	T5		
新世		上部	M2		(T4)		
		中部	M3				
		下部	M4				
古世		上部	M5	上之山遺跡	T2		
		中部	M6	大野野上遺跡	T2	・上之山 中里入塩 (ライア形石付)	
		下部	M7	大野野上遺跡	T1		
中世		上部	T9	木原II遺跡			
		中部	T6				
		下部	T4				
近世		上部	T3	木原I遺跡			
		中部	T2				
		下部	T1	谷上遺跡			

第2図 津南地域の段丘模式断面図

信濃川段丘グループ「新潟県津南地域の第四系」
(新潟大学教育学部高田分校「研究紀要」13)より



第3図 遺跡周辺の段丘分布図

「新潟火成群」(ブ1001)を加筆修正

濃川河床からの比高は十二ノ木で70mである。

正面面は信濃川とその支谷に沿って発達し、段丘面はきわめて平坦であり、標高210~370mを測る。信濃川河床からの比高は正面で60mである。

大割野Ⅰ面は信濃川とその支谷に沿って発達し、段丘面は非常に平坦であり、標高210~400mを測る。信濃川河床からの比高は人割野で30~35mである。

大割野Ⅱ面は大割野Ⅰ面の段丘崖下に発達する。信濃川とその支谷に沿って発達し分布は狭く、標高200~260mを測る。信濃川河床からの比高は大割野で10m前後である。

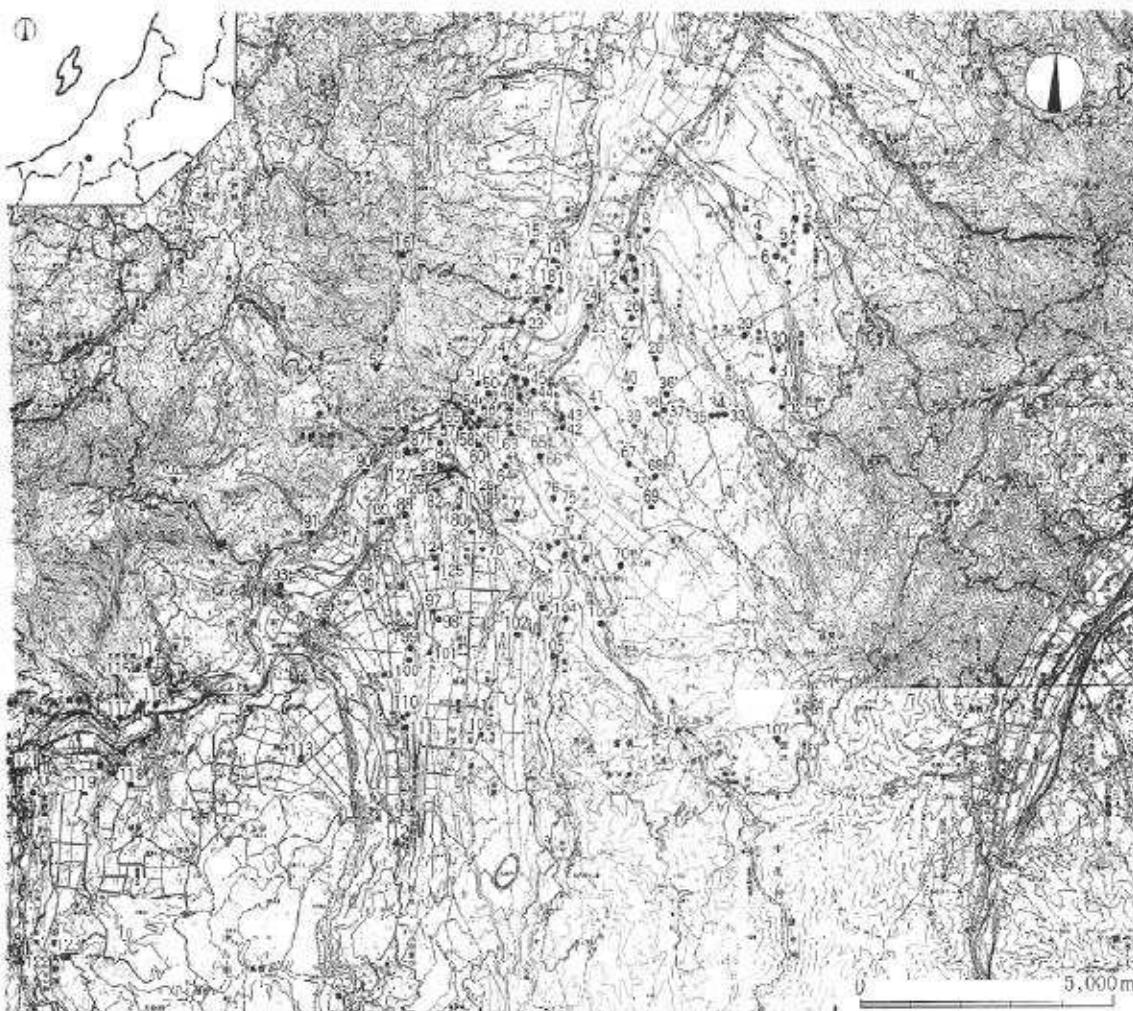
人割野Ⅰ・Ⅱ面にはローム層は堆積していないことから完新世以降に隆起し、離水した段丘であることが明らかになっている。屋敷田Ⅲ遺跡はこの大割野Ⅰ面、あるいは大割野Ⅱ面の段丘内に位置すると考えられる。

2 周辺の遺跡(第4図、第2表)

当遺跡の周辺には、日本の旧石器時代から縄文時代、特に草創期研究に重要な役割を果たした遺跡が数多く存在しているが、ここでは、縄文時代の遺跡を重点的に述べてみたい。

清津川右岸の遺跡をみてみると、1959年に長岡市立科学博物館と中里村教育委員会が発掘した泉竜寺遺跡(41)がある。縄文時代前期の諸磯式土器や無柄石鏟、細身で長い尖頭器などが出土した。また時期は異なるが、縄文時代晚期の大洞B式期の小形の住居跡1軒が検出された[中村・小林・金子1963、金子1964]。中林遺跡(59)は1965年に芹沢長介により調査され、尖頭器と有舌尖頭器が出た[芹沢1966]。田沢遺跡(58)は、1968年に東北大学文学部考古学研究室によって調査され、縄文時代草創期の幅広の粘土紐を用いた隆起線文土器と尖頭器、片刃打製石斧が出土している[芹沢・須藤1968]。森上遺跡(73)は1972年に、は場整備事業が計画されたため、1973年に中里村教育委員会が緊急発掘調査を行った。この遺跡は馬高式土器を主体とした中期の遺跡であり、多くの遺構・遺物は県内有数の大遺跡であることを物語っている[金子・須藤1974]。芋川原遺跡(78)は1975年、中里村教育委員会が遺跡範囲の確認調査を実施した。縄文時代中期中葉から後期前半を主体とする集落跡で、柱穴等が確認されていることから、数十軒の住居跡が予想される[金子・戸根ほか1975]。壬遺跡(57)は、國學院大學文学部考古学研究室によって、1979年から1986年までに5回調査され、さらに東京電力の鉄塔移設に伴う緊急調査が1991年に中里村教育委員会によって行われた。これらの一連の調査によって、全国的にも類例の少ない円孔文土器が検出されたほか、無文土器及び隆起線文土器、押圧縄文土器、爪形文土器などの草創期の土器群が数多く得られた[小林1980・1981・1982・1983・1987、青木・内山1992]。小丸山遺跡(47)や十溝遺跡(50)は、県営は場整備に先立つ分布調査及7F試掘調査によって発見された遺跡である。小丸山遺跡は1992年に中里村教育委員会が調査したもので、縄文時代草創期の隆起線文土器、格条体压痕文土器、爪形文土器などが出土している[石坂・佐藤1994]。干溝遺跡は旧石器時代最終末から古墳時代初頭にかけての複合遺跡である。細石刃に分類される石器や隆起線文土器、押型文土器が出土したほか、撫糸文期の集落遺跡として注目された[佐藤・石坂1994]。通り山遺跡(64)は石沢寅義によって表面採集が行われている。縄文時代早期前半の撫糸文土器や押型文土器、貝殻沈線文土器の三群がある[新潟県史1983]。

つぎに清津川左岸の遺跡を見ていきたい。櫛田遺跡(92)は1950年代半に小野塚正が発見し、石沢寅二、中村孝三郎らが踏査したが、正式な発掘調査は行われていない。しかし、この遺跡は戦後初めての良好な



第4図 周辺の遺跡分布図
(国土地理院「松之山温泉」「十日町」「苗場山」「越後湯沢」1:50,000地図)

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	つづじ原B	縄文	33	珠川A	縄文(前・中・後期)	65	坂ノ上	旧石器・縄文(前・中期)
2	つづじ原A	縄文(中期)	34	珠川B	縄文(中期)	66	上山 小林	縄文
3	森羽 獣	縄文(前期)	35	珠川C	縄文(中期)	67	里敷ノ下	旧石器・縄文(前・中期)
4	天池 C	縄文(中・後期)	36	大井久保	縄文(前・中・後期)	68	道 分	縄文
5	天池 A	縄文(中期)	37	ほんのう	縄文(中期)	69	原 水無	縄文(草創期)
6	天池 R	縄文(中期)	38	ほんのう南	縄文	70	布 場	縄文(早・中・後期)
7	大 清 才	縄文	39	谷 上	縄文(中・後期)	71	下寺 III	縄文(前・中期)
8	官裏 上原	縄文(中期)	40	なんぞん蓋塙	縄文	72	家 ノ 駐	縄文(中・後期)
9	馬場 下原	縄文(前期)	41	泉 竜 守	縄文(前・中・後期)	73	森 上	縄文(前・中期)
10	カケガリ下原	縄文	42	山ノ根 I	縄文	74	下 原	縄文(中・後期)
11	人 石	縄文(前期)	43	山ノ根 - 2	縄文	75	寺 川	縄文(中期)
12	馬場 芦社	縄文(前・中期)	44	大 グ ロ	縄文	76	上山 人 林	縄文(前期)
13	カタガリ	縄文(中・後・後期)	45	狂	縄文(中・後期)	77	祐 望 原	縄文
14	仏子 田	縄文(早・中・中期)	46	向 原	縄文(早・中・後期)	78	手 川 取	縄文(中・後期)
15	万 田 倉	縄文(中期)	47	小 丸 山	縄文(前・中期)	79	下 軸	縄文(前期)
16	天 流	縄文(中期)	48	古 城	縄文(草創・後期)	80	罪 ノ 本 平	縄文(前期)
17	秋 華 山	縄文(前・中期)	49	会 所 離	縄文(前・中期)	81	駆 遠 り	縄文
18	土 横	縄文	50	干 清	縄文	82	樺 ノ 木 平	旧石器・縄文(前期)
19	久 保 寺	縄文	51	狐 森	飛天(草創・後期)	83	堂 駒 敷	旧石器・縄文(前期)
20	沖 ノ 郡	縄文(後期)	52	座敷 ノ 平	縄文(前・中期)	84	下 別 当	縄文(早期)
21	家 ノ 上	縄文	53	北 山	縄文(中期)	85	南 猛	縄文(中期)
22	貝 町 修	縄文(中・後期)	54	穴 川 北	縄文(早・前期)	86	卯 ノ 木	縄文(早期)
23	山 ノ 恵	縄文(中期)	55	穴 川 松	縄文(早・前期)	87	辛 ノ 木	縄文(草創期)
24	川 通	縄文(中・後期)	56	中 林 北	縄文(早・中・後期)	88	前 煙	旧石器・縄文(前・中期)
25	沢 出	縄文(中・後期)	57	士 士	縄文(草創期)	89	燒 松	縄文(前期)
26	桃 山	縄文(前・中・後期)	58	田 沢	縄文(草創期)	90	亥 口	縄文(中期)
27	水 穴	縄文(前・中・後期)	59	中 林	縄文(早・中・後期)	91	菟 菅	縄文(中期)
28	椿 池	縄文(中期)	60	一 里 塚	旧石器・縄文(前・中期)	92	椿 田	縄文(早期)
29	曲 霧	縄文(中・後期)	61	会 所 鹿 莽	縄文(前期)	93	荀 野	縄文(早期)
30	朴 / 木 清 水 A	縄文	62	曲 田	縄文(草創期)	94	眞 肋 前	縄文(中期)
31	朴 / 木 清 水 B	縄文	63	中 房	旧石器・縄文(前・中期)	95	足 沙 門 下	縄文(早・中期)
32	落 原	縄文	64	通 里 山	縄文(早・中期)	96	笠 尾	縄文(早期)
						97	里 敷 田 III	縄文(前・中期)
						98	里 敷 田 IV	縄文(前・中期)
						99	里 敷 田 V	縄文(前・中期)

第2表 周辺の遺跡一覧表

押型文土器資料として注目された。また、調査者の中村孝三郎は、織維を含む平底の破片が押型文土器の下層に発見されたとした〔新潟県史1983〕。ト別当遺跡(84)は、長岡市立科学博物館によって1957年に発掘されている。石器は少數の無茎石鏟や磨製石斧のほか、多数の長三角形を呈する片刃づくりの長さ8-10cmの打製石斧があり注目される。また土器は押型文土器片と尖底土器片が出土した〔中村1959〕。卯ノ木遺跡(86)は1956年に長岡市立科学博物館が発掘調査を行っている。土器は1,000点あまり出土し、その内の約67%が押型文土器であった。県内における押型文土器遺跡の最初の学術調査であり、新潟の縄文土器編年の早期の空白をうめた学史的にも重要な発掘調査であった。また、押圧縄文土器が77点と爪形文土器が1点出土している。押圧縄文土器は調査当時は新潟では初見のもので全国的にもまれな例といわれた。この発掘調査の際に隣接する本ノ木遺跡で、尖頭器が多数散在することが改めて注目された〔中村1963〕。本ノ木遺跡(87)は、1956年に芹沢長介らによる第一次調査が行われた。多数の石器類が出土したが大部分は尖頭器であり、表面採集品を含め1,500本を越える程であった。石鏟や石斧など日常使用の石器類がごく少量で、また土器も少ないのは専ら尖頭器製造所として利用された遺跡であったことをよく表している〔芹沢・中山1957〕。1957年、山内清男は本ノ木遺跡の第二次調査のために来県した折、長岡市立科学博物館を訪ね卯ノ木遺跡の押圧縄文土器に強い関心を示した。山形県日向洞窟遺跡の出土品の中に類似したものがあり、しかも本ノ木遺跡の第一次調査で多数の尖頭器とともに発見されていたからである。この土器を石器群と同時代と考える山内説に対して、両者は別の時代とする芹沢説は、いわゆる「本ノ木論争」へと発展していった。神山遺跡(125)は1958年に芹沢長介・麻生優によって発掘調査が行われている。出土石器はリップ形石器が16点、神山型彫器が28点、石刀126点などである。特に彫器は極めて特徴的な形態を示し、神山型彫器と名付けられた。また、縄文時代前期初頭の花積下層式土器に並行する土器も出土している〔芹沢・中村・麻生1959〕。沖ノ原遺跡(20)は津南町教育委員会により、1972年から1973年にかけて3回の発掘調査が行われ、中央に広場をもつ径120mの大環状集落であることが判明した。西南方面に湧水地をもつ典型的な縄文時代の集落跡で、発掘調査により集落構造の全体が明らかにされたのは県内では初めての例である。縄文時代中期全般にわたって営まれ、確認された住居跡には、竪穴住居跡49、長方形大形家屋跡3、敷石仕居1の計53軒が検出された。遺物は縄文時代中期後半の土器・石器が主体を占め、特にクッキー状炭化物の出土が注目される。この遺跡は1978年に国史跡に指定された〔江坂1976、江坂・渡辺1977〕。堂尻遺跡(96)は1975年に津南町教育委員会により範囲確認調査が実施された。この遺跡は大きく4地点に分かれ、特に西側のD地点では竪穴住居跡が2軒確認されている。住居跡出土の土器は深鉢を中心とし、中部山岳地方の影響を受けたと思われる楕円区画、北陸地方との関係を示す中期前半の竹管文をもつもの、阿工台式土器の特徴をもつものなどがあり、当地方独自の様相を呈している〔県教委1958、右沢1976〕。屋敷田Ⅱ遺跡(127)は屋敷田Ⅲ遺跡の一段上の段丘に位置し、1993年に津南町教育委員会によって発掘調査が行われた。この遺跡は後期旧石器時代、縄文時代草創期、早期末、後期中葉の遺物が出土している。遺構は検出されなかったが、遺物では土器のほか、尖頭器、有舌尖頭器、不定形石器などが出土した〔佐藤1995〕。屋敷田Ⅱ遺跡の上段には、屋敷田Ⅰ遺跡(126)が存在する。石沢寅二によって表面採集が行われている。勝坂式、加曾利E2式などの土器や打製石斧、石匙などの石器が得られた。範囲も広く、遺物包含層の保存状況も良好である。東南部には旧石器時代のものと認められる遺物の散布もある〔津南町史1984〕。

第Ⅲ章 第一次調査の概要

1 調査の方法と経過(第5-20図)

屋敷田遺跡は、その立地する段丘によって、上段からⅠ、Ⅱ、Ⅲと分けており、第一次調査においても、おむね年度ごとに 遺跡ずつ調査を行った。

調査方法としては、調査対象範囲において、 $2 \times 2 \sim 4\text{ m}$ のトレンチを任意に設定して、遺構・遺物の有無を確認しながら調査を進めた。また、平成2年度に実施した路査結果や表面採集資料等から旧石器時代や縄文時代草創期の遺跡の可能性があるため、表上から人力によるトレンチ掘削を行った。その際、ジョレン等を借りて、礫層まで掘削し、検出した遺構・遺物等や空堀したトレンチは凹面、写真等に記録した。

以下、名遺跡の調査の概略を記す。



第5図 第一次調査トレンド付図

A 平成 5 年度(第5図)

調査区は屋敷田Ⅲ遺跡部分にあたる。調査対象面積1,200m²に対して、2×2~6mのトレンチを16か所設定した。遺物は耕作土から散発的に出土するのみで、第二次調査は必要ないと判断に傾きかけていたが、8トレンチの疊層中のやや黒ずんだ土層から剝片が1点出土した。そこで、この剝片が出土した8トレンチから11トレンチの間を拡張して調査を進めたところ黄褐色土層から土器が集中して出土した。それらについては縄文時代草創期の土器の可能性があるため、國學院大学の小林達雄教授の指導を受け、該期のものと確認した。それらのことを踏まえて、県教委及び建設省と協議した結果、第二次調査範囲を段丘崖部分を除いた1,000m²として、そのうち橋脚建設部分の425m²を平成5年度に調査を行うことになった。したがって、第二次調査は平成5年度と6年度の2か年で実施することになった。

B 平成 6 年度、平成 7 年度(第5~20図)

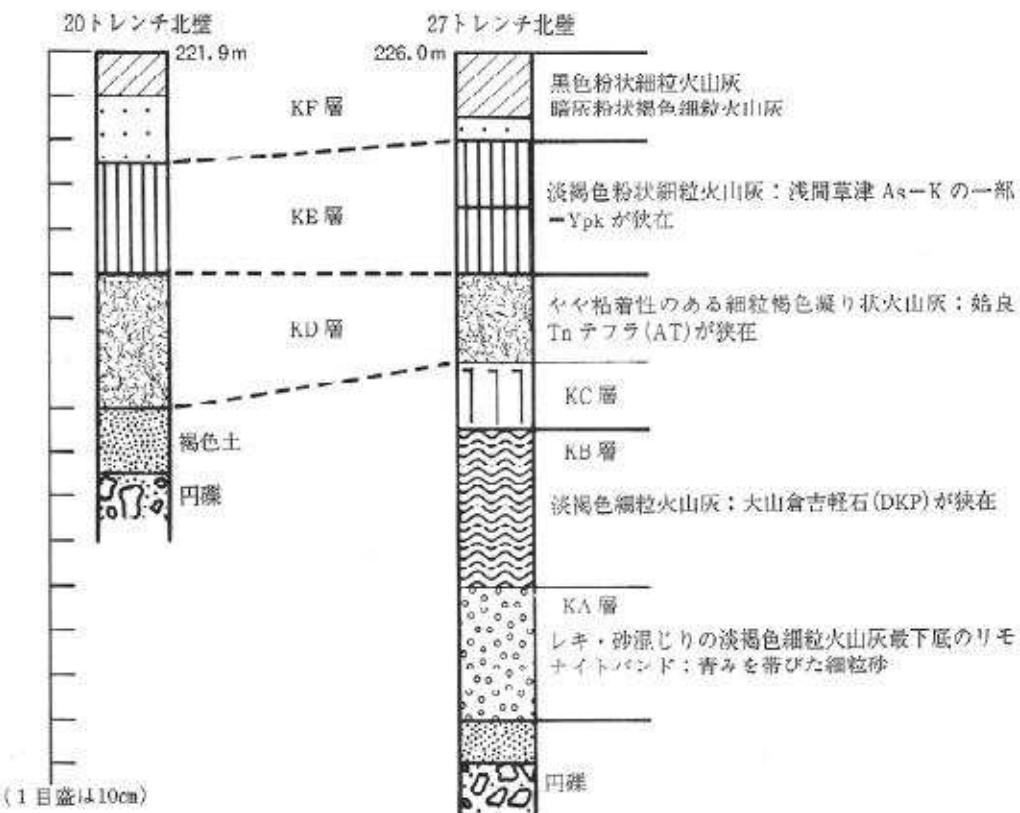
調査区は屋敷田Ⅰ・Ⅱ遺跡部分にあたる。調査区内の民家の立退きや用地の買取が済れ、2遺跡の調査可能な部分から隨時、調査を行ったため、2か年にわたる調査となった。屋敷田Ⅱ遺跡については10トレンチからは剝片類、21トレンチからはスクレイバー、27トレンチから疊器、29トレンチからは石鏃などの石器が出土した。2トレンチからは五領ヶ台式土器が出土した。17トレンチについては土坑も検出されたので、拡張して調査を行ったが、出土した14点(スクレイバーと疊器、剝片類など)の石器の大半が上層からであり、また、遺構も検出されなかった。最終的には疊層まで掘削した。20トレンチの疊層からは石器とも、自然疊とも判断しかねる疊が出土した(第16図)。そこで、その周辺を拡張して調査をしたところ、同類の疊が15点、約1.5m四方の範囲で出土した。それらの疊については埋文事業団内で協議したが、人工品と自然疊の両論がてやはり判断できない状況であった。そこで、文化庁記念物課の岡村主任調査官にそれらの疊について実見してもらったところ、石の剝離の状況から見て自然破碎の可能性が大きいが、断定できないものもあり、周辺を拡張し詳細に調査したほうがよいという指導を受けた。

また、地質学の視点から、県立六日町高等学校の荒川勝利教諭、長岡市立大島中学校の渡辺秀雄教諭に現地調査を行ってもらい、次のような指導を受けた。

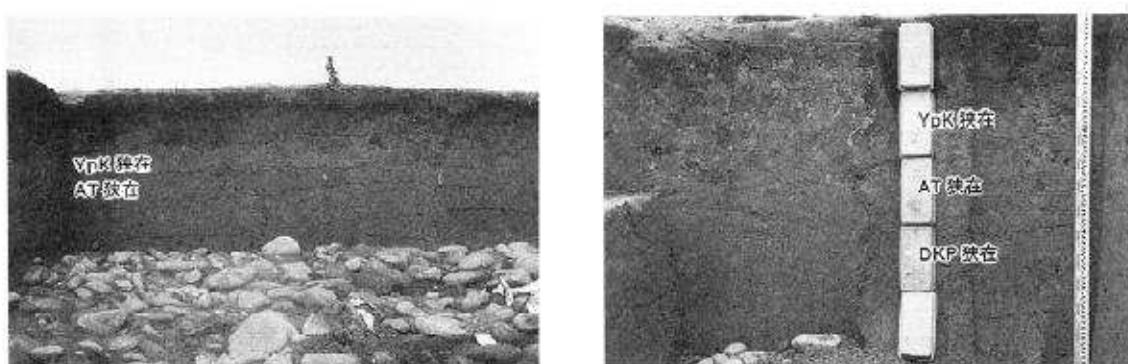
- ① 出土した石はガラス質の多い安山岩で、周辺のトレンチの疊層から1点見つかっただけであるので、もう少し周辺の資料採集が必要である。
- ② 屋敷田Ⅱ遺跡の20トレンチの北壁面と屋敷田Ⅰ遺跡の27トレンチの北壁面を火山灰分析等による疊層までの分層を行ったところ、屋敷田Ⅱ遺跡の立地する段丘が正面面(約2.5~3万年前)で、屋敷田Ⅰ遺跡の段丘が貝坂面(約5万年前)であり、したがって、その下段の屋敷田Ⅲ遺跡の段丘は大割野面であると考えられる(第6図)。

以上のような指導をもとに、20トレンチ周辺を拡張して調査した結果、明らかに自然破碎と考えられる疊が40点余り見つかった(第7図)。そして、次のような調査分析から、石器か否か断定できなかった疊は自然の破碎によるものと判断した。

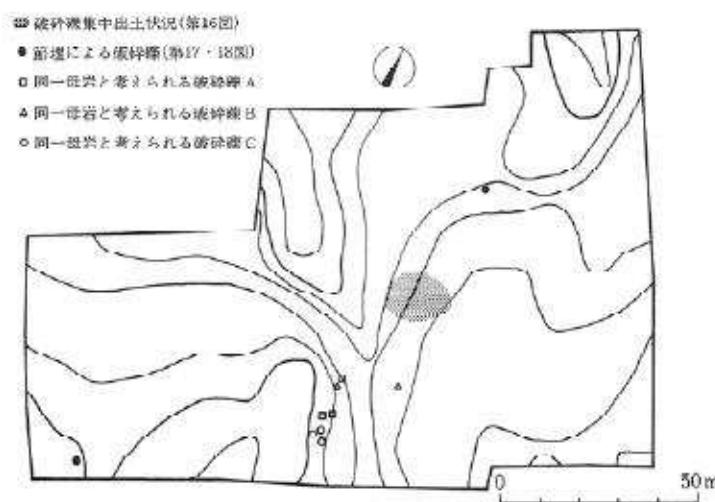
- ① 20トレンチ周辺の拡張部分で見つかった破碎疊の石材と、石器か否かで問題となっている疊の石材はいずれも無筋晶質安山岩である。
- ② 20トレンチ周辺の拡張部分からは、節理によって自然に破碎している疊片が数点見つかった(第17・18図)。



- 貝板ローム層 KD、KE、KF 層が堆積し、正齒段丘に對比される。
- 貝板ローム層 KA、KB、KC、KD、KE、KF 層が堆積し、貝板段丘に對比される。
- 屋敷田畠道路の段丘レキ層の堆積年代は、ローム層の層序及び大山灰堆積層から2.5~3.5万年前に堆積したものと推定される。微碎縛が埋積したのは、おそらく3万年前くらいが妥当と思われる。



第6図 屋敷田Ⅰ・Ⅱ遺跡火山灰分析結果(荒川・渡辺両氏作成)
及び試料採取地点断面(左:20トレンチ北壁 右:27トレンチ北壁)



第7図 20トレンチ周辺採取部の破碎縛出土状況

③ 20トレンチ周辺の拡張部分からは、同一母岩と考えられる破碎礫が約1.5~2m四方の範囲で出土するなど石器か否か問題となった礫と似たような出土状況例が何例かある(第7・19図)。

また、このような破碎礫が作り出された要因としては次のようなことが考えられる。

まず、全体に破碎礫のバルブが不自然で、剥離が平坦なことから、母岩が節理によって破碎したようである。また、個々を観察した場合、片面加工の剥離が多いことから、ローリングではなく、滑りによって、円礫等に激突し、破碎した可能性がある(第10図130~134)。そして、破碎礫はいずれも砂質シルトとローハーの混在する円礫の隙間で出土していることから考えて、川の流れや岸部分の礫との激突など自然の力が加わる可能性は十分あったと推測できる。

このような結果をふまえて、屋敷田Ⅱ遺跡に関しては、第二次調査の必要はない判断した。

屋敷田Ⅰ遺跡の第一次調査分については、調査対象面積1,400m²のうち、870m²が上取りや盛り土等により、礫層まで擾乱されている現状であったため、530m²のみ第一次調査を行い、第二次調査必要なしと判断した。

ここでは、検出された遺構と遺物について若干の説明を記すこととする。

(1) 遺 構(第8図)

土坑：17トレンチから検出されたが、土坑のほぼ中央をトレンチ掘削の際に削る結果となり、両端を残すのみとなった。そのため、正確な平面プランは確認できず、推定線から考察することにする。遺構確認面の標高は221.2mで、上端の長軸約3.4m、短軸約2.3m、下端の長軸3m、短軸1.9m、深さは90cmを測る。形態については平面が橢円形、断面は底面がやや広がるフッスコ状を呈する。礫層の直上まで掘り込んでいるが、底部に小ピットを有しない。

埋土は褐色土系の土がレンズ状に堆積し、全体に直径1.5mm以下の炭化物を含む。壁際には崩落によると推測されるローム系の埋土が認められる。

遺構内からの出土遺物は皆無であり、近くの2トレンチから五領ヶ台式土器が出土しているものの、木の根による擾乱土からの出土であることなどから、この土坑の時代、時期及び性格は明確ではない。

(2) 遺 物(第8~10図、図版35・36)

縄文土器(第8図)：2トレンチの木の根による擾乱土から中期初頭の五領ヶ台式土器が出土している。口縁部形状が半縁の深鉢になると推定される。口径は11.2cmで、胎土は黒色から褐色を呈し、口縁部を中心内外面にミガキをかけているようであるが、表面の風化、剥落が著しい。口唇部には横位に細い沈線を一条引き、その上から刺突文をめぐらしている。胴部の地文は縦方向の縄文である。幅3mmの3条あるいは4条の半截竹管による半隆起線が縦方向に引かれ、その両端に下から上方向に刺突が加えられている。

石錐(115)：凹状無茎石錐で、長さ2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ0.5gを測る。石材は珪質凝灰岩である。上半を欠損しているが、側縁から頂部にかけては直線的に伸びる。脚端部が鋭く尖る。

スクレイパー(116~118)：3点出土している。石材は、117が珪質凝灰岩であるほかは珪質頁岩である。116は厚手の剥片を素材とする。残存する剥離面は単剥離打面であり、アスファルト(?)が少量付着している。調整は右側縁を中心に進められている。117は素材となった剥片の打面部分を大きく剥離し、打痕を除去している。その後、下端の裏面に剥離を施し、次に表面の全周を剥離して形を整えている。表面下端には、使用により生じたとみられる微細な剥離痕が連続している。118は縦長剥片を素材とし、上・下

端に刃部を作出している。上端の刃部稜線は磨耗し、鈍くなっている。

二次加工のある剝片(119) 上端と右側縁に二次加工を施す。左側縁は折断され、残存しない。石材は珪質頁岩である。

使用痕のある剝片(120) 碓面を打面とする横長の剝片を素材とし上端と右側面は碓面である。下端に微細な剝離が連続する。

礫器(121・122) 2点出土し、石材は2点とも珪質頁岩である。121は礫の周開を打ち欠いて生じた下端部の急斜度な縁辺を使用していたとみられる。不連続だが、微細な剝離痕が残る。正面には黒色付着物が観察される。122は破碎礫の急角度をなす割れ面に、剝離を連続的に加えている。正面に自然面を残す。

石核(123) 剥離作業は打面を表裏面に不規則に移動しながら進められている。

剝片(124・129) 124の打面は加撃の際に破損し、残存しない。表面右側縁に剝離が施されている。裏面の左半分は節理面に沿って折断されている。125は全体的に原石の形を残す。表面下端部で剝離面が連続している。右側縁と上端部の剝離は下端部のものに比べ、風化が進んでいる。126は右側縁に自然面を残す。表裏面に不規則に移動しながら剝離作業が行われている。127は剝離時に打面が欠損した厚手の剝片を素材としている。直線的な打面側の縁辺を刃部として用いたと推定され、微細な剝離痕が連続している。128は表面左側を折断している。鋭利な縁辺の底縁に微細な剝離を施す。129は表裏面ともほぼ中央に向って、大・中形の剝離痕が見られる。

2 調査体制

調査は年度ごとに、以下のような体制で行われた。

＜平成5年度＞

調査主体	新潟県教育委員会(教育長 本間栄二郎)
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)
管理	藍原直木(専務理事・事務局長) 渡辺耕吉(総務課長) 茂田井信彦(調査課長)
庶務	藤田守彦(総務課主事)
調査指導	寺崎裕助(調査課第二係長)
調査担当	小田山美了(調査課第二係文化財専門員)
調査職員	羽賀信幸(　　文化財専門員) 江口友子(　　嘱託員)

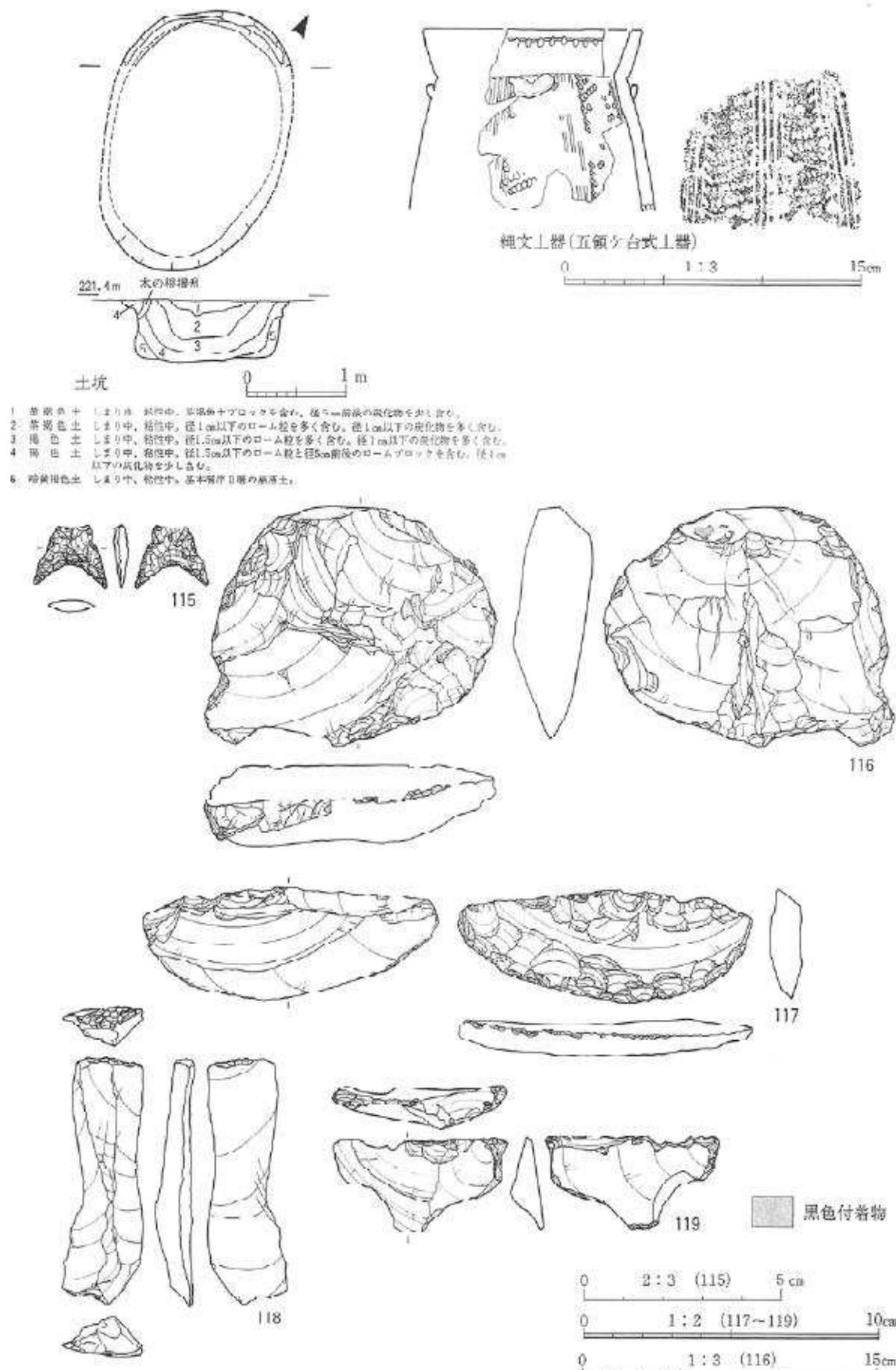
＜平成6年度＞

調査主体	新潟県教育委員会(教育長 本間栄二郎)
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)
管理	藍原直木(専務理事・事務局長) 渡辺耕吉(総務課長) 茂田井信彦(調査課長)
庶務	泉田誠(総務課主事)

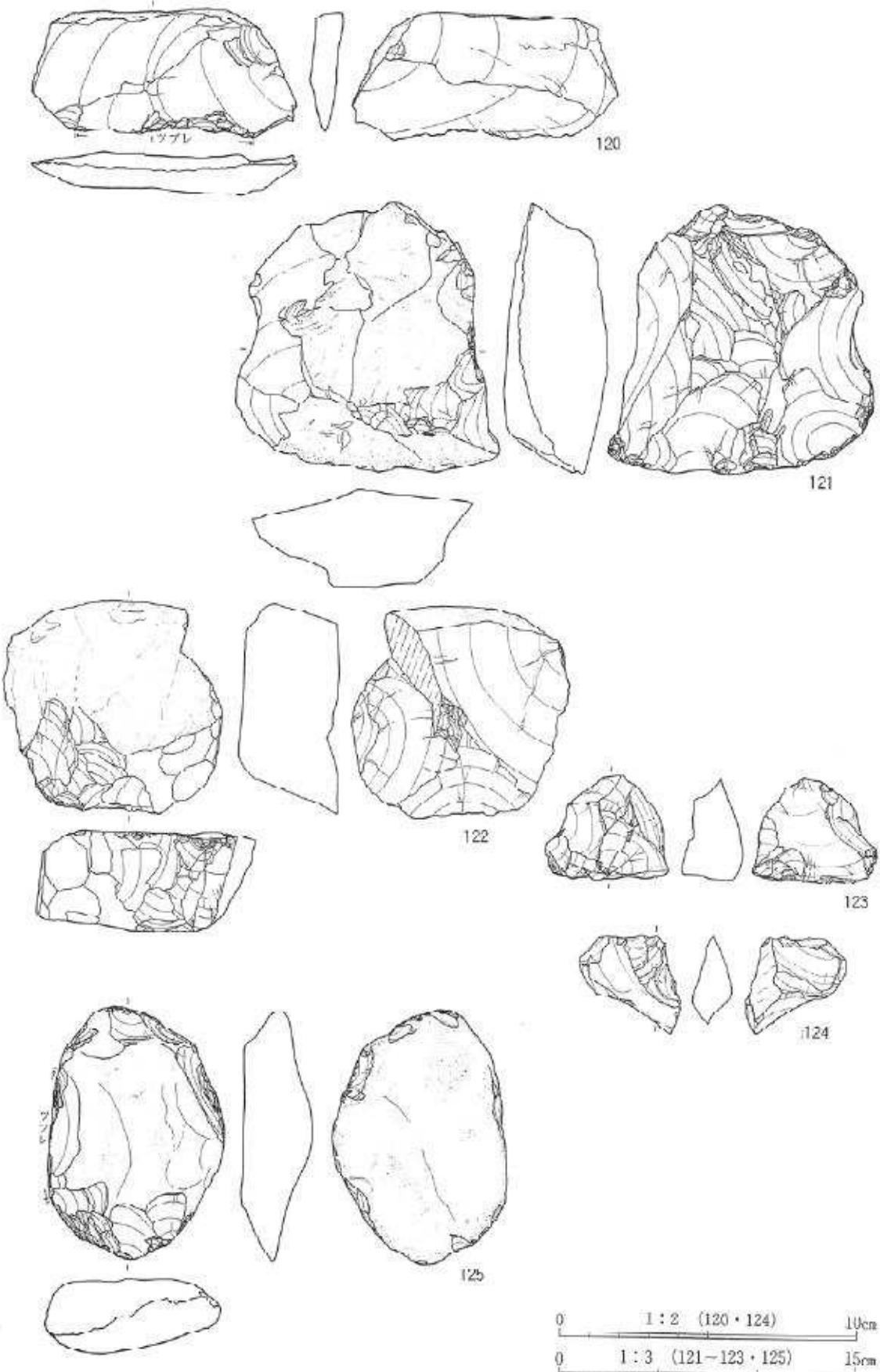
調査指導 寺崎裕助 (調査課第二係長)
調査担当 中澤 敏 (調査課第二係主任調査員)
調査職員 内山 徹 (　　文化財調査員)
江口友子 (　　文化財調査員)

<平成7年度>

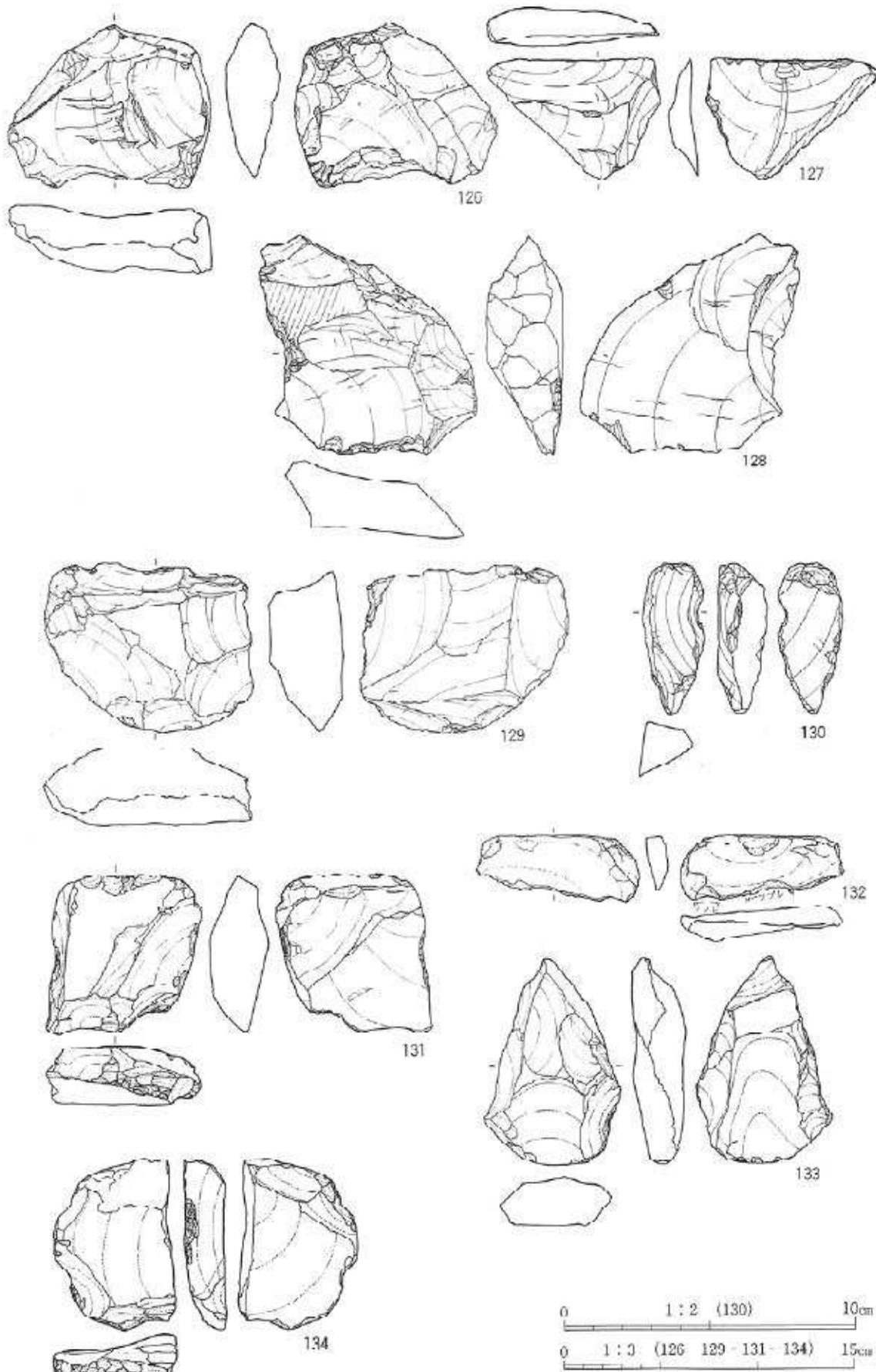
調査主体 新潟県教育委員会(教育長 平野清明)
調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 平野清明)
管 理 監原直木 (専務理事・事務局長)
山上利雄 (総務課長)
龟井 功 (調査課長)
庶 務 泉田 誠 (総務課主事)
調査指導 寺崎裕助 (調査課第二係長)
調査担当 中澤 敏 (調査課第二係主任調査員)
調査職員 井狩 歩 (　　文化財調査員)



第8図 第一次調査検出遺構及び出土遺物実測図



第9図 第一次調査出土遺物実測図1



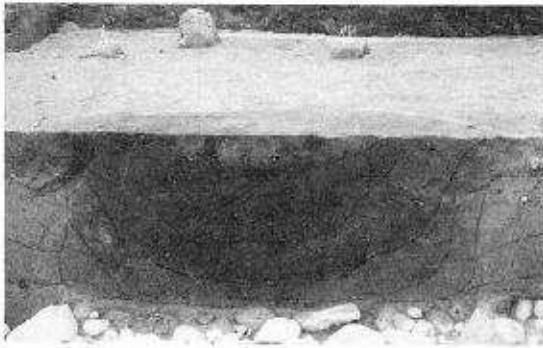
第10図 第一次調査出土遺物実測図 2



第11図 平成7年度第一次調査(屋敷田Ⅱ清説)風景(南西から)



第12図 平成7年度第一次調査(屋敷田Ⅰ遺跡)風景(北東から)



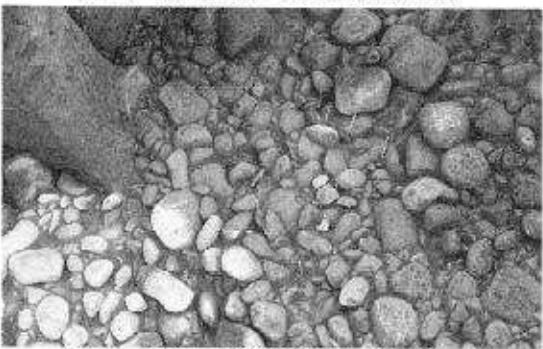
第13図 12トレンチ上坑断面(北から)



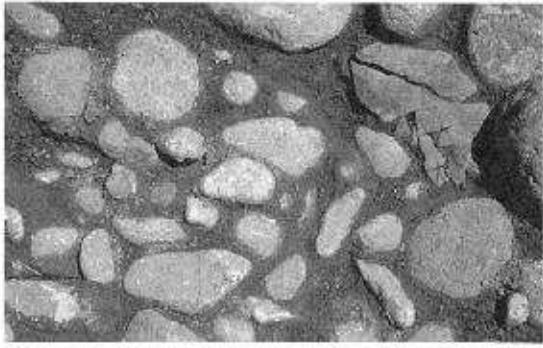
第14図 12トレンチ土坑完掘(北西から)



第15図 2トレンチ(五領ヶ台式土器出土)完掘(南西から)



第16図 20トレンチ破砕砾出土状況(西から)



第17図 20トレンチ周辺拡張部分破砕砾出土状況(西から)



第18図 30トレンチ周辺拡張部分破砕砾出土状況(北から)



第19図 20トレンチ周辺拡張部分破砕砾出土状況(南から)



第20図 20トレンチ周辺拡張部分完掘(南西から)

第IV章 第二次調査の概要

1 調査の方法と経過(第21-23図)

A 調査方法

＜平成5年度＞

10月12日から22日までの第一次調査の結果から縄文時代草創期の遺跡であることが判明し、継続して第二次調査を行うことになった。草創期の遺跡であることから基本的に表土から入力で薄く掘削していく方法を探った。第一次調査で開けたトレンチの壁面を残し十層観察を行いながら、北から南に向かって順次層位ごとに包含層を掘削していく。Ⅶ層とⅧ層の上面まで掘削した時点と完掘した後の3回にわたって地形図を作成した。集中して検出された遺物は出土分布図を作成しながら、層位・標高を記録し、集中区ごとに通し番号を付けて収納した。単独で出土したものについてはグリッドと層位を記録して収納した。排土は輸車及びクローラーで所定の位置まで搬出した。

＜平成6年度＞

平成6年度も基本的に平成5年度と同様に北から南に向かって調査を行った。平成5年度の第一次調査で発掘したトレンチで基本層序の確認を行った。トレンチの壁面を流路に直交するヒクションベルトとして残し、さらに流路中央に沿ったセクションベルトも設定した。排土は一段高位の段丘まで搬出するため、斜面にベルトコンベアを設置しなければならず、安全管理については十分な配慮を行った。集中して検出された遺物は集中区ごとに通し番号を付けて出土分布図を作成しながら、層位・標高を記録して収納した。単独で出土したものについてはグリッドと層位を記録して収納した。無文土器、隆起線文土器などが集中して出土した集中区の排土は、1×1mの小グリッドに区画し、層位ごとに土嚢袋に収納した後、現場で水洗を行った。

B 調査経過

＜平成5年度＞

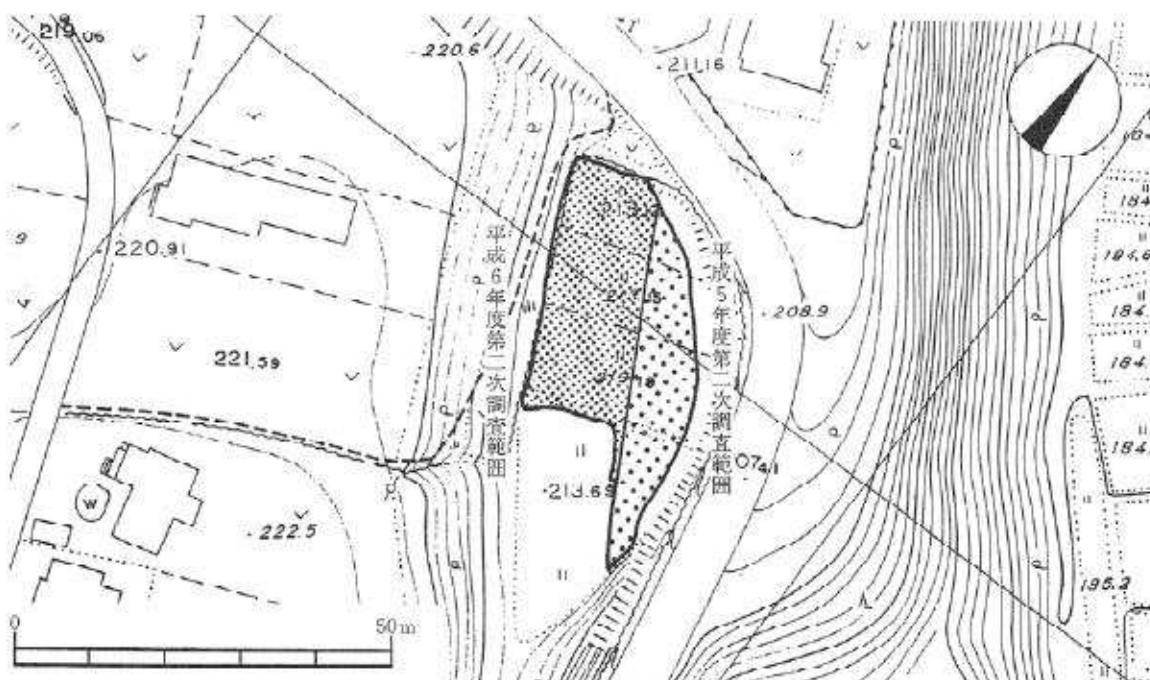
第一次調査の結果を受け、引き続き橋脚建設部分1,000m²のうちの425m²について第二次調査に着手することになった。平成5年度と6年度の調査範囲の境界杭の打設は建設省が行った。10月28日から第一次調査の後始末及び第二次調査の準備を行った。平成6年度の調査範囲になったトレンチ6-10・12・13内はビニールシートで壁面まで覆って埋め戻し、さらに現地表面にビニールシートを敷いてその上に排土を置いた。第一次調査で多数の土器と石器が出土したトレンチ8と11の拡張部分を集中区1とした。2Eグリッドで同一母岩と思われるフレークが多数出土したことから集中区2とした(整理の段階で1、2点を除き、そのほとんどが破片と判明したため集中区2の番号は削除した)。さらに東南の1Gグリッドで縄文時代早期の押型文土器がまとまって出土した。押型文土器集中区とした(整理の段階で、集中区8が集中区1に統合され欠番になったため、押型文土器集中地点を集中区8に名称を変更した)。11月12日、1・2Hグリッドからフレー

クが多数出土し、集中区3・4とした。19日には國學院大學小林達雄教授より現地で調査の方法・遺物等について指導を受けた。12月8日、最終調査として疊層に2か所トレンチを掘削して疊層下の遺構・遺物の有無を確認したが検出できなかった。

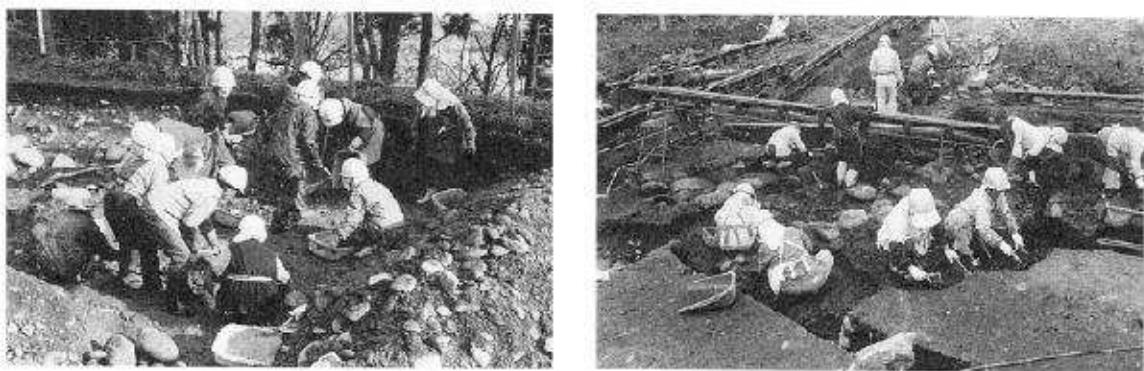
12月9日、建設省立ち会いの下、未調査範囲は完全現状維持で工事をすること、また今年度の排土の運搬は、末年度調査員が立ち会って移動することを確認して引き渡しを行った。10日に器材を撤収して調査を終了した。

〈平成6年度〉

平成5年度の調査範囲はすでに橋脚建設のため完全に削平されていた。清津橋建設工事が急がれていたため、雪の溶けるのを待たず1m近い積雪を建設省が除雪を行って調査に入る時期を早めた。4月12日からは調査員の立ち会いの下、現地表面を掘削しないように注意を払いながら平成5年度の排土を重機で除去し、クローラーダンプで搬出した。20日から作業員で重機が掘り残した排土と表土の除去を行った。つづいて調査区全体を層位ごとに掘削して遺物の検出に努めた。水田の耕作土の下には水田化する時に搬入したと考えられる大量の疊が存在していた。それらの疊はベルトコンベアで搬出できないような大型の



第21図 第二次調査範囲区分図



第22図 発掘調査風景(左:平成5年度 右:平成6年度)

ものが多く、取り除くのに大変な労力を費やした。5月18日、3DグリッドのV層から弥生土器の少片がまとまって出土したので集中区5として出土地点・層位・標高を記録して収納した。弥生土器はI・II層からも散発的に出土していた。20日からは下段の調査と並行して、上段(厚敷田Ⅰ遺跡)・中段(厚敷田Ⅱ遺跡)の調査範囲内に任意にトレンドを設定して第一次調査を開始した。24日には3Gグリッドで多数のフレークと石匙及び土器が出土したので集中区6として記録し取り上げた。31日には水田東側の1.5×4mの細く残った範囲の調査を行った。小型の無文土器の破片が出土し、集中区7とした。6月3日には県立津南高等学校の生徒約46名が社会科の時間を利用して見学を行った。9日には3D-70グリッドの壁面を清掃中にⅢ・Ⅳ層から弥生土器の破片がまとまって出土した。しかし、斜面が迫っていたため範囲を拡張することは難しかった。中段からの流れ込みとも考えられた。並行して集中区の掘削土の水洗を行った。この堆土の水洗で、5mm前後の微細な土器やチップが十数点採取された。また、Ⅶ・Ⅷ層上面で全体の地形図を作成した。遺物の分布状況を見ると、流路の南側に偏っていることから調査区外の水田下に遺物分布の広がりが予想された。22日には上・中段で行っていた第一次調査も終了し、埋め戻しを行った。23日には調査区を清掃して上空からの光掘写真と遠景写真の撮影を中里村方面から行った。梅雨時だったが、当日は天候に恵まれ絶好の撮影日和となつた。27日には最後の河道の地形図を作成した。28・29日には最終調査として河道の疊を重機で取り除いて、疊層下の遺構・遺物の有無を確認したが、検出されなかつたのですべての調査を終了した。

7月1日に調査期間中お世話になった方々へ調査終了の報告と挨拶を行い、器材を埋蔵文化財調査事業団に運んで現場を撤収した。

2 調査体制

平成5・6年度の発掘調査体制は以下のとおりである。

<平成5年度>

調査期間	平成5年10月25日～12月10日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)
管 理	藍原直木(専務理事・事務局長) 渡辺耕吉(総務課長) 茂田井信彦(調査課長)
庶 務	藤田守彦(総務課主事)
調査指導	寺崎裕助(調査課第二係長)
調査担当	小田由美子(調査課第二係文化財専門員)
調査職員	羽賀信幸(　　・文化財専門員) 江口友子(　　・嘱託員)

<平成6年度>

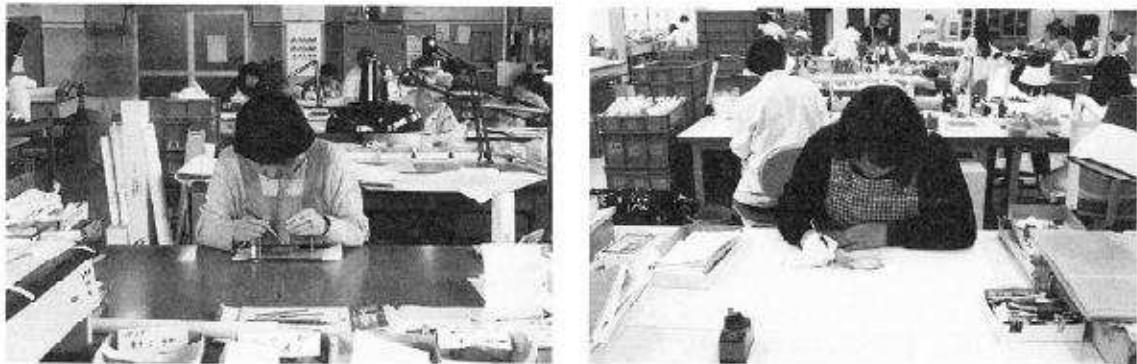
調査期間	平成6年4月18日～7月1日
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄二郎)
管 埋	藍原直木(専務理事・事務局長)

渡辺耕吉（総務課長）
 茂田升信彦（調査課長）
 庄 業 泉田 誠（総務課主事）
 調査指導 寺崎裕助（調査課第二係長）
 調査担当 中澤 純（調査課第二係主任調査員）
 調査職員 内山 徹（　　文化財調査員）
 江口友了（　　文化財調査員）

3 整理作業

平成7～9年度の整理作業体制は以下のとおりである。

整理期間 平成7年12月9日～平成10年3月31日
 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）
 整理・報告 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野清明）
 整理指導 寺崎裕助（調査課第二係長）
 整理担当 中澤 純（調査課第二係主任調査員）
 整理職員 江口友子（　　文化財調査員）



第23図 整理作業風景（左：石器実測 右：トレス）

第V章 遺 跡

1 概 観

当遺跡では、2筋の河道跡が検出された。段丘の上位面に沂いものから、河道1、河道2と呼称する。その河道跡の堆積土から、遺物集中区が8か所検出された。時代時期の分かる遺物集中区は、縄文時代草創期が4か所、縄文時代早期が1か所、弥生時代が1か所である。

縄文時代草創期の集中区は、集中区1、集中区6、集中区7、集中区9である。集中区1は無文土器と隆起線文土器が多く出土している。集中区6からは有舌尖頭器や半月形尖頭器、石匙などのはかに石核、剥片類(163点)、碎片等合計200点余りの石器が集中して出土している。これらの石器の中には隆起線文・微隆起線文土器と出土しているものもあり、隣接する集中区1の無文土器と同じ層位から出土していることから考えても、縄文時代草創期の石器と推測できる。集中区7は黄褐色シルト層が比較的安定して堆積する地点で、小型の無文土器が集中して出土している。共伴する石器は剥片7点である。集中区3、集中区4は河道2の左岸に落込む斜面部分の遺物集中区で、両極石器や石核が多く出土している。その中には、円錐に同じような加工を施して製作されているものも何点か含まれている。微隆起線文土器が数点出土している。

縄文時代早期の押型文土器は、集中区8から主に出土している。条痕文土器も少量出土している。石器は上層の擾乱土からの出土が多く、これらの土器とは共伴しない。

弥生時代後期から古墳時代初頭の土器は、集中区5からまとまって出土しているが、いずれも小片であり、むしろ調査区全体から散発的に出土しているものから器形や文様を観察できる場合が多い。

遺構は検出されなかった。

2 グリッドの設定(第24図)

当遺跡のグリッドは、調査区の周辺で建設工事用に使われている基準点から座標を起こし、国道117号線の測点No.8とNo.9を主軸として10m方眼を打設し、その方眼の1つを大グリッドとした。長軸は西南西方向にアラビア数字で示し、短軸は南南東方向にアルファベットで示した。調査区内のほぼ中央の3F杭(国道の測点No.9と同じ)の座標軸はX(115497.282)、Y(16658.835)である。なお、グリッドは国土地理院の座標軸に対して、24°西偏している。大グリッドはさらに、1m方眼の小グリッドに分割して、北隅を1、東隅を10、西隅を91、南隅を100と表示した。

杭頭の標高は、国道117号線にある一等水準点No.3614(標高224.1710)を基に算出した。

3 基 本 層 序(第25図)

当遺跡は2筋の河道と岸部分からなっているため、河道にレンズ状に堆積した土層を基本層序としてと

られた。土層はⅠ～Ⅸ層に分けられ、各層から万遍なく遺物が出土している。Ⅲ～Ⅸ層には主に弥生時代及び縄文時代中期～縄文時代草創期の遺物が含まれている。Ⅰ～Ⅱ層からの出土遺物もかなりあるが、Ⅱ層で地固めの円礫が多く見つかっていることから、擾乱によって二次的に再堆積した遺物であると考えられる。Ⅹ層は、河道2で左岸部分にわずかに残っているのみであるが、河道1では右岸から河床部分にかけて堆積がみられる。集中区7付近ではⅩ層が30～40cmと比較的安定して堆積している。河道2は、南東方向に曲折していることから、調査区外の南側に平坦な部分が広がる可能性も考えられる。岸及び河床部分でⅩ層の下に広がる礫層が地山と考えられる。

当遺跡の基本層序の詳細は以下のとおりである。

Ⅰ層：暗灰褐色土(表土)。しまりが少しあり、粘性がやや弱い。全体的に約20～30cmの厚さで堆積している。

Ⅱ層：暗赤褐色土。しまりが少しあり、粘性がやや強い。径20～50cmの円礫を多く含む所がある。

Ⅲ層：暗褐色土。しまりが少しあり、粘性がやや強い。粒子が細かい。酸化したと考えられる赤褐色土が薄い層をなして含まれている所がある。

Ⅳ層：暗赤褐色土。しまりがあまりなく、粘性がやや弱い。

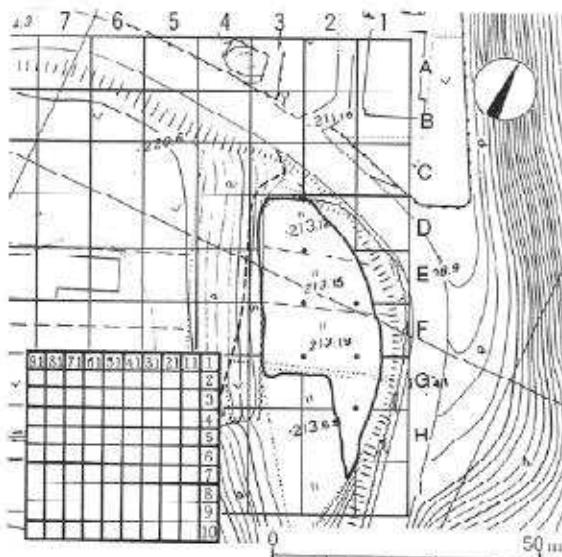
Ⅴ層：暗茶褐色土。しまりが少しあり、粘性がやや弱い。粒子が細かい。

Ⅵ層：茶褐色土。しまりがあまりなく、粘性がやや強い。上層の暗茶褐色土が斑に混在する所がある。

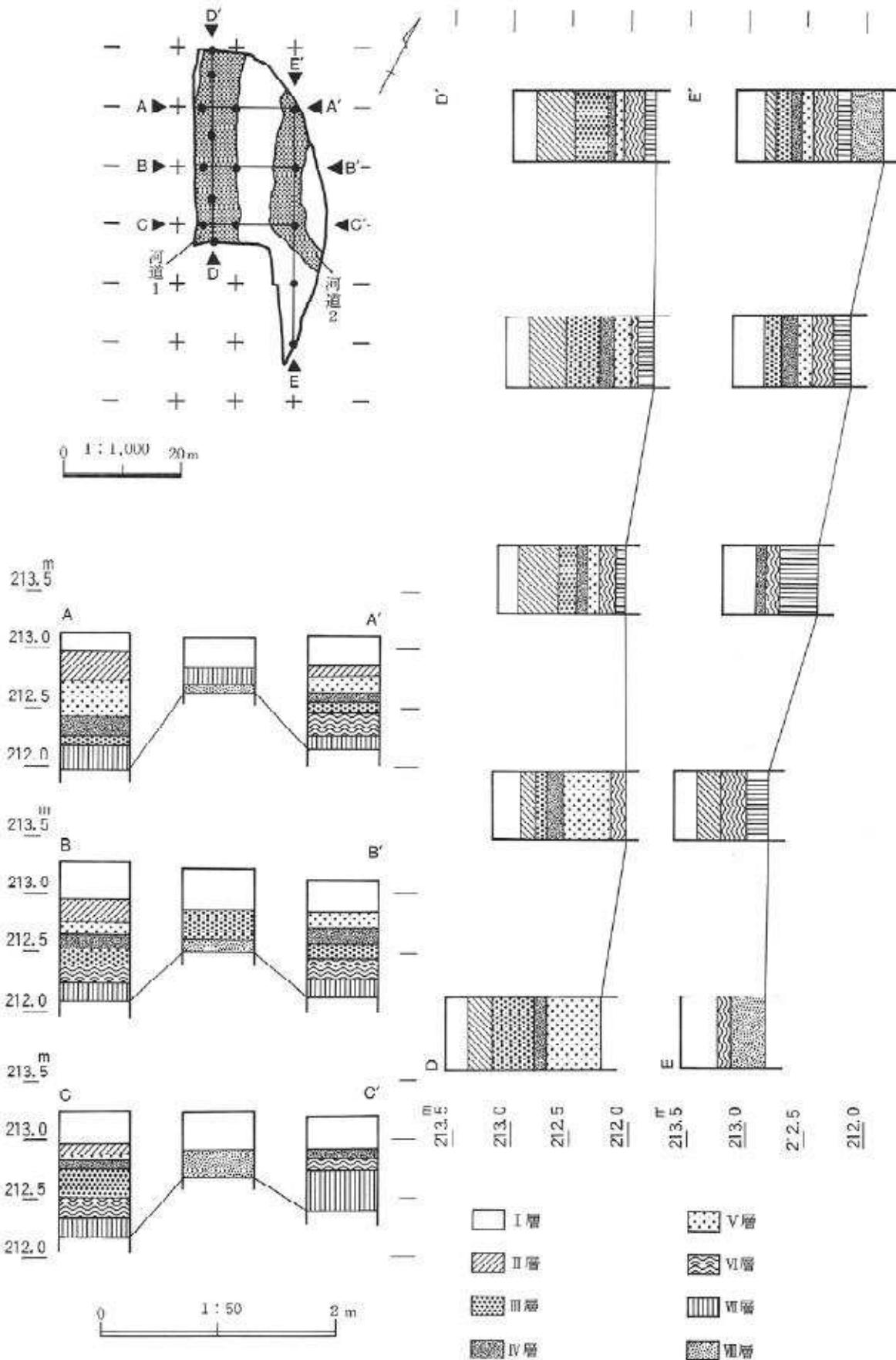
Ⅶ層：暗黄褐色土。しまりがあまりなく、粘性のやや弱い砂質シルト層である。径1～2cmの砂礫を多く含むところがある。

Ⅷ層：黄褐色土(漸移層)。しまりがなく、粘性の弱い砂質シルト層である。下層の円礫(径30～50cm)層の上部及び隙間に堆積する。集中区7付近では、Ⅷ層をさらにⅧ②～Ⅷ④層に分けられる。Ⅷ②層は黄褐色土でしまりがあまりなく、粘性が弱い。径1～2cmの砂礫を多く含む砂質シルトである。Ⅷ③層はしまりがあまりなく粘性の弱い黄褐色土である。Ⅷ④層はしまりがなく、粘性が弱い砂質シルト系の灰色土である。この下には径5～10cmの礫からなる層が続く。

Ⅸ層：円礫層(地山)。径30～50cmの円礫が重なるようにして堆積している。この下層に径5～10cmの小石と径1～3mmの砂粒や砂礫が混在する層が続く。



第24図 グリップ設定図



第25図 土層柱状図

第VI章 遺物

1 土器(第26図、第3・4表)

当遺跡では縄文時代草創期をはじめに、弥生時代後期から古墳時代初頭までの土器が出土している。内訳は縄文時代草創期の土器が92点、早期の土器が28点、前期の土器が4点、中期の土器が1点、時期不明の縄文土器が3点、弥生時代から古墳時代の土器が42点である。縄文時代草創期の土器が全体の54%を占めている。土器は集中区ごとに接合作業を行い、さらに隣接する集中区の土器とも接合を試みた。その結果、当初設定した集中区1と集中区8の土器が接合し、位置的にも近接することから、2つの集中区は集中区1に統合した。次に個体別同定作業を行った。無文土器と他の土器の無文部との区別は出土地点と胎土・色調などをもとに区別した。その結果、草創期の土器は16個体を数えた。土器の分類については次のような基準を設定し分類を行った。第I群を縄文時代の土器とした。次に時期別に分けたものを類とし、さらに文様別に分類した。縄文時代以外の土器はその他の土器として一括した。報告はこの類別に行うが、出土地点・層位などは巻末に観察表を作成した。

土器分類

第I群 縄文時代の土器

A類 草創期

- | | |
|----------|---------------------|
| a 無文土器 | 1 無文のもの |
| | 2 口唇部にキザミを施すもの |
| b 隆起線文土器 | 1 隆起線文で施文するもの |
| | 2 隆起線文+微隆起線文で施文するもの |
| | 3 微隆起線文で施文するもの |

B類 早期

- | |
|---------|
| a 押型文土器 |
| b 条痕文土器 |

C類 前期

D類 中期

E類 時期不明

その他の土器

第3表 集中区分別土器出土数

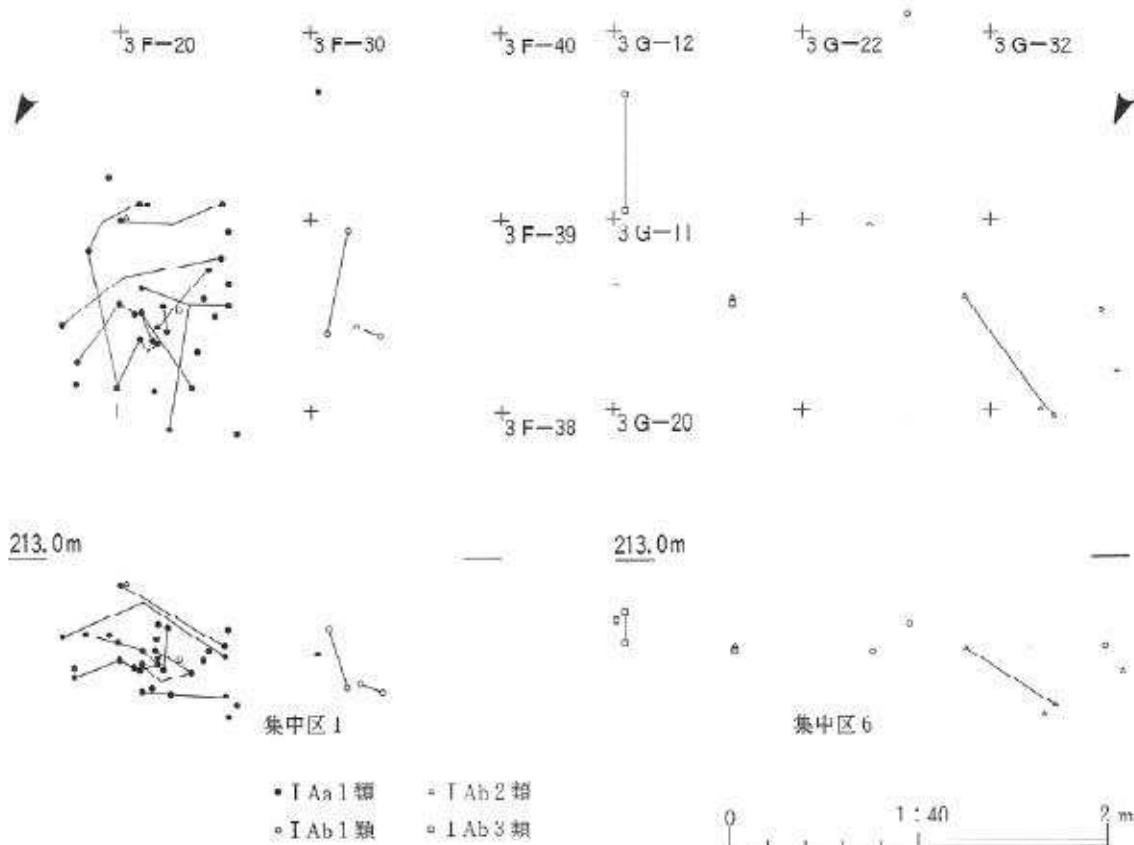
分類	I Aa類	I Ab類	I Ba類	I Bb類	I C類	I D類	I E類	その他	計
1	36	6							42
3		5							5
4									
5									
6									
7	6								
8		1	27						28
9	2	1			3	1			7
その他									36
計	44	48	27	1	4	1	1	42	168

第4表 層位別土器出土数

分類	I Aa類	I Ab類	I Ba類	I Bb類	I C類	I D類	I E類	その他	計
I									7
II			6		1				7
III				2					12
IV								1	13
V			4					6	10
VI	2	27	24			4	1		58
VII	18	10	1						29
VIII	24	1							25
不明								2	2
計	44	48	27	1	4	1	1	42	168

A 繩文土器

当遺跡出土の縄文時代の土器は草創期前半のものが主体で早期～中期の土器が多少加わる程度である。草創期の土器は2箇検出された河道の中央及び斜面付近からの出土が多い。8つの集中地点が認められ、その中で複数の個体が出土している地点もあるが層位的に捉えることは難しかった。河道1の集中区1では無文土器と隆起線文土器が多数出土しているが、層位的に明らかな区分は認められなかった。集中区6からも陸起線文土器と微陸起線文土器が出土しているが、層位的に明らかな区分は認められなかった。谷側の河岸2はII層から草創期の十器が出+1、その下層のIV～VII層から早期の押型文十器が出+1するなど層序と出土している土器の時期は整合性を持たない。草創期の土器で接合したのは集中区1と6から出土したもので、接合関係は第26図のようになる。草創期の土器の個体数は16個体を数え、文様のバリエーションは豊富であるが、口縁部1片のみの資料も多い。土器片の点数は無文土器44点、隆起線文土器48点である。



第26図 集中区1・6 土器接合図

(1) 第I群土器A類：草創期(図版10・25・27・28)

a 無文土器(1～29) 4個体を数え、無文のものと口唇部にキザミを施文するものとに分類した。

a1 無文のもの 1～21は同一個体である。無文土器で小型の鉢と推定される。土器片は36点確認された。すべて集中区1からの出土で河道1の中央部に位置する。出土層位はVI～VII層で標高差は70cmもの幅がある。口縁部形態は、平縁で厚さも薄手で緻密で丁寧につくられている。口縁部から頸部にかけてゆがみがある。

認められるため、器形は隅丸方形の可能性も考えられる。また、底部に近い脣部の破片はあるが、明確な底部に当たる破片がないため、図上での推定復元は行っていない。土器の器壁は丁寧にアラレ、内面には指頭痕が顕著に残っている。胎土は橙～にぶい橙色を呈し、極めて緻密な精選された粘土を用い、焼成も良好で堅牢である。3の口縁部の内側にのみ幅約1cmのスス状炭化物の付着が認められる。19は脣部表面に繩を転がしている可能性がある。推定口径は約13.0cm、推定器高は約12.5cmである。22～27は同一個体の無文土器で極めて小型の鉢と推定され、6点はすべて河道2の集中区7からの出土である。出土層位はⅦ②・Ⅷ③層である。口縁部形態は平縁で丁寧につくられているが、23にはわずかに段が認められることから擬口縁と推定される。また、口縁部から脣部にかけてゆがみが認められるため、器形は隅丸方形の可能性も考えられる。明確な底部に当たる破片がないため、これも推定復元は行っていない。胎土は黄橙～浅黄橙色を呈し、緻密で焼成も良好である。土器片は調査区際の壁面近くから出土したことから、遺物の分布はさらに南へ広がるものと推測される。

a 2 口唇部にキザミを施文するもの 28は1片のみで集中区9からの出土である。口唇部はわずかに外反し、脣部にかけてゆがみが認められる。口唇部近くの内面はわずかに膨らみ細かなキザミが施文されている。脣部は無文と推定されるが、全体の文様構成は不明である。内外面の調整は縱方向である。29は1片のみで集中区9からの出土である。口縁部から口唇部に向かって内面は段をなして薄くなり外反する。口唇部上部は丸棒状工具の側面で斜位にキザミを施文して波状になっている。脣部の文様構成は不明である。胎土はやや大きめの砂粒を若干含む。

b 隆起線文土器(30～60) 文様の組み合わせでさらに3つに分類した。内訳は、隆起線文のみで施文するもの3個体、隆起線文+微隆起線文で施文するもの3個体、微隆起線で施文するもの6個体である。

b 1 隆起線文で施文するもの 30・31は同一個体である。口唇部から脣部にかけて幅5mmの小波状の隆起線文が、6条横方向に施文されている。隆起線2本1単位で3単位の施文構成になると推定される。1単位の隆起線の間隔は4～5mmと近接し、単位ごとの間隔は9～10mmとやや離れて貼付られている。隆起線文は、指先で押圧しているため爪との間の痕跡が胎土に明瞭に残り二度押圧しているように見える。隆起線文間は横方向の調整痕が明瞭に残っている。内面も横方向の調整痕と指頭痕が明瞭に残っている。胎土は橙色を呈し、緻密で堅牢・焼成も良好である。口径は約18.0cmと推定される。32～34は同一個体である。32は幅5mmの小波状の隆起線文を施した脣部片である。内面には横方向の調整痕と指頭痕が認められる。33・34は底部に近い脣部の無文部で内面には指頭痕が認められる。35は1片のみの出土である。口唇部上は丸棒状工具で斜めに押圧して施文しているため、やや波状になっている。隆起線文は斜位に貼付けられ丸棒状工具の先端で押圧され、断面形はV字状である。隆起線文はV字あるいはU字状に巡る可能性もある。胎土は精選されたものを使用し、灰黄褐色を呈し緻密で堅牢・焼成も良好である。

b 2 隆起線文+微隆起線文で施文するもの 36～40は同一個体である。36は幅5mmの波状の隆起線文の下に微隆起線文が平行に貼り付けられている。微隆起線文はやや右に傾き幅1mm・長さ1cm前後で少なくとも5条は垂下する。胎土はよく精選されたものを用いており、橙～浅黄橙色を呈し焼成も良好で堅牢である。器壁は内外とも丁寧な横位のナデ調整である。38～40は無文部で内面に横位の調整痕が認められる。41は幅4mmの隆起線文2条の下に微隆起線文の痕跡がわずかに確認できる。微隆起線文は幅1mmで垂下し、1cmほどの長さである。胎土は緻密で焼成も良好・堅牢である。横位のナデ調整である。42・43は同一個体である。42は幅5mmの隆起線文で先丸の棒状工具で上下から交互に押圧して貼り付けられ波状になっている。その下には幅3mmのヘラ状工具を用いて横位、斜位に微隆起線文を作り出している。43は斜位に1.5mmの

間隔を明けて幅1mmの微隆起線文が2本平行に施されている。内面の器壁の調整は下から上へかきあげた後にナアしているが、胎土に砂粒がやや多く混入し、滑らかでない。

b 3 微隆起線文で施文するもの 44・45は同一個体である。44はやや右に傾いた長さ9mmの縦位の微隆起線文の下に横位の幅2mmの微隆起線文が6mmの間隔を空けて施されている。微隆起線文はヘラ状工具による作り出しである。微隆起線文の間にはヘラ状工具の纖維痕が条痕状に残っている。45は横位・斜位に微隆起線文が施されている。横位の微隆起線文は部分的に途切れている。内面の調整はやや粗雑でアバタ状になっている。46・47は同一個体である。46は微隆起線文が斜格子状に文差している。部分的に文差するものなのか、器面全体に文差した微隆起線文が巡るのかは断片的な資料なので不明である。微隆起線文は粘土紐を貼付し、後にヘラ状工具によって整形していると推定される。器面には横位の調整痕が見られる。胎土は極めて緻密で精選されたものを使用している。48～55は同一個体であり、器壁が2.5mmと極めて薄手の土器である。口径が14cm前後の小型の器形と推定される。口唇部に横位に微隆起線文を貼付た後にヘラ状工具によって整形している。口縁部の垂下する微隆起線文は平行に貼付られている。内面の調整は極めて丁寧に行われている。胎土も精選されたものを使用している。51～54の胴部にみられる縦の微隆起線文は0.2mm程度で極めて纖細であり、ヘラ状工具で整形している。52・55の微隆起線文は交差している。交差している微隆起線文の施文方法は不明である。内面にスス状炭化物・炭化物が付着している。56は口唇部上部には丸棒状工具を斜めに押圧施文してやや波状である。口唇部は外反する。微隆起線文はヘラ状工具による作り出しで2条確認できる。57～59は同一個体である。57は口縁部の加飾が最も顕著なものである。口唇上部及び内面突帯には丸棒状工具の側面、あるいは自縄自巻の絡状体のようなもので深く押圧して施文している。内面突帯は幅5mm、高さ3mmの粘土紐貼り付けである。表面の微隆起線文はヘラ状工具による作り出しである。ヘラ状工具の纖維痕が条痕状に残っている。58・59は厚手の胴部片で6mmの間隔で微隆起線文が施されている。器面は横位のナア調整である。中里村・千溝遺跡(佐藤1994)出土の第一群土器：隆起線文系土器群の個体1に胎土・器厚・施文方法等において極めて類似している。60は口縁部1片のみである。口唇部には丸棒状工具の側面で押圧してキザミ日をついている。口縁部はかなり外反する。微隆起線文はヘラ状工具で作り出されている。2本目の微隆起線文の上から長さ3mmの刺突が3mm間隔で連続して行われている。微隆起線文の上部は磨滅しているところもある。内面の口唇部が外反するところに綫長のキザミを連続して施文している。微隆起線文の間隔は4mm均等である。

(2) 第1群十器B類：早期(図版11・26)

縄文時代早期の土器は、押型文土器、条痕文土器が出土している。発掘調査の時点では押型文土器が出土した地点は押型文土器集中区としたが、整理段階で集中区8と名称を変更した。条痕文土器は散発的な出土状況であった。

a 押型文土器 61～69は同一個体で早期前半の押型文土器である。文様は楕円のみである。河道2の集中区8からまとめて出土している。出土層位はIV～VII層でややばらつきがある。全般的に胎土は粗く、細かい砂も含まれ焼成は不良である。楕円は長径7mm・短径5mm前後と大粒で、器面のひび割れや剥落が著しいためわずかに判別できる程度である。内面のナア調整は割合と丁寧である。施文具は縦に回転している。

b 条痕文土器 70は早期後半～終末の条痕文土器である。胎土に纖維を多量に含み、内外面とも条痕により施文している。胴部のみの出土であるが、口縁部に絡状体压痕が施文される深鉢と推定される。

(3) 第I群土器C類：前期(図版11・26)

前期の土器はすべて縄文施文の土器で、初頭の花積下層式土器に並行すると考えられる。神山A遺跡(村山・佐藤1997)で報告されている「縄文時代前期初頭の土器群」の胴部施文と同様のものと考えられる。2個体が確認されているが、散発的な出土状況である。71~73は同一個体で、胎土はやや粗く、砂粒・繊維を多量に含んでいる。縄文は器面が比較的軟らかい時に強く押圧されて施文されたものと推定される。縄文の条がかなり長いことが特徴である。74も花積下層式土器に並行すると考えられる。胎土はやや密で繊維を多量に含み厚手である。縄文は器面が比較的硬い時に強く押圧されて施文されたものと推定される。

(4) 第I群D類：中期(図版11・26)

75は中期中葉の土器である。1片のみの出土のため器形・文様構成などは不明である。半截竹管による半降起線文で施文されている。胎土は橙色を呈し、密で砂粒を含んでおり焼成は良好である。内面には炭化物が付着している。

(5) 第I群E類：時期不明(図版11・26)

76は底部のみの単独の出土のため時期は特定出来ないが、胎土や施文方法を観察すると後期～晩期くらいの時期の可能性がある。細い縄文が施文されている。外面は浅黄褐色であるが、内面は多量のスス状炭化物が付着して暗青灰色を呈する。

B その他の土器

本報告では、縄文時代以外の土器で弥生時代から古墳時代までの土器を、他の土器として一括した。77は弥生時代中期後半の壺の頸部から胴部にかけての破片である。背半截竹管による平行沈線と半截竹管による半月刺突文が施されている。右下部の半月刺突文の下には縄文が施文されている。ハケで内外を器面調整している。長野県中野市栗林遺跡(長野県1988)出土の栗林I式土器と類似している。これまで弥生土器が津南町で確認されている遺跡はわずか後期の朴ノ木坂遺跡(津南町史編さん委員会1984)など数例で、地理的に隣接する中部高地の影響を強く受けているようである。78~80は同一個体で弥生時代から古墳時代にかけての土器と推定される。口縁部3点と胴部片16点、底部が出土しているが、細片がほとんどで全体の器形は不明である。直立気味の口縁部をもち内外面とも丁寧にミガキをかけ赤彩されている。81は弥生時代の土器で細かな時期は不明である。河道1の集中区5のV層から同一個体の9点が出土しているが、細片がほとんどで資料化できるものはこの1点のみである。内外はハケで調整されている。

2 石 器(第27図、第5~13表)

当遺跡からは総計539点の石器が出土している。このうち、剝片類は376点で、石器の大半を占める。その他には、尖頭器、石錐、石匙、スクレイバ、両極石器、石核などが出土している(第5表)。

石器は8か所の遺物集中区から主に出土していることから、出土石器の各説については、各集中区ごとに行う。なお、集中区5は弥生土器の集中出土地点であり、石器の出土は剝片が3点のみであることから、この項では記述しないこととする。また、各集中区ごとに出土石器の石器組成表を載せ、特に出土量の多

かった集中区3、集中区6に関しては、母岩の石器組成表とその特徴を表で示した。各説で用いる石器部位等の名称の基準及び観察表(実測図をとった遺物のみを提示)の計測基準等は、第27図のとおりである。

(1) 集中区1出土石器(図版3・12・29)

河道1の右岸で、集中区6の約3m北側の遺物集中区である。土器の出土が中心であり、石器は石核1点と剥片7点である。石材は珪質頁岩4点と珪質凝灰岩4点である。

石核(1) 円盤を素材とする。正面に施した剥離面を打面にして、初めに上面を剥離している。次に上面を打面に左側面を剥離している。上端部から裏面の中央部にかけて自然面が残る。石材は珪質頁岩である。

剥片(2~4) 3点出土し、石材は全て珪質頁岩である。2は複剥離打面が残存する。正面に自然面を多く残す。3は上端部方向から階段状の剥離がみられる。4の残存する打面は、単剥離打面である。

(2) 集中区4出土石器(図版5・12・29)

集中区3の2~3mの西側で、河道1左岸のテラス状の平坦部及びそこに落込む斜面の集中区である。石器は石核4点と剥片10点である。石核の出土は1点がII層で、他の3点はVI層である。石材は珪質頁岩(9点)、珪質凝灰岩(4点)、硬砂岩(1点)である。

両極石器(5・6) 5は二極一対の両極石器である。風化が進み、素材の表面が剥がれ落ちているところが何か所か観察される。石材は珪質凝灰岩である。6は二極一対の両極石器である。正面の剥離は主に左側縁方向から行われている。裏面は多方向からの剥離が施されている。石材は珪質頁岩である。

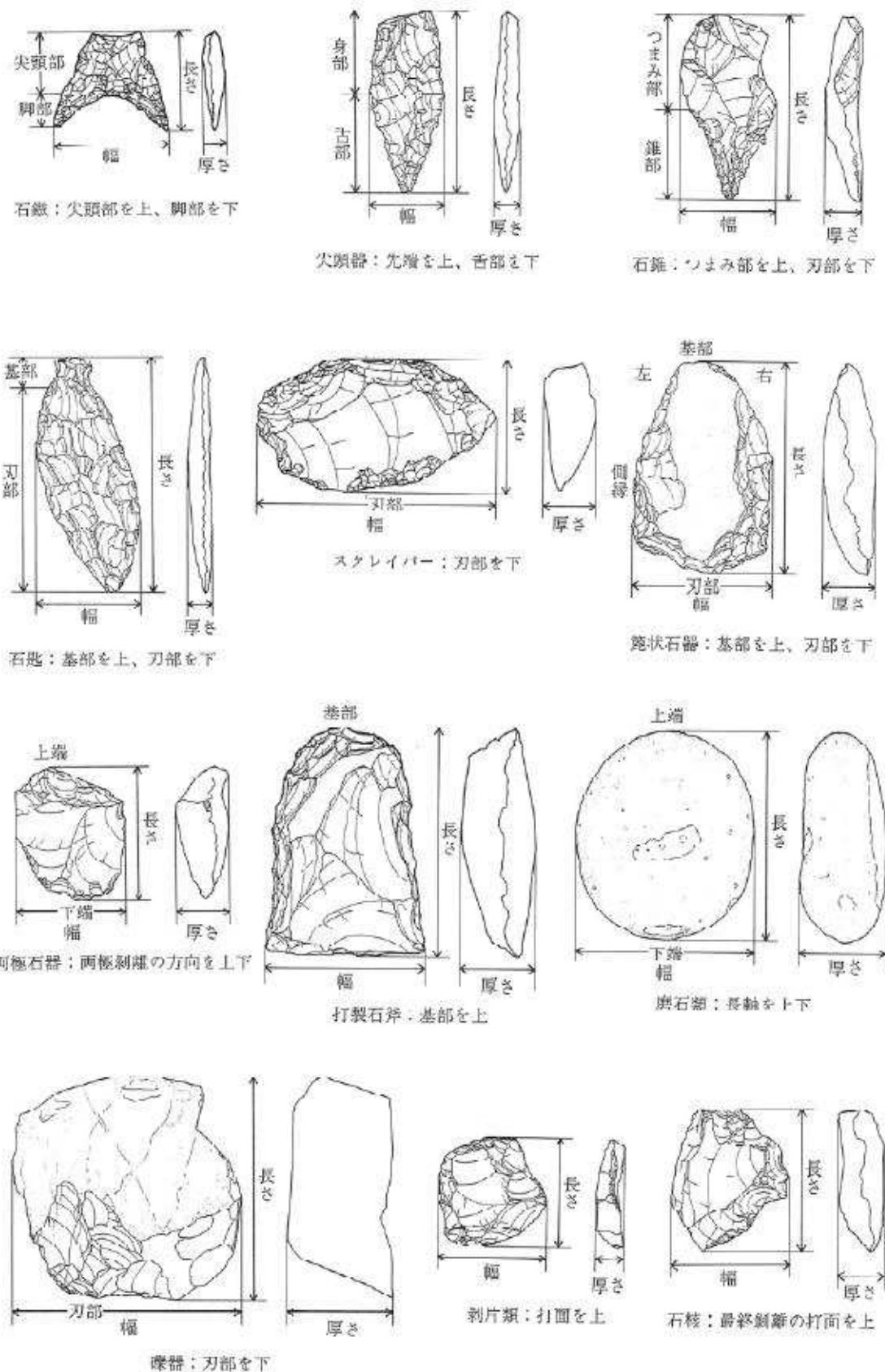
石核(7~9) 3点出土し、石材は全て珪質頁岩である。7は正面両側縁からの打撃の後、下端部を中心に、主に正面左側縁方向から剥離作業が行われている。上端部には自然面が残る。8は円盤を素材とし、不規則な打面転位を繰り返しながら剥離作業を進めている。9の上面は、単剥離打面が作業面の剥離面を切っていることから、打面調整を行いながら剥離作業を進めていることが分かる。

第5表 集中区別石器出土数

分類 No.	尖頭器	石錐	石匙	スクレ イバー	錐状 石器	両極 石器	二次加 工剥片	打製 石斧	礫器	磨石	未成品	石核	使用痕 剥片	使用痕 剥片	剥片	碎片	計
I												1			7		8
3				1		7	2			1		1	4		44	24	84
4						2						3			9		14
5															2		2
6	2	1	1	1			6				1	2	1		168	71	254
7										1					1		2
8															4		4
9				1								5	1		27		34
その他				3	1	4	3	1	1		3	4	2	1	114		137
計	2	1	1	6	1	13	11	1	1	1	5	16	8	1	376	95	539

第6表 層位別石器出土数

分類 層位	尖頭器	石錐	石匙	スクレ イバー	錐状 石器	両極 石器	二次加 工剥片	打製 石斧	礫器	磨石	未成品	石核	使用痕 剥片	使用痕 剥片	剥片	碎片	計
I				2		2	2					2	2		37		47
II				2		8	2			1	1	3	4		51		72
III					1										20	1	22
IV							1				1				11		14
V							1				1				48	7	57
VI	1	1	1		2		1					4		1	99	37	147
VI	1			1		1	5		1		1	6	1		61	12	93
VI	1										1	1			14	13	30
小計												1			32	24	57
計	2	1	1	6	1	13	11	1	1	1	5	16	8	1	376	95	539



第27図 主な石器の部位名称と計測基準

剥片(10) 単剝離打面が残存する。右側縁には自然面が残る。石材は硬砂岩である。

(3) 集中区 7 出土石器(図版 7・12・29)

調査区の南側で河道 2 が右曲する部分の南側平坦部に所在する集中区である。土層の堆積は比較的安定し、Ⅶ層は 30~40cm 堆積している。未完成品が V 層から出土しているが、Ⅳ層から出土している無文土器と共に伴するのは 8 点の剥片である。その剥片の中で、黄灰色で光沢の弱い珪質頁岩 3 点と淡黄色でやや光沢のある珪質頁岩 2 点がそれぞれ同一母岩であると考えられる。

未完成品(11) 四極—対の両極打法によってえられた剥片に二次加工が施されており、何らかの未完成である可能性が考えられる。正面の上端部と左側縁の縁辺の稜線はつぶれていることから、素材となった剥片は二対の極を持っていることが分かる。石材は珪質頁岩である。

(4) 集中区 8 出土石器(図版 7・12・29)

押型文土器の集中出土地点である。石器は剥片 4 点で、全て I~III 層からの出土である。石材は 2 点とも珪質頁岩である。

剥片(12・13) 12 は背面に蝶面をもつ剥片である。左側縁から下端部にかけては中・小の剝離が連続的にみられる。13 は背面に蝶の凸部を残す剥片である。腹面の複雑な割れ方から、両極打法による蝶の分割に際して作り出された剥片と推定される。

第7表 集中区 1・4・5・7・8 石器石材組成表

集中区 No	石材	骨器	石錐	石匙	スクレイバー	磨石	両極石器	一次加工剥片	打製石斧	穀器	磨石	未完成品	石核	使用痕剥片	剥片	碎片	計
1	珪質頁岩												1		3		4
	珪質凝灰岩														4		4
	計												1		7		0
4	珪質頁岩					1							3		5		9
	珪質凝灰岩					1									3		4
	硬砂岩														1		1
5	珪質頁岩						2						3		9		14
	計														2		2
	珪質頁岩														2		2
7	珪質頁岩											1		1		1	2
	計											1		1		1	2
	珪質頁岩														3		3
8	珪質頁岩														1		1
	珪質凝灰岩														4		4
	計																

(5) 集中区 3 出土石器(図版 4・13・30)

河道 1 の南岸で、テラス状の平坦部及びそこに落ち込む斜面の集中区である。石器には、両極石器、石核、スクレイバー、磨石類、剥片類などがある。石材は珪質頁岩が大半を占め、ほかに珪質凝灰岩、安山岩、無斑晶質安山岩が各 1 点ずつある。石器は、主に I 層及び II 層から出土している。耕作等により、搅乱を受けたか、上位部分からの流れ込みの可能性が高い。VI~VII 層にかけては碎片も含む剥片が約 50 点出土している。それらの多くは、前述の I 層及び II 層から出土している石器と石材が類似している。石材の大半を占める珪質頁岩は母岩別に 6 分類できる(第 8 表)。同一母岩の石器で最も多いのは剥片類であるが、母岩 2 においては両極石器(20)と使用痕のある剥片(27)、母岩 4 においては両極石器(18)と二次加工のある剥片(23)がそれぞれ 1 点ずつ同一母岩であることが観察された。また、母岩 1 と集中区 4 の石核(7) 1 点、母岩 5 と集中区 4 の剥片 1 点については共有関係が認められた。しかし、接合するものではなく、スク

レイバー(14)や両極石器(15~17・19・21)と同一母岩とみられる珪質頁岩はない。

スクレイバー(14) 薄手の剥片を素材として、鋭利な縁辺に微細剝離を施し、刃部として利用していたようである。左右の側縁も剝離して形を整えている。上端部は折断されており、残存しない。石材は珪質頁岩である。

両極石器(15~21) 7点出土している。4点とも一極一対の凹複剝離痕をもち、石材も全て珪質頁岩である。2点(20・21)はⅢ層からの出土であるが、他の5点はⅡ層からの出土である。15は下端部に微細な剝離痕が見られる。右側縁を欠損する。16は表裏面の上端部と表面の下端部に剝離痕が残る。17は上端部に急角度の打面を作るために、左側縁の斜め上の部分から剝離作業が行われている。18は表裏面に不規則に移動しながら剝離作業が行われている。裏面の下端部に微細剝離が残り、縁辺の稜線はつぶれている。また、これと対応する上端部に階段状の剝離がある。19は綫長剥片を素材として、右側縁を中心二次加工が施されている。20の左側縁は加撃の際に打面が欠損し、右側縁には尖った剝離痕が残る。裏面の大部分は自然面である。21の右側縁は微細な剝離痕が連続している。左半分の剝離痕部分が折断されて、残存しない。

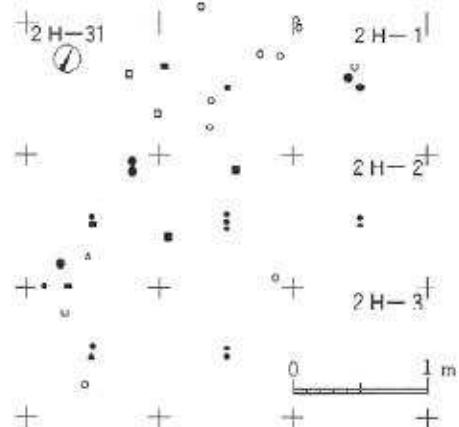
二次加工のある剥片(22・23) 2点出土し、石材は全て珪質頁岩である。22は裏面の鋭利な左側縁に微細な剝離を施している。下端部を欠損する。右側縁は後世の欠損である。23は裏面の下端部に内挿状の剝離がある。正面は自然面である。

磨石器(24) 正面のほぼ中央と下端部、右側縁部に凹痕がみられる。裏面には磨痕が観察される。安山岩の円礫を素材としている。

第8表 集中区3 各母岩の特徴

石材	號	色調	粒度	光沢	特徴	
					1	2
珪質頁岩	1	にふい黄色	細	中	はじけたような痕跡のあるものが散点みられる	
	2	暗灰黄色	細	中		
	3	黄褐色	細	中		
	4	暗灰黄色	細	中	自然面は暗灰黄色で細かな凹凸あり	
	5	灰黄色	細	中		
	6	黄灰色	細	弱		

■ 母岩1 ■ 母岩4 ● その他
 ● 母岩2 ■ 母岩5
 ▲ 母岩3 ■ 母岩6



第28図 集中区3 母岩別石器分布図

第9表 集中区3 石器石材組成表

石材	尖頭器	石錐	石匙	スクレーバー	鎌状石器	両極石器	二次加工剥片	打製石斧	礫器	磨石	未成品	石核	使用痕剥片	剥片	碎片	計
珪質頁岩														11	6	17
母岩1													1	4	5	11
母岩2													5	7	12	
母岩3													6	3	11	
母岩4					1	1							3	1	4	
母岩5													1	3	1	5
母岩6													1	3	10	20
その他			1		5	1						1	3	10		20
無鉱													1	1	2	
安山																1
泥岩														1		1
合計			1		7	2			1		1	4	44	24	84	

石核(25) 上下端両極からの打撃の後、裏面を中心に、不規則に移動しながら剥離作業が進められている。正面左半分に自然面を残す。石材は珪質頁岩である。

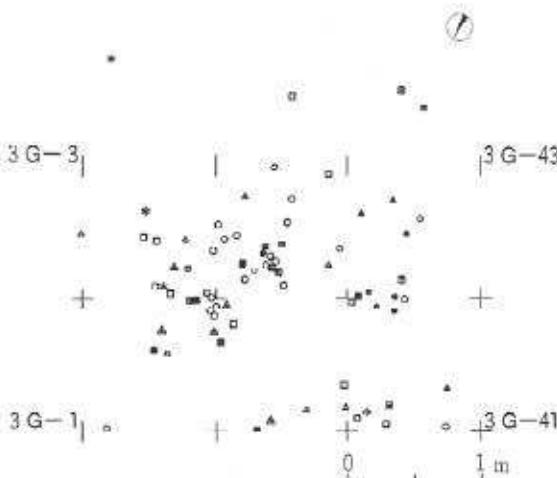
使用痕のある剝片(26~29) 4点出土し、石材は全て珪質頁岩である。26の残存する剝離面は単剝離打面である。鋭利な縁辺の左側縁に微細な使用痕がみられる。27は礫面を打点とする薄手の剝片を素材とする。鋭利な縁辺の左側縁に微細な使用痕がある。28は薄手の縦長剝片を素材とする。残存する剝離面は単剝離打面であり、鋭利な縁辺の左側縁に微細な使用痕が観察される。右側縁は折断されて、残存しない。29は礫面を打面とする縦長の剝片を素材とする。左側縁に微細な使用痕がみられる。

(6) 集中区6 出土石器(図版6・14・15・31・32)

河道2の右岸斜面の集中区である。有舌尖頭器、半月形尖頭器、石鏟、石匙、スクレイバー、未成品、石核、剝片類などがある。石材は珪質頁岩が171点、珪質凝灰岩が20点、無斑晶質安山岩が4点である。珪質頁岩は母岩別に6分類できる。右岸斜面の疊層直上のVI~VII層にかけては、主に有舌尖頭器、半月形尖頭器、石匙、石核、二次加工のある剝片等が、無文及び隆起線文土器と共に伴して出土している。石材は珪質頁岩が最も多いものの、同一母岩のものが1か所にまとまって出土するということではなく、珪質凝灰岩や無斑晶質安山岩も含め、比較的均等に出土している。珪質頁岩ではスクレイバー(34)と未成品(41)、剝片類が同一母岩(母岩5)である。母岩1・3・4・6においても、二次加工のある剝片と、数十点の剝片(37・39・35・40・38)及び碎片が同一母岩である。珪質凝灰岩でも2種類の母岩に分類できるが、それぞれ剝片と碎片だけである。また、珪質頁岩の母岩1と集中1の剝片(2)が、珪質凝灰岩の母岩1・2と集

第10表 集中区6 各母岩の特徴

石材別	色調	粒度	光沢	特徴
珪質頁岩	1 黄褐色	中	弱	自然面は明褐色で細かな凹凸あり
	2 黄褐色	中	弱	径0.5mm以下の穴が少しある
	3 灰黃色	中	弱	
	4 暗青褐色	中	弱	
	5 黄褐色	中	弱	はじめた露面あり、自然面は灰白色で細かな凹凸あり
	6 黄褐色	細	中	
	7 にぶい黄色	中	弱	
	8 灰黄色	細	中	
	9 灰白色	中	弱	自然面は灰白色で細かな凹凸あり
	10 灰黄色	中	弱	自然面は灰白色で比較的なめらか



第29図 集中区6 母岩別石器分布図

第11表 集中区6 石器石材組成表

石材	器種	尖頭器	石鏟	石匙	スクレイバー	錐状石器	両極石器	一次加工剝片	打製石斧	礫器	磨石	未成品	石核	使用痕剝片	剝片	碎片	計
珪質頁岩	母岩1							2						1	59	35	97
	母岩2														16	25	41
	母岩3														21	1	23
	母岩4							1									21
	母岩5				1												21
	母岩6							1							5	5	12
	母岩7														6		7
	母岩8														5	2	7
	その他	1	1					1						1	6		10
	母岩9														9		9
珪質凝灰岩	母岩10														14	3	17
	無斑	1		1											4		7
合計		2	1	1	1			6					1	2	168	71	254

中1の剥片2点ずつがそれぞれ同一母岩の関係である。無斑晶質安山岩についても4点全てが同一母岩である。河床に近い部分でレンズ状に堆積するIV～V層では、石錐及び二次加工のある剥片以外は、剥片及び碎片の出土が多く、それらの石材の大半は珪質頁岩の母岩であるあるいは含まれる。

有舌尖頭器(30) 縱長剥片を素材として、打面側を基部にしている。調整は、中軸を越える剝離をまず腹面側に施し、次に背面側に施している。その際、左右側面を交互に行うのではなく、一側縁ずつ行っていったようである。およその順序としては、腹面左→腹面右→背面左→背面右である。石材は珪質頁岩である。

半月形尖頭器(31) 薄手で比較的均一な厚さの剥片を素材としている。基部が欠損しているが、折れ面から正面側に微細な剝離が施されている。二次加工は基部からなされ、先端部へ進んでいくようである。石材は無斑晶質安山岩である。

石錐(32) 縱長剥片を素材として、尖頭状の端部に向側縁から、小型剝離の二次加工が施されている。裏面に磨耗がほとんどないことから、スクレイバーのような使われ方をしたと考えられる。つまみ部の右側は折断されている。石材は珪質頁岩である。

石匙(33) 薄手で縱長の剥片を素材とした、いわゆる縦長石匙である。素材の深部まで丁寧な二次加工が、ほぼ全面に施されている。刃部も交互剝離により、作り出されている。石材は無斑晶質安山岩である。

スクレイバー(34) 縱長の剥片を素材とし、両側縁の腹面側に中型の剝離を施し、刃部としている。上・下端を欠損するが、下端は後世の欠損である。石材は珪質頁岩である。

二次加工のある剥片(35～40) 6点出土し、石材は全て珪質頁岩である。35・36の背面は求心状の剝離痕に覆われている。打面は複剝離打面で、側面観は弧状をなす。そのため、両面調整の石器を製作する際に用いた調整剝片が素材であると考えられる。35は両側縁に、36は右側縁下半に微細な剝離痕がある。37は下端部に急角度をなす微細な剝離面が認められる。表面下端部に節理面が残る。38は左側縁に小剝離が連続的に施されている。39は縦長の剥片の打面部背面側に急斜度の剝離が施され、刃部が作出されている。若干内湾気味の刃部には微細な刃こぼれが認められる。40の残存する打面は、複剝離打面である。左側縁には内抉状の剝離が残る。

未完成(41) 薄手の縦長剥片を素材とした尖頭器の製作途中の破損品である。胴部中央付近が中軸を越える剝離面で占められているのに対し、先端部は表裏とも完成に近い状態にある。このことから、この尖頭器の製作工程は人まかな形を整えた後、先端から木端にかけて順に仕上げていく様子がうかがわれる。石材は珪質頁岩である。

石核(42・43) 2点出土し、石材は42が珪質頁岩、43が無斑晶質安山岩である。42の表面に残るボブティノな剝離面から、厚手の剥片を素材していることが分かる。下端部にはツブレが認められることと、両面に残る複雑な剝離面から両極石器の可能性もある。43は礫面をもつ大形で厚手の縦長剥片が素材である。剥片の上半が折断され、その折断面と礫面が打面になっている。

使用痕のある剥片(44) 下端の尖頭部分に微細な使用痕が観察される。石材は珪質頁岩である。

剥片(45～62) 177点(碎片14点を含む)が出土した。石材は、珪質頁岩が158点、珪質凝灰岩が18点、無斑晶質安山岩が1点である。47・49・50・52・55～58・60・61の残存する剝離面は、複剝離打面である。右側縁と左側縁では、ほぼ直角に交わるような剝離が施されている。全体的に薄手であり、何回か剝離調整が繰り返された剥片であると考える。45は縦長の剥片で、右側縁に使用痕が観察される。左側縁は自然面である。裏面の右側縁には、中形で浅角度の剝離が上端部から下端部の方向に施されている。46は左側縁

に剥離痕を残す。風化が進んでいて、剥離痕や稜線が明確ではない。石材は珪質凝灰岩である。48はほぼ中央で折断されているが、後世のものである。55は被熱し、はじけた跡と考えられるところが2か所観察できる。

(7) 集中区9出土石器(図版8・15・32)

河道1の左岸斜面の集中区である。石器にはスクレイバー、石核、剝片類がある。石材には珪質頁岩、珪質凝灰岩、無斑晶質安山岩、粘板岩などがあり、このうち、珪質頁岩が大半を占める。剝片類は、主に耕作土中からの出土であり、耕作等により擾乱を受けたと考えられる。スクレイバー1点(63)に関しては、Ⅶ層で、礫層の直上からの出土が認められている。

接合する10点(2個体)の破碎碟が2F-36グリット地点のV~Ⅷ層にかけて出土している。石材は珪質凝灰岩である。正面に剥離面を残す剝片(70・71)はこの破碎碟と同一母岩と考えられ、70はこの破碎碟の部と接合する。この他に接合はしないが、同一母岩と考えられる破碎碟も5点認められる。出土層位が3層に分かれていることから、出土地点西側の岸などで破碎した礫及びその礫を利用した剝片が、河床に流れこむ土砂と数回にわたって動いた可能性が高い。

スクレイバー(68) 破碎碟の急角度をなす割れ面を刃部として利用していたようである。刃部には微細な剥離が連続し、便用に伴うものと推定されるが、大・中形の剥離痕は打点が遠く、刃部形成のための意図的な剥離によるものとは断定しがたい。石材は珪質頁岩だが、これと同一母岩のものは認められない。

石核(64) 残存する素材の打面は単剥離打面である。剥離作業は、素材の右側縁を中心に打面を背面と腹面に不規則に移動しながら進められている。石材は無斑晶質安山岩である。

使用痕のある剝片類(65~73) 65の素材となった剝片は破碎により生じたものと推定される。正面に自然面を残し、全体に磨耗による光沢を生じており、側縁部は特に顕著である。下端部には使用痕と考えられる微細剥離が認められる。石材は粘板岩である。66・72は64と同様、無斑晶質安山岩を石材としているが、同一母岩には属さない。66は正面右上に微細な剥離痕がある。73は碟面を打面とする大型の剝片の左上に微細な剥離痕がある。ただし、風化が進んでいるため不明瞭である。68は下端部に内狭状の小型剥離面のある剝片である。石材はチャートである。69は素材となった剝片を數ち切るように、打面側にスクレイバー刃部状の急斜度剥離が施され、末端側は錐状に作り出されている。全体に水磨をうりている。72の残存する打面は複剥離打面であり、右側縁上半に伸用痕が認められる。67・70は右側縁に、71は右側縁にそれぞれ使用痕を残している可能性があるが、風化が進んでいるため不明瞭である。

第12表 集中区9 石器石材組成表

石材	尖頭器	石錐	石盤	スクレイバー	盤状石器	両極石器	二次加工剝片	打製石斧	碟器	磨石	未成品	石核	使用痕剝片	剝片	碎片	計
珪質頁岩				1								4	4	16		25
珪質凝灰岩													1	1		2
無斑晶質安山岩												1	2	1		4
チャート													1			1
粘板岩												1	1			2
計				1								5	9	10		34

(8) 集中区外からの出土石器(図版9・16~18・33~35)

遺物集中区以外から出土した石器は河道1及び2の河床への落込み部分からの出土が中心で、集中区1及び6の周辺や集中区3及び4などの近くで比較的多い。特に、集中区3や4の斜面上の平坦部分からは

15点(画様石器、二次加工のある剥片、石器、剝片)出土しているが、その大半はI~III層からの出土である。その中の剥片1点と同一母岩と考えられる石器が集中区3で見つかっていることから、南側上面からの土砂等の流れ込みの結果、堆積したものと考えられる。

石錐(74) つまみ部は欠損している。素材の深部まで丁寧な二次加工が施され、残存する錐部は交互剥離により作り出されている。錐部は正裏面とも磨耗している。素材の正面が凸状で、裏面が凹状を呈している。石材は珪質頁岩である。

スクレイバー(75~77) 75は横長剥片を素材とし、上・下端部、左側縁に刃部を作り出している。素材の正面は平坦状で、表面が凸状を呈している。76は底縁部と左側縁に刃部を作り出している。表裏面とも底縁部に鋸歯状の剥離が連続して施されている。正面の中央から右側縁に自然面が残る。77は両極打法で得られた両側縁に急角度の剥離が施され、わずかだが磨耗も認められる。また、正面の下端から3.0cmまでの範囲に、長軸には平行する向きの線条痕が付いている。同範囲内の自然面と剥離面の境の棱線も著しく磨耗している。これに対し、裏面に磨耗痕は認められないことから、スクレイバー的な使用法を考えられる。上半と下半がそれぞれ異なった地点から出土しているが、接合の結果、打点はみられず、後世の折断であると考えられる。石材は珪質頁岩である。

範状石器(78) 素材の鋭い剥離面をそのまま刃部としている。正面の中央に自然面を残し、両側縁は二次加工が施されている。素材の正面は凸状で、表面が平坦状を呈している。石材は硬砂岩である。

両極石器(79~82) 4点出土し、いずれも二極一对の両極剥離痕をもつ。79・82は上・下端部に剥離痕が残るが、80・81は片方の剥離痕部分が欠損している。石材は全て珪質頁岩である。

二次加工のある剥片(83~85) 83の残存する素材の打面は、複剥離打面である。裏面の右側縁には内抉状の剥離が施されている。正面の下端部には細かい剥離が連続する。正面右側縁の折断は後世のものである。石材は珪質頁岩である。84の上・下端は折断され、残存しない。裏面左側縁に剥離が施されているが、棱線は磨耗している。石材は珪質頁岩である。85は右側縁に大・中形の剥離が連続的に施されている。石材は珪質頁岩である。

打製石斧(86) 剥片を素材とした片刃打製石斧の欠損品である。刃部が欠損し、その痕が下端部に残存するが、再利用のための二次加工は観察されない。表面の縁辺及び裏面の左側縁には急角度の剥離が連続して施されている。石材は珪質頁岩である。

礫器(87) 下端から右側縁にかけて棱線がつぶれている。また、末端棱線には弱い光沢が認められる。

未完成(88~90) 石材は3点とも珪質頁岩である。88は尖頭状の素材を利用し、正面下端部の左側縁に小剥離を施している。裏面下端部にも中形の剥離が2か所観察される。89は尖頭器破損品である。先端は欠損し、基部のみが残存する。素材の深部まで丁寧な二次加工が施されている。90は三角柱状の厚手の剥片の右側縁に剥離が施されている。下半を欠くが、右側縁からの加鑿によるもので、剥離を連続して行う過程で破損した可能性がある。

第13表 集中区外の石器石材組成表

石材	尖頭器	石錐	石匙	スクレイバー	範状石器	両極石器	二次加工剥片	打製石斧	礫器	磨石	未完成	石核	使用痕跡	使用痕跡片	剝片	碎片	計
珪質頁岩		1		3		4	3	1	1		3	4	2	1	91		114
珪質頁岩															17		17
珪質頁岩															5		6
粘板岩					1												1
計		1		3	1	4	3	1	1		3	4	2	1	114		138

石核(91—94) 4点出土していて、石材は全て珪質頁岩であるが、母岩は異なる。91は正面上部と左右側縁で、剥離作業がみられる。正面左側縁と裏面左側縁に中・小形の剥離が観察される。正面の下部分と裏面には自然面が残る。92の剥離作業は、正面を中心に不規則に移動しながら進められている。下端部に小剥離面が認められる。正面上端部と裏面は自然面である。93は石核に分類したが、上・下端にある微細な剥離痕の様子からスクレイパーとして用いられた可能性がある。94は分割礫の分割面を打面に剥片を剥離している。腹面右側縁に微細な剥離痕が連続しており、93と同様にスクレイパーとして用いられた可能性がある。

使用痕のある剥片(95・96) 95は正面右側縁に浅角度で中・小形の剥離が連続する。尖頭状の下端部と右側縁に使用痕がみられる。96は横長剥片を素材として、打面部背面側に微細剥離痕が観察される。石材は珪質頁岩である。

剥片(97~114) 石材は明記しているもの以外は全て珪質頁岩である。

97には複剥離打面が残存する。正面の右側縁に浅角度で中形と急角度で中形の剥離がそれぞれみられる。石材は黒色頁岩である。98の残存する素材の打面は単剥離打面である。99は正面下端部に小剥離痕を連続しており、棱線は磨耗している。正面の中央部から左側縁にかけては自然面が残る。100の背面は求心的な剥離痕で構成されている。裏面の下端部には小剥離が観察される。101は正面右側縁に大形の剥離が2か所みられる。左側縁は急角度の剥離が施されているが、古いものである。上端部全体と正裏面の一部に自然面が残る。102は正面下端部に急角度で大・中形の剥離面を作り出している。右上端部には中・小形の剥離が施されている。裏面は自然面である。103は単剥離面が残存する。左側縁に中形で急角度の剥離がみられる。正面下端部に自然面を残す。104は正面右側縁を右斜め上からと、下端部の左右を下方向からそれぞれ剥離を施し、錐状の形状をなしている。打点の不明瞭な複雑な割れ方をしていることから両極石器の可能性がある。105には複剥離打面が残存する。背面構成から打面が90°転位していることが分かる。石材は黒色頁岩である。106の残存する素材の打面は単剥離打面である。上端部に中形で浅角度の剥離が連続しており、正面上・下端部に内抉状の剥離が数か所みられる。107は正裏面の上端部の微細な剥離の状況から、両極石器の可能性もある。下端部は折断して残存しない。正面が凸状で、裏面が凹状を呈している。108は打瘤が大きく発達した厚手の縦長剥片である。109は正面右側縁に内抉状の剥離が施されている。上端部は自然面である。110の上端は欠損後、腹面側から急角度の剥離が施されている。下端部には内抉状の剥離が2か所施されている。111の残存する素材の剥離面は単剥離打面である。縦長剥片の剥離作業が行われたと考えられる。下端部には自然面が残る。表面は凹状で、裏面が凸状を呈する。両側縁にツブレがみられる。112は背面が多方面からの剥離痕で構成され、面をもつ末端と右側縁にも多方向からの剥離痕が残されている。打面は複剥離打面である。右核の打面再生剥片と推定される。113は薄手の剥片を素材として、下端部に剥離を施し、内抉状の剥離を作り出している。裏面は全て自然面である。114は右側縁方向と下端部方向からの剥離作業によって、下端部を尖らせている。正面の下端部から左側縁に沿った部分と、裏面の下端部から右側縁に沿った部分で中・小形の剥離が連続している。

第14表 土器観察表 1

No.	分類	出土地点	集中区No.	層位	調査	文様・施文等	色調内/外	胎土	混和材等	その他の	二次焼成内/外	備考
1	I Aa1	3F-9-19-20	1-16-19-21-30-42	VII-VIII	0.6	無文 内/指頭痕 ナデ	橙	緻密	堅牢	焼成良好		
2	タ	3F-9-19	1-31-35-38	VII-VIII	0.6	タ	橙		タ			
3	タ	3F-30	1-4	VII	0.6	タ	橙		タ			
4	タ	3F-9-19	1-8-20	VII	0.6	タ	に赤い模		タ			
5	タ	3F-19	1-9-14	VII-VIII	0.6	タ	橙		タ			
6	タ	3F-19	1-44	VII	0.7	タ	に赤い模		タ			
7	タ	3F-19	1-11-13	VII-VIII	0.6	タ	橙		タ			
8	タ	3F-19	1-10	VII	0.6	タ	に赤い模		タ			
9	タ	3F-20	1-43	VII	0.5	タ	に赤い模		タ			
10	タ	3F-10	1-22	VII	0.6	タ	に赤い模		タ			
11	タ	3F-19	1-7	VII	0.6	タ	に赤い模		タ			
12	タ	3F-30	1-4	VII	0.6	タ	に赤い模		タ			
13	タ	3F-10-19	1-33	VI	0.5	タ	に赤い模		タ			
14	タ	3F-19		VII	0.6	タ	に赤い模		タ			
15	タ	3F-19	1-8	VII	0.6	タ	に赤い模		タ			
16	タ	3F-19	1-18	VII	0.7	タ	橙					
17	タ	3F-19	1-40	VII	0.6	タ	LSR青緑		タ			
18	タ	3F-18	1-37	VII	0.6	タ	橙		タ			
19	タ	3F-19	1-15-17-32	VII	0.6	タ	に赤い模		タ			
20	タ	3F-18-19	1-36-39-41	VII	0.6	タ	に赤い模		タ			
21	タ	3F-10-19-20	1-6-33	VII-VIII	0.6	タ	に赤い模		タ			ゆがみあり
22	I Aa1	2G-37	7-11	VIII③	0.5	小型土器 無文 ナデ	深褐色	緻密	堅牢	焼成良好	スヌ状炭化物?	
23	タ	2G-36	7-1	VIII①	0.5	タ	浅黄橙		タ			
24	タ	2G-36	7-8	VIII③	0.5	タ	深褐色		タ			
25	タ	2G-26	7-4	VIII②	0.5	タ	淺黃橙		タ			
26	タ	2G-35	7-2	VIII③	0.5	タ	浅黄橙		タ			
27	タ	2G-26	7-3	VIII②	0.5	タ	に赤い模		タ			
28	I Aa2	2F-4	9-45	VII	0.5	口縁部にキザミ	に赤い模	密	堅牢	焼成良好		
29	タ	2F-4	9-44	VII	0.6	LJ縁部にキザミ	浅黄橙	密	堅牢	焼成良好		
30	I Ab1	3F-29	1-27-28	VI	0.7	幅5mmの隆起線文	橙	緻密	堅牢	焼成良好		
31	タ	3F-29	1-1-2	VI-VII	0.8	タ	に赤い模		タ			
32	タ	3G-23	6-8	VI	0.6	隆起線文 内/指頭痕	浅黃橙	緻密	堅牢	焼成良好		
33	タ	3G-21	6-51	VI	0.7	無文部 内/指頭痕	浅黃橙	緻密	堅牢	焼成良好		
34	タ	3G-31	6-45	V	0.6	タ	タ		タ			
35	タ	2F-13	9-49	VII	0.4	口縁部加飾 隆起線文	灰黄褐	緻密	堅牢	焼成良好		
36	I Ab2	3G-21,37-40	6-47-77	VI	0.7	隆起線文 微隆起線文 ナデ	橙	緻密	堅牢	焼成良好		
37	タ	3G-31	6-48	VI	0.7	隆起線文 ナデ	に赤い模		タ			
38	タ	3G-31	6-96	VI	0.5	無文部 ナデ	浅黄橙		タ			
39	タ	3G-31	6-48	VI	0.6	タ	タ		タ			
40	タ	3F-40	6-77	VI	0.7	タ	橙/浅黄		タ			
41	タ	3F-10-19	1-33	VI	0.7	隆起線文 微隆起線文	橙	緻密	堅牢	焼成良好		
42	タ	3G-11	6-58	VI	0.5	隆起線文 微隆起線文	に赤い模	緻密	堅牢	焼成良好		
43	タ	3G-11	6-58	VI	0.7	微隆起線文	に赤い模					内透はやや見れてる
44	I Ab3	1H-81	3-32	II	0.7	微隆起線文 ナデ	に赤い模	緻密	堅牢	焼成良好		
45	タ	III-82	3-34	II	0.7	微隆起線文	タ		タ			透はやや見れてる
46	タ	1G-74		III	0.6	微隆起線文 ナデ	に赤い模	緻密	堅牢	焼成良好		
47	タ	1G-64		III	0.7	微隆起線文	タ		タ			
48	タ	3G-11	6-58	VI	0.3	微隆起線文 ナデ	CD暗/黒	緻密	堅牢	焼成良好		
49	タ	3G-12	6-94	VII	0.4	タ	タ		タ			
50	タ	3G-11	6-95	VII	0.4	タ	タ		タ			
51	タ	3F-19	1-12	VII	0.3	タ	タ		タ			
52	タ	3G-12	6-91	VII	0.3	タ	タ		タ			
53	タ	3G-12	6-91	VII	0.4	タ	タ		タ			
54	タ	3G-12	6-91-94	VII	0.3	タ	タ		タ			
55	タ	3G-12	6-94	VII	0.3	タ	タ		タ			
56	タ	2G-7		II	0.6	口縁部加飾 微隆起線文	黄橙	密	堅牢	焼成良好		
57	タ	1H-81	3-30	II	1.0	LJ縁部加飾(内面突起)微隆起線文	頬/褐色	密	堅牢	焼成良好		
58	タ	2G-17	8-29	II	0.8	ナデ+2ガキ、剥落	橙					
59	タ	III-91	3-31	II	0.8	微隆起線文	頬/白					
60	タ	2G-10	3-33	II	0.7	口縁+ギザミ 斜壁 直筋記録文 内ギザミ	黄橙	緻密	堅牢	焼成良好		

第15表 土器観察表 2

No	分類	出土地点	集中区No	層位	厚(mm)	文様・施文等	色調内/外	胎土・混和材等・その他	二次焼成内/外	備考
61	IB-a	2G-19	8-8	III	0.8	横円斜削文 内/指頭痕 ナデ 番面剥落	緑青み暗	やや粗 硬軟質 やや焼成不良		
62	+	2G-18	8-13	VI	0.8	+	黒に赤	+	スス状炭化物	
63	+	2G-39		VII	0.9	+	橙	+		
64	+	2G-19	8-23	VI	0.8	+	+	+	炭化物	
65	+	2G-19	8-21	VI	0.9	+	+	+	内/炭化物	
66	+	2G-18	8-25	VI	0.7	+	+	+		
67	+	2G-19	8-15	VI	0.8	+	橙/暗褐色	+		
68	+	2G-18	8-10	VI	0.9	+	橙	+		
69	+	2G-19	8-9	VI	0.9	+	+	+	内/スス状炭化物	
70	IB-b	1G-87		II	1.4	内/外条痕文	橙	やや粗 硬軟多量 砂粒		
71	IC	1G-58	9-15	VI	1.4	縦文 ナデ 指頭痕	黄青/尚色	やや粗 硬軟多量 砂粒		
72	+	1G-57	9-4	VI	1.4	+	黒に赤	+		
73	+	1G-58	9-14	VI	1.4	+	黒に赤	+		
74	IC	1G-66		VI	1.2	縦文 ナデ	黒に赤	やや粗 硬軟多量 砂粒		
75	ID	2G-17	9-18	VI	1.4	半截竹管による半陰起線文	橙	青 砂粒	内/炭化物	
76	IE	3F-26		IV	0.8	細繩文		青	スス状炭化物	
77	その他	3D-70		III・IV	0.8	沈線 爪形文 縦文 内外ハケ	橙・褐色	緻密 烧成良好		
78	その他	3E-53		III	0.5	ナデ 内/外赤彩	赤褐色	緻密 烧成良好		
79	その他	3E-63		V	0.7	+	+	+		
80	その他	3E-63-65		IV・V	0.6	+	+	+		
81	その他	3D-13-23	3-4-8	V	0.6	内外ハケ	橙	緻密 烧成良好		

第16表 石器觀察表 1

器番号	器種	箇位	出土点	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	備考
1	石核	1	3F-9-10	VI	3.8	7.8	6.4	100.6	珪質頁岩	
2	剥片	1	西側断面	II	6.2	9.2	2.2	93.2	珪質頁岩	
3	剥片	1	3F-49	V	4.7	3.1	1.3	12.9	珪質頁岩	
4	剥片	1	3F-19	VI	7.6	6.2	1.3	37.9	珪質頁岩	
5	両極石器	4	1H-85	II	5.1	4.6	1.7	18.4	珪質凝灰岩	
6	両極石器	4	1H-85	VI	4.8	3.9	2.1	31.0	珪質頁岩	
7	石核	4	1H-73	VI	3.8	7.3	3.4	74.9	珪質頁岩	
8	石核	4	1H-74	VI	4.1	5.6	2.7	54.8	珪質頁岩	
9	石核	4	1H-84	VI	4.8	4.9	3.6	40.7	珪質頁岩	
10	剥片	4	1H-84	II	7.3	8.2	2.0	100.2	珪質岩	
11	未成品	7	2G-25	V	3.4	4.3	1.4	19.9	珪質頁岩	左側縁ツブレ
12	剥片	8	2G-19	II	4.5	3.4	1.3	13.3	珪質頁岩	
13	剥片	8	2G-19	III	3.3	4.6	1.8	17.7	珪質頁岩	
14	スクレイバー	3	2H-12	II	4.5	4.8	1.0	23.2	珪質頁岩	
15	両極石器	3	2H-12	II	4.0	2.9	0.8	7.2	珪質頁岩	右側縁欠損
16	両極石器	3	2H-13	II	1.8	2.4	0.5	1.5	珪質頁岩	
17	両極石器	3	2H-22	II	4.4	3.3	1.6	13.9	珪質頁岩	
18	両極石器	3	2H-22	II	4.3	6.2	1.9	33.7	珪質頁岩	
19	両極石器	3	2H-23	II	1.9	3.3	0.9	5.3	珪質頁岩	
20	両極石器	3	2H-1	VI	5.2	6.6	3.7	114.6	珪質頁岩	
21	両極石器	3	2H-22	VI	3.8	2.0	0.9	4.7	珪質頁岩	
22	二次加工のある剥片	3	2H-12	I	3.5	3.4	1.1	11.9	珪質頁岩	下部欠損
23	二次加工のある剥片	3	2H-12	VI	1.9	3.3	1.0	5.9	珪質頁岩	
24	磨石類	3	2H-2	II	10.0	8.6	4.2	405.8	安山岩	
25	石核	3	2H-2	II	6.1	3.6	2.1	30.4	珪質頁岩	
26	使用痕のある剥片	3	2H-23	I	3.2	5.1	1.1	11.1	珪質頁岩	
27	使用痕のある剥片	3	2H-1	II	6.5	5.3	1.1	32.6	珪質頁岩	
28	使用痕のある剥片	3	2H-11	II	5.9	3.3	1.1	16.4	珪質頁岩	
29	使用痕のある剥片	3	2H-13	II	3.6	3.8	1.3	11.6	珪質頁岩	
30	有舌尖頭器	6	3G-12	VI	4.4	1.9	0.6	4.3	珪質頁岩	
31	半月形尖頭器	6	3F-30	VI	10.5	5.8	1.5	86.6	無斑晶安山岩	
32	石錐	6	3G-31	VI	4.4	2.3	0.9	7.6	珪質頁岩	
33	石錐	6	3G-22	VI	5.7	2.5	0.6	6.7	無斑晶安山岩	
34	スクレイバー	6	3G-21	II	3.1	2.0	0.9	6.7	珪質頁岩	上下端欠損
35	二次加工のある剥片	6	3G-31	IV	3.5	3.3	1.0	7.6	珪質頁岩	
36	二次加工のある剥片	6	3G-31	V	3.5	3.4	0.9	8.2	珪質頁岩	
37	二次加工のある剥片	6	3G-11	VI	5.5	3.0	1.1	10.0	珪質頁岩	
38	二次加工のある剥片	6	3G-13	VI	3.3	2.5	0.7	4.2	珪質頁岩	
39	二次加工のある剥片	6	3G-22	VI	3.4	5.2	1.4	20.0	珪質頁岩	
40	二次加工のある剥片	6	3G-22	VI	3.5	3.6	0.8	7.3	珪質頁岩	
41	未成品	6	3G-2	VI	4.5	2.1	0.8	4.0	珪質頁岩	尖頭器破損品
42	石核	6	3G-13	VI	4.1	5.4	2.3	43.6	珪質頁岩	
43	石核	6	3G-12	VI	6.0	8.1	3.6	131.0	無斑晶安山岩	3G-31出土の2点と接合
44	使用痕のある剥片	6	3G-11	VI	4.7	3.1	0.9	8.9	珪質頁岩	
45	剥片	6	3G-2	II	5.1	1.7	1.0	7.3	珪質頁岩	
46	剥片	6	3G-11	II	3.7	6.6	1.1	20.7	珪質凝灰岩	
47	剥片	6	3G-21	IV	2.7	3.3	0.6	3.7	珪質頁岩	
48	剥片	6	3G-42-43	IV	4.7	2.4	0.7	4.0	珪質頁岩	
49	剥片	6	3G-31	V	1.6	2.4	0.4	1.3	珪質頁岩	
50	剥片	6	3G-31	V	2.1	1.6	0.4	1.0	珪質頁岩	
51	剥片	6	3G-31	V	2.9	1.8	0.5	1.6	珪質頁岩	
52	剥片	6	3G-31	V	3.9	2.9	0.8	5.7	珪質頁岩	
53	剥片	6	3G-32	V	2.5	1.2	0.4	0.7	無斑晶安山岩	
54	剥片	6	3G-32	V	2.0	1.3	0.3	0.4	珪質頁岩	
55	剥片	6	3G-21	VI	2.6	2.3	0.5	1.8	珪質頁岩	板熱
56	剥片	6	3G-22	VI	1.2	1.7	0.3	0.5	珪質頁岩	
57	剥片	6	3G-22	VI	3.2	3.2	0.9	5.0	珪質頁岩	
58	剥片	6	3G-22	VI	3.5	3.6	0.6	5.2	珪質頁岩	
59	剥片	6	3G-23	VI	3.7	3.2	0.6	5.0	珪質頁岩	
60	剥片	6	3G-11	VI	1.9	1.6	0.3	0.7	珪質頁岩	
61	剥片	6	3G-12	VI	2.8	2.0	0.5	1.9	珪質頁岩	
62	剥片	6	3G-11	VI	3.1	3.2	0.6	4.0	珪質頁岩	
63	スクレイバー	9	2F-23	VI	5.3	3.8	3.0	40.7	珪質頁岩	
64	石核	9	2F-6	I	6.8	5.7	2.2	87.0	無斑晶安山岩	
65	使用痕のある剥片	9	2F-7	IV	5.9	4.8	1.4	46.4	結板岩	
66	使用痕のある剥片	9	1F-94	I	6.7	8.0	1.7	71.6	無斑晶安山岩	
67	使用痕のある剥片	9	1F-96	I	3.1	3.2	0.8	8.3	珪質凝灰岩	
68	使用痕のある剥片	9	2F-2	I	1.8	1.9	0.6	2.2	チャート	
69	使用痕のある剥片	9	2F-8	I	2.1	1.4	0.8	1.8	珪質頁岩	

第17表 石器観察表 2

図番号	器種	魚中区印	出土地点	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	備考
70	使用痕のある剝片	9	2F-23	I	3.4	4.0	1.1	10.9	珪質頁岩	
71	使用痕のある剝片	9	2F-36	I	5.8	5.6	3.1	72.8	珪質頁岩	
72	使用痕のある剝片	9	1F-97	V	3.8	2.4	1.0	8.3	珪質頁岩	
73	使用痕のある剝片	9	2F-29	VI	10.0	12.0	2.4	249.4	無縫晶安山岩	
74	石鉗	その他	3D(12T)	I	1.6	1.6	0.6	1.3	珪質頁岩	つまみ部欠損
75	スクレイパー	その他	2F-21	I	4.3	1.8	1.7	53.9	珪質頁岩	
76	スクレイバー	その他	3D-40	I	4.2	5.4	1.1	21.0	珪質頁岩	
77	スクレイバー	その他	1F-97-2R-21	VI	11.3	5.3	2.9	178.0	珪質頁岩	接合資料
78	範状石器	その他	3G-51	III	6.6	4.6	1.7	56.3	硬砂岩	
79	両極石器	その他	4トレンチ	I	3.2	2.6	1.3	8.7	珪質頁岩	
80	両極石器	その他	2H-6	I	3.4	2.0	0.7	4.1	珪質頁岩	
81	両極石器	その他	2H-3	II	3.4	2.3	2.2	13.4	珪質頁岩	
82	両極石器	その他	2H-14	II	4.2	2.6	1.0	9.2	珪質頁岩	
83	一次加工のある剝片	その他	2E-8	I	4.4	5.6	1.4	25.3	珪質頁岩	
84	二次加工のある剝片	その他	1G-77	II	1.9	1.7	0.7	1.4	珪質頁岩	
85	二次加工のある剝片	その他	2H-16	II	3.4	5.6	1.0	15.7	珪質頁岩	
86	打製石斧	その他	3G-71	VI	7.3	5.1	2.4	94.9	珪質頁岩	
87	礫器	その他	3D-34	VI	8.1	12.0	6.3	721.8	珪質頁岩	
88	未成品	その他	2E-93	II	5.9	6.6	2.6	90.6	珪質頁岩	
89	未成品	その他	3F-45	IV	2.7	2.2	0.9	5.3	珪質頁岩	尖頭器破損品
90	未成品	その他	3D-47	VI	6.1	3.2	3.2	55.2	珪質頁岩	
91	石核	その他	3E-41	I	8.1	6.0	3.9	179.9	珪質頁岩	
92	石核	その他	2H-25	II	4.4	5.7	2.6	62.7	珪質頁岩	
93	石核	その他	3G-51	VI	7.5	12.2	4.7	238.5	珪質頁岩	
94	石核	その他	耕土		13.6	9.7	4.2	403.4	珪質頁岩	
95	使用痕のある剝片	その他	1H-91	I	1.8	2.5	0.6	1.6	珪質頁岩	
96	使用痕のある剝片	その他	1H-100	II	5.3	1.9	0.9	1.3	珪質頁岩	
97	剝片	その他	2D-49	I	1.6	2.0	0.8	2.6	珪質頁岩	
98	剝片	その他	2E-36	I	3.6	3.7	0.9	8.7	珪質頁岩	
99	剝片	その他	2H-50	I	3.4	2.0	0.9	4.3	珪質頁岩	
100	剝片	その他	2H-4	I	4.1	3.6	1.5	17.8	珪質頁岩	
101	剝片	その他	2H-14	I	3.4	5.0	1.7	26.6	珪質頁岩	
102	剝片	その他	3E-98	I	10.3	8.2	3.9	285.2	珪質頁岩	
103	剝片	その他	1E-83	II	4.9	3.6	0.9	15.0	珪質頁岩	
104	剝片	その他	1G-84	II	4.0	1.5	1.1	5.0	珪質頁岩	
105	剝片	その他	2G-23	II	4.0	3.0	0.8	6.4	黑色頁岩	
106	剝片	その他	3F-63	III	4.0	9.0	1.2	28.0	珪質頁岩	
107	剝片	その他	3E-53	IV	1.9	3.1	1.0	4.0	珪質頁岩	
108	礫片	その他	3E-41	V	9.7	9.0	3.3	216.4	珪質頁岩	
109	剝片	その他	3E-45	V	3.9	3.2	1.0	6.1	珪質頁岩	
110	剝片	その他	1P-77	VI	2.3	3.4	1.0	7.2	珪質頁岩	
111	剝片	その他	1G-95	VI	8.4	6.6	2.6	127.1	珪質頁岩	両側縁ツブレ
112	剝片	その他	3D-6	VI	6.4	5.5	1.8	42.2	珪質頁岩	
113	剝片	その他	3D-27	VI	8.8	9.4	1.9	113.9	珪質頁岩	
114	使用痕のある礫片	その他	3D-6	VI	13.2	8.9	4.2	463.3	珪質頁岩	
115	石鍬	跡-1次翻	29トレンチ	I	2.1	1.9	0.4	0.5	珪質凝灰岩	
116	スクレイパー	跡-1次翻	17トレンチNo11		8.2	9.9	2.8	249.9	珪質頁岩	
117	スクレイパー	跡-1次翻	17トレンチNo13	I	3.8	9.9	1.3	42.6	珪質凝灰岩	
118	スクレイパー	跡-1次翻	31トレンチ	V	8.3	2.7	1.3	19.8	珪質頁岩	
119	二次加工のある剝片	跡-1次翻	10トレンチ	I	3.2	5.9	1.5	18.5	珪質頁岩	
120	使用痕のある剝片	跡-1次翻	10トレンチ	V	4.4	8.9	1.4	54.8	珪質頁岩	
121	礫器	跡-1次翻	17トレンチNo2	I	13.7	13.3	5.2	944.7	珪質凝灰岩	
122	礫器	跡-1次翻	27トレンチ		10.8	11.0	5.1	770.3	珪質凝灰岩	
123	石核	跡-1次翻	17トレンチNo3		5.4	6.2	3.2	83.1	珪質頁岩	
124	剝片	跡-1次翻	17トレンチNo4	I	3.3	3.4	1.4	9.7	珪質頁岩	
125	剝片	跡-1次翻	17トレンチNo9	I	12.9	8.9	3.8	444.5	珪質凝灰岩	
126	剝片	跡-1次翻	17トレンチ	I	8.5	10.3	3.6	284.1	珪質頁岩	
127	剝片	跡-1次翻	17トレンチNo8	II	6.2	8.9	2.0	83.7	珪質凝灰岩	
128	剝片	跡-1次翻	17トレンチNo15		11.3	11.2	3.9	412.2	珪質頁岩	
129	剝片	跡-1次翻	不明		8.7	10.7	4.0	381.4	珪質頁岩	
130	破砕礫	跡-1次翻	20トレンチNo2		6.2	2.1	1.7	17.0	無縫晶安山岩	
131	破砕礫	跡-1次翻	20トレンチNo1		8.3	7.9	3.0	197.3	無縫晶安山岩	
132	破砕礫	跡-1次翻	20トレンチNo5		3.4	8.4	1.8	38.5	無縫晶安山岩	
133	破砕礫	跡-1次翻	20トレンチNo8		10.6	7.0	2.4	166.8	無縫晶安山岩	
134	破碎礫	跡-1次翻	20トレンチNo11		8.8	6.3	2.1	116.6	無縫晶安山岩	

第VII章 自然科学分析

1 はじめに

長野県飯山市から中魚沼郡津南町を経て新潟平野南部の三島郡三島町に至る信濃川の中・下流域には、河岸段丘群が発達している。特に津南町や中里村付近の信濃川右岸では段丘の発達が著しいが、左岸は急峻な山地となっており段丘は狭小である。これらの段丘は中期更新世～完新世にかけて形成されたものである（日本の地質『中部地方I』編集委員会1988）。屋敷田遺跡は信濃川と清津川の合流点に近い清津川左岸に立地し、遺跡の範囲は複数の段丘面にわたっている。遺跡の北側には、清津川の支流の石原川が段丘上を開削して流れている。今回の発掘調査では、遺跡が立地するもっとも低位の段丘面上の河道より縄文時代草創期から早期の土器や剝片が多数出土している。周辺では、出沢・小丸山・壬・卯ノ木南遺跡などの旧石器時代後期末から縄文時代草創期にかけての遺跡が、信濃川の河岸段丘上に分布している。したがって、本地域のこの時期の遺跡の立地や変遷を知るために、信濃川右岸に発達する河岸段丘の形成過程や地形変遷を調査することが重要である。

今回の自然科学分析は、平成6年度にひきづき屋敷田遺跡が立地する各段丘面の層序対比及び地形変遷を知るために火山ガラス比分析及び重鉱物分析を行う。なお、本稿は平成6・7両年度にわたり実施した分析調査結果をまとめ、総合解析を行ったものである。

一般に地層の対比には、指標テフラを見いだし、それを鍵層にする方法がとられる。本地域では、更新世後期の重要な指標テフラとして始良Tn火山灰（AT：町田・新井1976）と浅間草津アソフ（As-K：町田・新井1992）がある。ATは鹿児島県の始良カルデラを給源とする、降灰年代は約2.1～2.5万年前と考えられている（町田・新井1992）。As-K（いわゆる As-YPk）は浅間軽石流期のテフラで、浅間板鼻黄色軽石（As-YP：新井1962）と同一噴火輪廻のテフラと考えられている（町田・新井1992）。分布主軸は北東で、主に群馬県北西部から新潟県南部に分布し、その降灰年代は約1.3～1.4万年前と考えられている（町田・新井1992）。発泡のよい黄白色軽石を主体とするが軽石型の火山ガラスも含まれ、遠隔地（特に信濃川流域の津南町付近）では本アソフ層準に軽石型火山ガラスの濃集部が認められる（町田ほか1984）。さらに、As-K（引用文献中ではAs-YPk）に対比されるテフラは、東北地方南部から中部でも認められている（小岩・早田1994）。浅間軽石流期のテフラでは、そのほかに南関東の立川ローム層最上部ガラス質火山灰（UG：山崎1978）がある。その降灰年代は約1.2万年前とされており（町田・新井1992）、武藏野台地の立川ローム層のⅢ層上部が降灰層準と考えられている。

火山ガラス比分析では、当遺跡の土壤中に混交するこれらのテフラ由来の火山ガラスの産状を調べ、その降灰層準を推定する。また、重鉱物分析では、褐色火山灰十層（いわゆるローム層）中の重鉱物組成を調べ、その層位的変化を指標として対比に用いる。重鉱物分析による層序対比は、武藏野台地の立川ローム層では対比資料が比較的多いため特に有効な手段となっている。当遺跡周辺では分析例は少ないが、地点間の対比に用いかり、今後のための資料とする。

2 試 料

A Hグリッド(A地点)

Hグリッドはもっとも低位の段丘面(A地点)に位置する。土層断面では、上位より表土層、Ⅲ層、Ⅶ層、Ⅷ層に分層されている。Ⅶ層はさらにⅦ②・Ⅶ④層に分けられている。Ⅲ層は暗褐色シルト層、Ⅶ層は褐色シルト層、Ⅷ②層は褐色砂混りシルト層、Ⅷ③層は黄褐色砂質シルト層、Ⅷ④層は灰色砂層である。縄文時代草創期の遺物は主にⅦ層から出土している。また、Ⅶ③層とⅧ④層の間は不整合面と考えられている。

試料は上位の表土からⅧ④層まで厚さ5cmで連続的に試料番号1～23が採取されている。この中から、火山ガラス比分析に試料番号5・14・16・19・22の計13点を選択する。前述のAs-K及びATの検出が予想される層準では試料を連続的に選択し、それ以外の層準では試料選択の間隔をやや開けた。以上の柱状図と試料採取位置を第31図に示す。

B G3グリッド(A地点)

G3グリッドは、Hグリッドと同様にもっとも低位の段丘面(A地点)に位置する。土層断面では、上位よりⅠ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層に分層されている。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は盛土、Ⅲ層は暗褐色シルト層、Ⅳ層は褐色シルト層、Ⅴ層は暗褐色シルト層である。縄文時代草創期と考えられる無文土器や石器がⅤ層から出土している。また、Ⅴ層の下位には、礫が多く含む暗褐色シルト層を挟んで礫層が認められる。試料は、上位の耕作土からⅤ層まで厚さ5cmで連続的に試料番号14～29が採取されている。この中から、火山ガラス比分析に試料番号21～29の計9点を選択する。以上の柱状図と試料採取位置を第32図に示す。

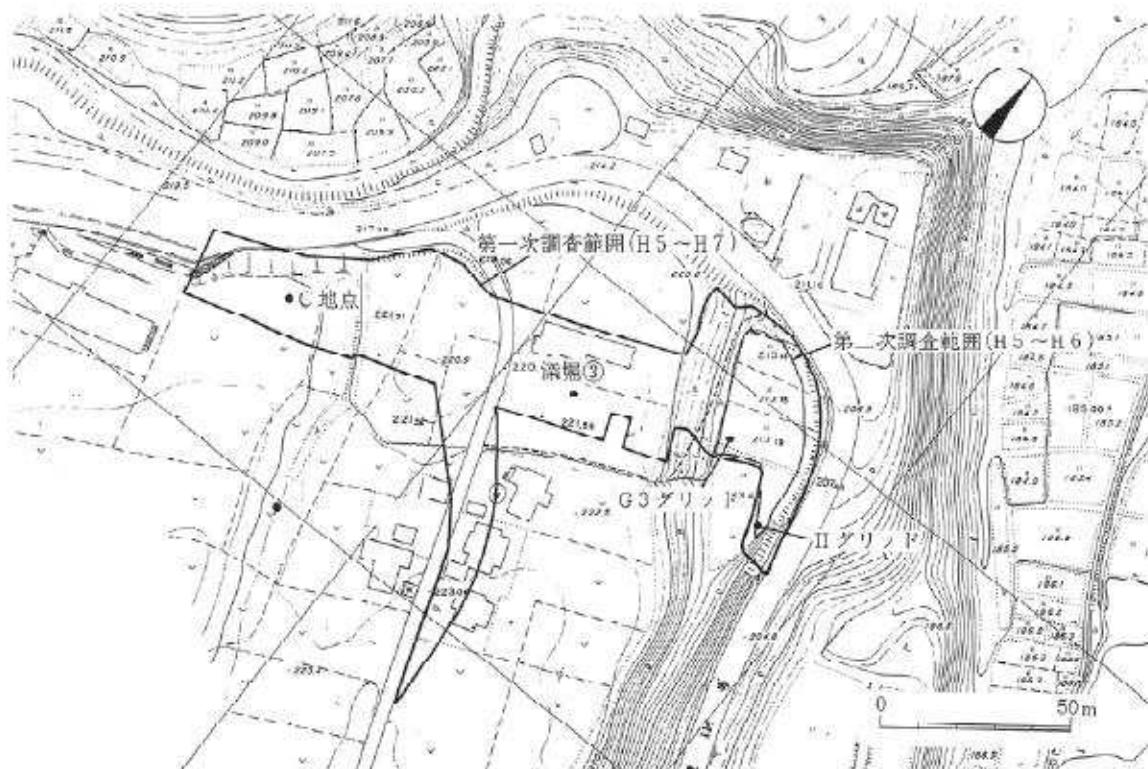
C 深 挖 ③(B地点)

深挖(3)はA地点より高位で、後述のC地点より低位の段丘面(B地点)に位置する。土層断面では、上位よりⅠ～Ⅴ層に分層されている。Ⅰ層は表土層、Ⅱ～Ⅳ層は褐色シルト層、Ⅴ層は礫層である。なお、Ⅱ層は表土層の暗褐色シルト層から下位の褐色火山灰層(いわゆるローム層)への漸移層、Ⅲ・Ⅳ層はいわゆるローム層であるが、Ⅳ層のほうがより固くしまり、下半部に小礫が混じる。試料は、上位の表土層からⅣ層まで厚さ5cmで連続的に試料番号1～26が採取されている。この中から重鉱物分析に試料番号3～18・20・22・24の計19点を、火山ガラス比分析に試料番号3～18・20の計17点を選択する。以上の柱状図と試料採取位置を第33図に示す。

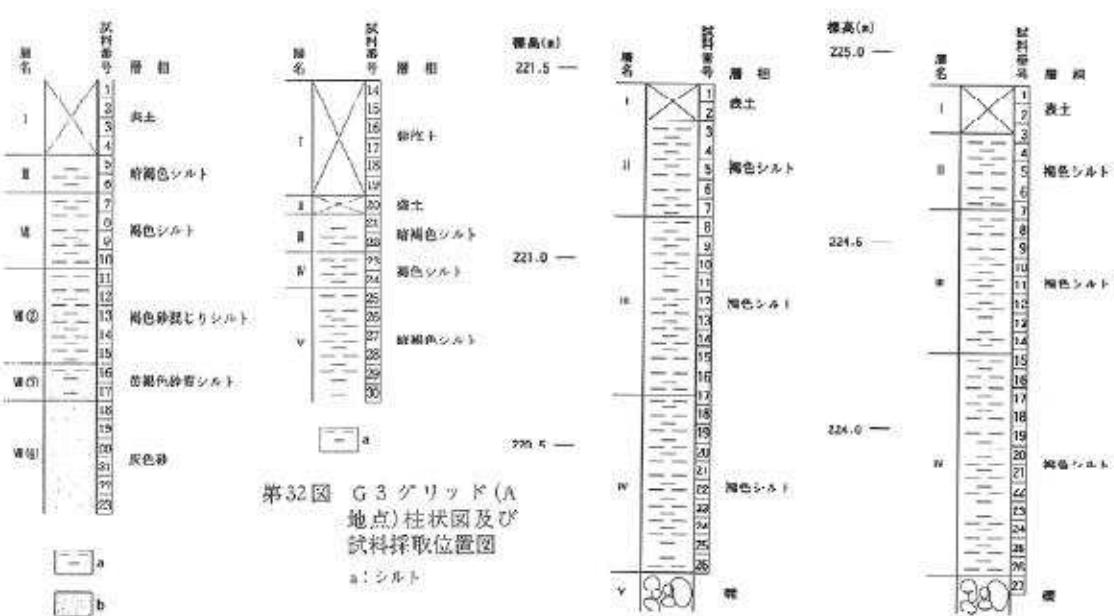
D C 地 点

C地点はもっとも高位の段丘面に位置する。土層断面では、上位よりⅠ～Ⅳ層、礫層に分層されている。Ⅰ層は表土層、Ⅱ～Ⅳ層は褐色シルト層である。なお、Ⅱ層は表土層の暗褐色シルト層から下位の褐色火山灰層(いわゆるローム層)への漸移層、Ⅲ・Ⅳ層はいわゆるローム層であるが、Ⅳ層のほうがより固くしまり、小礫が混在する。

試料は、上位の表土層から礫層まで厚さ5cmで連続的に試料番号1～27が採取されている。この中から



第30図 自然科学分析用試料採取地点図(編集者作成)

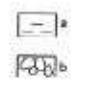


第32図 G-3 グリッド(A 地点)柱状図及び試料採取位置図

a:シルト

第31図 H グリッド(A 地点)柱状図及び試料採取位置図

a:シルト b:隙



第33図 深掘③(B 地点)柱状図及び試料採取位置図

a:シルト b:隙

第34図 C 地点柱状図及び試料採取位置図

a:シルト b:隙

重鉱物分析に試料番号3-14・17・21・25の計15点を、火山ガラス比分析に試料番号3-14の計12点を選択する。以上の柱状図と試料採取位置を第34図に示す。

3 分析方法

A 重鉱物分析

試料約40 gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16 mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4~1/8 mmの砂分をポリタンクステート(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒及び変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

B 火山ガラス比分析

重液分離により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の碎屑物を250粒を計数し、碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便直上軽鉱物にいれ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状及び気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

4 結 果

A Hグリッド(A地点)

(1) 火山ガラス比分析

結果を第18表、第35図に示す。火山ガラスは各試料にごく微量含まれ、その形態はバブル型・中間型・軽石型の各型が認められる。また、粒径1/8~1/16 mmの砂分も観察したところ、同様の産状を示した。これらの火山ガラスは、その形態や色調及び堆積物の時代観により、AT及びAs-Kに由来すると考えられる。しかし、今回の産状からそれらの降灰層準は推定できない。したがって、本地点の土層は古くともAs-K降灰以降すなわち約1.3~1.4万年前以降に堆積したと考えられる。

B G3グリッド(A地点)

(1) 火山ガラス比分析

結果を第19表、第36図に示す。火山ガラスは各試料に微量含まれ、その形態はバブル型・中間型・軽石型の各型が認められる。また、粒径1/8~1/16 mmの砂分も観察したところ、同様の産状を示した。これらの火山ガラスは、その形態や色調及び堆積物の時代性により、AT及びAs-Kに由来すると考えられる。

しかし、この産状からその降灰層準は推定できない。したがって、本地点の土層は古くとも As-K 降灰以降すなわち約1.3~1.4万年前以降に堆積したと考えられる。

C 深掘 (3)(B 地点)

(1) 重鉱物分析

結果を第20表、第37図に示す。いずれの試料も斜方輝石がもっとも多く、单斜輝石、角閃石、不透明鉱物を少量含む重鉱物組成を示す。下位の試料では比較的「その他」とした試料が多い。斜方輝石と单斜輝石をあわせた両輝石は試料番号9・20に量比の極大層準が、試料番号7・18・22に量比の極小層準が認められる。また、試料番号7から上位に向かって増加する。角閃石は含まれていても少量～微量で明瞭な極大・極小を示さないが、試料番号12より下位の試料中に比較的多く認められる。不透明鉱物は明瞭な極大・極小を示さないが、試料番号14より上位で比較的多く認められる。

(2) 火山ガラス比分析

試料番号3~12では軽石型火山ガラスが比較的多く認められる。下位よりみて、試料番号12から試料番号6で漸増、試料番号6から試料番号4で漸減、試料番号4から試料番号3で漸増する。この火山ガラスは、その産出層準と形態から As-K に由来すると考えられる。一般に、土壤中に特定のテフラが混交して产出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い(早津1988)。これに従えば、本地点の As-K の降灰層準は試料番号6~7付近のⅡ層下部と考えられる。また、試料番号12~17付近ではバブル型火山ガラスの濃集が認められる。下位よりみて、試料番号20から試料番号16で増加、それより上位では減少する。この火山ガラスは、その産出層準と形態及び色調により、AT に由来すると考えられる。前述の(早津1988)に従えば、本地点における AT の降灰層準は、試料番号16~17付近のⅢ層最下部と考えられる。

D C 地点

(1) 重鉱物分析

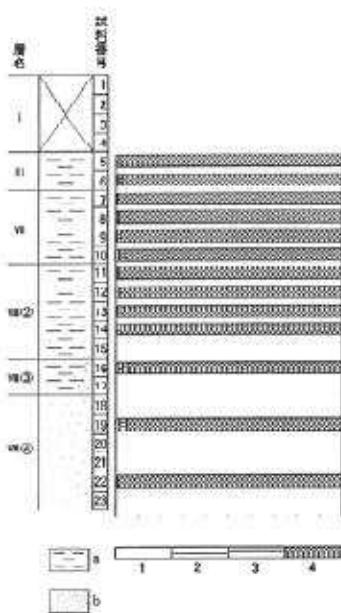
結果を第21表、第38図に示す。いずれの試料も斜方輝石と单斜輝石の両輝石がっとも多く、角閃石、不透明鉱物を含む重鉱物組成を示す。深掘③と類似して下位の試料ではやや「その他」とした試料が多い。両輝石は試料番号5・9・17に量比の極大層準が、試料番号7及び14に量比の極小層準が認められる。角閃石は含まれていても少量～微量で明瞭な極大・極小を示さないが、試料番号14より下位の試料中に比較的多く認められる。不透明鉱物は明瞭な極大・極小を示さないが、試料番号8より上位で比較的多く認められる。

(2) 火山ガラス比分析

試料番号3~7では軽石型火山ガラスが比較的多く認められる。下位よりみて、試料番号9から試料番号5で漸増、試料番号5から試料番号3で漸減する。この火山ガラスは、その産出層準と形態から As-K に由来すると考えられる。前述の(早津1988)に従えば、本地点における As-K の降灰層準は試料番号6

第18表 Hグリッド(A地点)火山ガラス比分析結果

試料番号	バブル型	中間型	軽石型	その他	合計
火山ガラス	火	山	ガ	ラ	ス
6	0	3	3	344	250
6	2	2	3	243	250
7	0	2	1	247	250
8	1	1	2	246	250
9	2	0	4	244	250
10	4	3	4	239	250
11	2	2	0	246	250
12	0	4	1	245	250
13	1	2	4	243	250
14	1	0	5	244	250
16	3	5	5	237	250
19	4	1	7	238	250
22	1	0	2	247	250

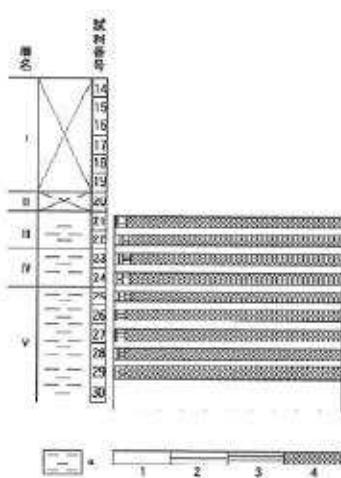


第35図 Hグリッド(A地点)火山ガラス比

a:シルト b:砂
1:バブル型火山ガラス 2:中間型火山ガラス
3:軽石型火山ガラス 4:その他

第19表 G3グリッド(A地点)火山ガラス比分析結果

試料番号	バブル型	中間型	軽石型	その他	合計
火山ガラス	火	山	ガ	ラ	ス
21	2	2	9	237	250
22	6	4	8	234	250
23	5	4	9	232	250
24	4	5	8	233	250
25	5	6	8	231	250
26	1	3	9	237	250
27	2	1	10	237	250
28	3	3	5	239	250
29	1	6	6	237	250

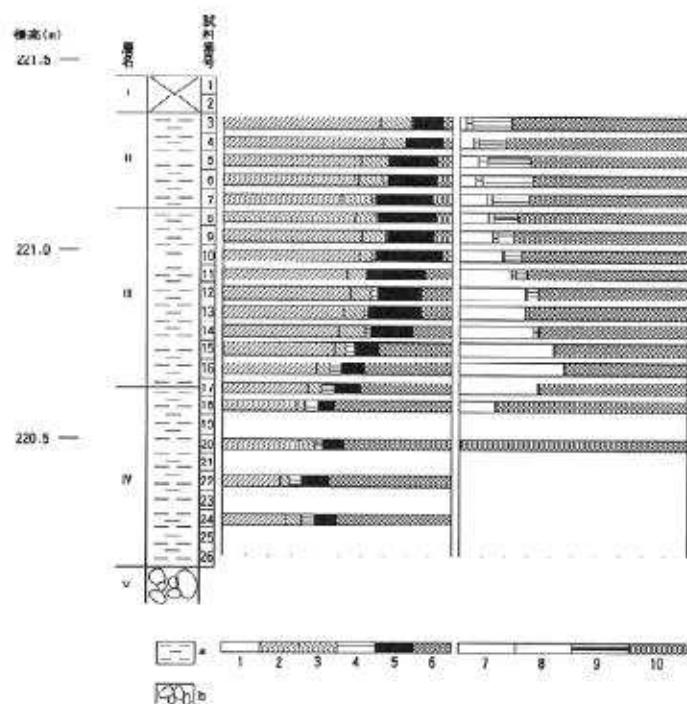


第36図 G3グリッド(A地点)火山ガラス比

a:シルト
1:バブル型火山ガラス 2:中間型火山ガラス
3:軽石型火山ガラス 4:その他

第20表 深掘③(B地点)重鉱物及び火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
3	0	171	34	2	32	11	250	7	6	43	104	250
4	0	173	25	0	41	11	250	15	5	30	200	250
5	0	150	30	1	53	16	250	20	10	47	173	250
6	0	147	28	4	54	17	250	17	7	56	170	250
7	0	129	33	4	63	21	250	20	6	41	174	250
8	0	144	21	3	64	18	250	37	5	39	169	250
9	0	151	26	2	51	20	250	36	5	29	180	250
10	0	148	15	3	73	11	250	46	2	19	183	250
11	0	135	21	2	63	29	250	57	4	13	176	250
12	0	139	22	8	48	33	250	72	2	13	163	250
13	0	132	21	5	59	33	250	72	1	3	174	250
14	0	126	29	6	46	43	250	82	4	2	162	250
15	1	121	12	10	26	80	250	104	0	2	144	250
16	0	102	14	13	25	96	250	115	1	1	133	250
17	0	93	14	15	28	100	250	86	1	1	162	250
18	0	80	10	14	18	128	250	39	0	1	210	250
20	0	84	17	8	23	118	250	1	1	0	248	250
22	0	63	10	13	30	134	250	—	—	—	—	—
24	0	70	16	14	24	126	250	—	—	—	—	—



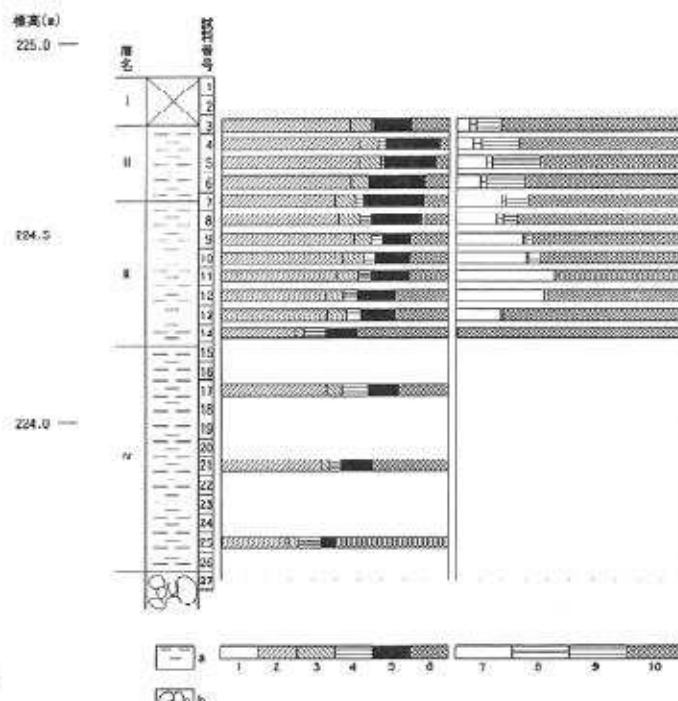
第37図 深掘③(D地点)重鉱物組成及び火山ガラス比

a:シルト b:疊
1:カンラン石 2:斜方輝石 3:单斜輝石
4:角閃石 5:不透明鉱物 6:その他
7:バブル型火山ガラス 8:中間型火山ガラス
9:軽石型火山ガラス 10:その他

第21表 C地点重鉱物及び火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
3	0	140	24	2	42	42	250	14	7	27	202	250
4	0	150	21	8	61	10	250	18	9	41	182	250
5	0	150	24	4	57	15	250	32	7	52	159	250
6	0	141	20	1	61	27	250	26	6	42	176	250
7	0	124	22	9	67	28	250	50	4	25	171	250
8	0	128	24	12	56	30	250	44	7	15	184	250
9	0	145	19	12	32	42	250	73	3	8	166	250
10	0	133	23	12	39	43	250	77	2	13	158	250
11	0	126	24	14	42	44	250	108	2	4	136	250
12	0	114	20	15	42	59	250	96	1	4	149	250
13	0	116	21	16	38	59	250	49	2	1	198	250
14	0	81	9	24	35	101	250	1	0	1	248	250
17	0	115	17	29	33	56	250	—	—	—	—	—
21	0	110	9	12	35	84	250	—	—	—	—	—
25	1	72	11	25	16	125	250	—	—	—	—	—

第38図 C地点重鉱物組成及び火山ガラス比



付近のⅡ層下部と考えられる。

また、試料番号7-13付近ではバブル型火山ガラスが比較的多く認められる。下位よりみて試料番号14から12で急増、試料番号12から11で漸増、試料番号11から8で減少する。この火山ガラスは、その産出層準と形態及び色調により、ATに由来すると考えられる。前述の(早津1988)に従えば、本地点におけるATの降灰層準は、試料番号12付近のⅢ層中～下部と考えられる。

5 考 索

A 地点間の対比

今回の分析調査により、深掘③(B地点)及びC地点ではAT及びAs-Kの降灰層準を推定することができた。したがって、B地点のⅡ層下部がD地点のⅡ層下部に、B地点のⅢ層最下部がC地点のⅢ層下部付近に対比される。A地点のHグリッド、G3グリッドについては、B地点のⅡ層中部以上及びC地点のⅡ層中部以上にあたると考えられるが、詳細な対比はできない。

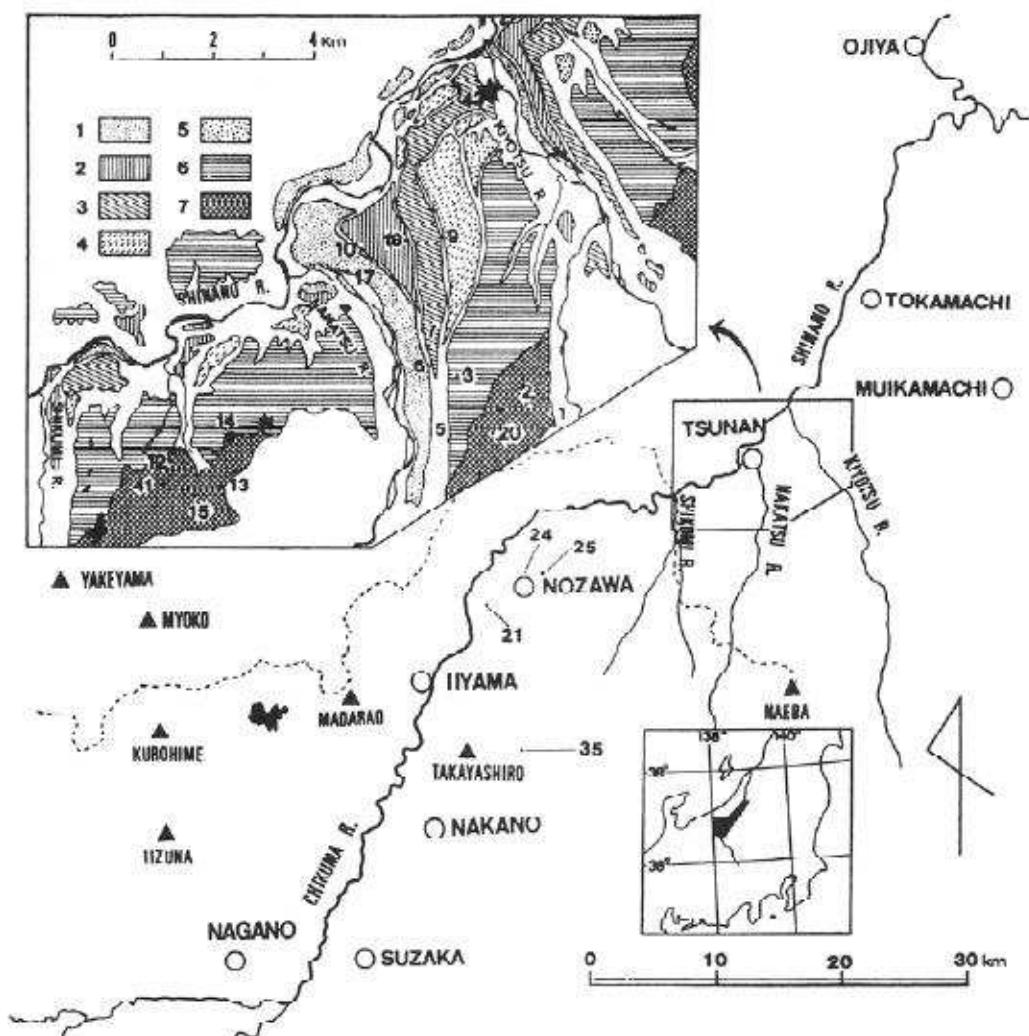
本地域のローム層の重鉱物分析は、これまで(新潟火山灰グループ1981)などにより行われているが、対比の指標はあまり明瞭ではない。信濃川ローム層の上部での重鉱物組成の特徴は、角閃石の極大層準が貝坂ロームの下部に認められること、斜方輝石が貝坂ローム～米原ローム層の上半部では多く認められること、单斜輝石が貝坂ローム層の上半部で比較的多く認められることなどである。また、本分析で不透明鉱物とした磁鐵鉱は、ローム層の全層準に含まれる。今回の分析結果では、斜方輝石や单斜輝石、磁鐵鉱の産状はこれまでの分析結果とはほぼ整合する。ただし、角閃石は今回の分析ではローム層の下部で少量～微量認められたが、これまでの分析例にくらべると少なく極大層準も不明瞭である。これは、D地点及びC地点とともに下位の試料ほど変質粒が多いため、本来の重鉱物組成がわかりにくくなっているためと考えられる。

今回の分析例から、B地点の試料番号7とC地点の試料番号7に認められたAs-Kの降灰層準のやや下位の両輝石の極小は本地域の対比の指標となり得る。また、B地点の試料番号9とC地点の試料番号9に認められた両輝石の極大も、As-KとATの降灰層準の間の指標になり得る。南関東地方の武藏野台地との対比では、前述のようにUGとAs-Kの降灰層準をほぼ同じとし、またATを対比の指標とすれば、B地点のⅡ層下部～Ⅲ層下部及びC地点のⅡ層下部～Ⅲ層中部がおおむね武藏野台地の立川ローム層の標準層序におけるⅢ～Ⅵ層に対比される。

B 各段丘の形成時期と地形変遷

津南町周辺の地形・地質は、日本の地質(『中部地方I』編集委員会1988)に以下のように記載されている。津南・中里・十日町右岸地域では、各段丘は高位から谷上面、米原Ⅰ面、米原Ⅱ面、卯ノ木面、朴ノ木坂面、貝坂面、正面面、大割野Ⅰ面、大割野Ⅱ面に分類されている。この段丘面上には信濃川ローム層といわれる褐色火山灰土層(いわゆるローム層)が分布している。谷上面及び米原Ⅰ面には谷上・米原・貝坂の各ローム層が、米原Ⅱ面、卯ノ木面、朴ノ木坂面には米原・貝坂の各ローム層が、貝坂面、正面面には貝坂ローム層が分布し、大割野Ⅰ面及びⅡ面にはローム層が認められない。

段丘の形成には、いくつかの成因が推測されている。それは、1) 気候の寒冷化に伴う海面低下によっ



第30図 早津・新井(1981)の「位置図」

一部を改変した。数字は、早津・新井(1981)中のもので、本文とは関連しない。
星印は屋敷田遺跡、黒三角は火山、黒く塗りつぶしてある部分は溝沼。
凡例 1：大割野面(大割野Ⅰ・Ⅱ面をあわせた面) 2：正面面 3：貝坂面 4：朴ノ木坂面
5：卯ノ木面 6：米原面(米原Ⅰ・Ⅱ面をあわせた面) 7：谷上面

て河川の下刻作用が進んだため、2) 河川の流路変化によって蛇行していた日本流流路の名残り谷と蛇行州が離水したため(中村1966)、3) 河岸段丘の基盤となる魚沼層群の摺曲と支流の扇状地形成のため(新潟平野團体研究グループ1979)などである。段丘面の形成時期は、貝坂面は約5万年前、正面面は高位のⅠ面と下位のⅡ面にさらに分けられ、正面Ⅰ面はAT降灰以前で古くとも3万年前以降、正面Ⅱ面はAT降灰と同時期、大割野Ⅰ・Ⅱ面は完新世に形成されたとされている(早津・新井1981)。

現地調査及び地形図により、当遺跡付近では3面の段丘面が認められる。もっとも高位の段丘は(早津・新井1981)の「位置図」(第39図)で貝坂面とされている段丘で、当遺跡C地点が立地する。この段丘面は、C地点からさらに南西方向に中津川右岸に長くのびる。それより一段低いのはB地点のある清津川に平行して細長くのびる段丘で、清津川の流路とほぼ平行して緩く下流方向に傾斜する。この段丘上にはちょうど駒返の集落が立地している。もっとも低位な段丘はA地点が立地する狭小な段丘である。

今回の分析結果により、Hグリッド、G3グリッドが位置するA地点の段丘は古くとも約1.3~1.4万年前以降に形成されたと考えられる。したがって、大割野Ⅰ面またはⅡ面にあたると考えられる。B地点の深掘③ではATの降灰層準が認められていることから、B地点が立地する段丘の形成時期は、貝坂面が形成された約5万年前以降で、新しくてもAT降灰以前すなわち約2.1~2.5万年前である。前述の各段丘面の形成時期から、B地点は正面Ⅰ面に対比される可能性がある。ここで、段丘面を構成する疊層の出来はA地点及びB地点とC地点とでは異なると考えられる。すなわち、C地点が立地する貝坂面は、信濃川及び信濃川に上流で右岸から合流する中津川による河川堆積物で構成される。一方、A地点及びD地点が立地する段丘面を構成するのは清津川の河川堆積物と考えられる。これは、以下の当遺跡周辺の地形変遷により説明される。約5万年前以前、当遺跡周辺は信濃川の氾濫原であった。約5万年前、C地点を含む貝坂面が段丘化し、信濃川の流路はC地点からはやや離れ、北の卯ノ木遺跡が立地する段丘面付近を氾濫原として流れようになった。段丘化したC地点は離水しローム層の形成が始まった。C地点のすぐ東には段丘崖があり、崖線下には、清津川の氾濫原が広がっていた。段丘面上には旧流路の名残り川として石原川が残り、清津川の氾濫原に合流していた。その後、およそ3万年前からATが降灰した約2.1~2.5万年前までのある時期には、清津川の下刻が進み、B地点が位置する清津川左岸の氾濫原が段丘化し、清津川の流路はほぼ現在の位置まで退いた。B地点は離水しローム層の形成が始まり、B地点のすぐ東の崖下には清津川の氾濫原が広がっていた。この時期には、A地点はまだ清津川の氾濫原であった。清津川の下刻作用がさらに進むことによりA地点が段丘化するのは、約1.3~1.4万年前以降であるが、この下刻で形成した段丘は非常に狭いものであった。ただし、A地点は完全に離水はせず、その後も河川作用により碎屑物が堆積したと考えられる。特にG3グリッドは旧清津川本流流路の名残り谷部分に当たるため、Hグリッドよりさらに離水は渾かったと考えられる。

C ロームの成因

ローム層(ここではいわゆる関東ローム層のような細粒の火山碎屑物を母材とする土壌をさすものとして用いる)の成因については、従来は小噴火による降下火山灰の累積したもの(たとえば[町田1964]など)とする説が主に支持されてきた。これに対して、いったん堆積した火山灰が風によって移動させられて累積したものとする説も主張されるようになっている。この説は、[中村1970]により提示され、[早川1986]、[早川・由井1989]、[早川1990]などにおいて火山学及び火山灰編年学上の種々の観察事実を根拠として述べられている。この説に従えば、ローム層も黒ボク土層も火山の噴火とは関係なく常に降りつくる風塵によって形成されたこ

となる。また、最近では[鈴木1995]により、過去5万年間に堆積した火山灰土が層厚1mを上回る地域では、ローム層は広域テフラや小規模な噴火によりテフラが一次的に累積したもの(成層構造を保持した一次的な降下火山灰とは認識されないもの)と一度降灰したテフラが二次堆積したものによるが、地域によりその構成物の割合は変化すると述べられている。いずれにしても、風成の火山噴出物が土壤生成作用を受けながら少しづつ累積し、ローム層が形成されていると考えられる。本分析結果におけるAs-KやATの産状はそのことをよく表している。また、ローム層の鉱物組成には火山噴出物の鉱物組成が反映されており、それは同じ地域、同じ時代では類似すると考えられる。したがって、同じ地域において鉱物組成の層位的変化を調べ資料を蓄積することにより、今回のように対比の指標が導き出され、層序対比が可能となる。今後も本地域では段丘発達過程を考慮して調査地点を設定し、同様の分析調査を行うことにより、さらに詳細な対比が可能となるであろう。

引用文献

- 新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」群馬大学紀要自然科学編10-4 p.1-79
- 早川由起夫 1986 「火山灰土の成因と堆積速度」『1986年度春季大会日本火山学会講演予稿集』p.34
- 早川由起夫 1990 「堆積物から知る過去の火山噴火」『大山第2集34火山学の基礎研究特集号』p.S121-S130
- 早川由起夫・由井将雄 1909 「草津白根火山の噴火史」『第四紀研究20』p.1-17
- 早津賛治 1988 「テフラおよびテフラ性土壤の堆積機構とテフロクロノロジー—ATにまつわる議論に關係して—」『考古学研究34』p.18-32
- 早津賛二・新井房夫 1981 「信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代」『地質学雑誌87』p.791-805
- 小岩宣人・早田 魁 1994 「東北地方中南部に分布する更新世末期のガラス質テノラ」『地学雑誌103』p.68-76
- 町田 洋 1964 「Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史 第四紀末期について (その1)(その2)」『地学雑誌73』p.293-308・337-350
- 町田 洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—」『科学46』p.339-347
- 町田 洋・新井房夫 1992 「火山灰アトマス」p.276 東京大学出版会
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984 「アフタと日本考古学—考古学研究と関係するアフタのカタログ—」渡辺直経編『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』p.865-928
- 中村一明 1966 「河成段丘の1つのでき方—信濃川の例—」『第四紀研究5』p.13-17
- 中村一明 1970 「ローム層の堆積と噴火活動」『鉱石学雑誌3』p.1-7
- 日本の地質「中部地方I」編集委員会 1988 「日本の地質4「中部地方I」」p.332 共立出版
- 新潟平野団体研究グループ 1979 「新潟平野をめぐる地形と地質—3」『信濃川の河岸段丘』アーバングボク17 p.8-9
- 新潟火山灰グループ 1981 「新潟県下のローム層について そのI—信濃川ローム層について—」『地質科学35』p.294-311
- 鈴木毅彦 1995 「いわゆる火山灰土(ローム)の成因に関する一考察—中部一関東に分布する火山灰土の層厚分布—」『火山40』p.167-176
- 山崎晴雄 1978 「立川断層とその第四紀後期の運動」『第四紀研究16』p.231-246

第Ⅷ章 ま と め

1 県内草創期遺跡の立地について(第40・41図、第22表)

第40図は新潟県内の縄文時代草創期の遺跡分布図であるが、いくつかの遺跡集中地域が見られる。北から信濃川の支流に当たる五十嵐川流域の下田村一帯、信濃川中流域の小千谷市・川口町・堀之内町一帯があげられ、特に小千谷市では近年の百塚西C遺跡(江口1996)、二仏生遺跡、金塚遺跡(江口ほか1997)などの発掘調査によって草創期の資料が蓄積されつつある。そして、県下最大の遺跡集中地域は信濃川上流域の津南町・中里村一帯である。これらの遺跡はすべて河川流域に立地していることが知られる。また、洞窟遺跡として縄文時代草創期研究の基礎を作った常陸川流域・上川村の小瀬が沢洞窟遺跡・室谷洞窟遺跡がある。この地域は、他の地域より洞窟・岩陰遺跡の多いことが特徴としてあげられる。

信濃川上流域の津南町・中里村一帯の遺跡集中地域は、山形県置賜盆地の日向洞窟や火箱岩洞窟、一の沢洞窟などの洞窟群や関東地方、さらに西北九州の福井洞窟や泉福寺洞窟などの一帯と同様に全国的な草創期遺跡集中地域の一つの核地帯を形成している。中でも第41図のように、信濃川と清津川の合流点の近くの右岸にはおざか清水遺跡、小丸山遺跡(石坂ほか1994)、干溝遺跡(佐藤1994)、壬遺跡(小林1980・1981・1982・1983・1987)、田沢遺跡(芹沢1963)、中林遺跡(芹沢1966)、一里塚遺跡(中里村史専門委員会1985)などがあり、左岸には本ノ木遺跡(芹沢・中山1957)、卯ノ木遺跡(中村1963)、卯ノ木南遺跡(小林・原1993)などの考古学史上重要な遺跡が立地する。これらの遺跡と当遺跡は大割野I、あるいは大割野II面とよばれる同一の段丘面上に立地している。

2 遺物出土状況

当遺跡出土の遺物は、検出された2筋の河道に流入した堆積土、及び河道埋没後の上部堆積土からの出土である。2筋の河道の堆積土とも概ねレンズ状に堆積しているが、自然科学分析結果から山側の河道1は谷側の河道2より離水時期が遅かったものと推測される。

遺物集中区は8か所検出されている。縄文時代草創期の遺物集中区が4か所(集中区1・6・7・9)、早期の集中区が1か所(集中区8)、弥生時代の集中区が1か所(集中区5)である。ここでは、縄文時代の遺物集中区を河道ごとに出土状況を簡単に見ていただきたい。

集中区1 河道1の右斜面に位置し、出土遺物は土器を主体とする。土器は草創期のAa1類の無文土器36片がIV～V層から出土し、Ab1類隆起線文土器2片がVI・VII層から出土し、Ab2類の隆起線文+微隆起線文土器の1片がVI層、Ab3類微隆起線文土器の1片がV层からそれぞれ出土している。石器類は石核1点、剝片3点と少ない。

集中区6 河道1の右斜面から河床に位置している。土器は草創期のAb1類隆起線文土器1個体、Ab2類2個体、Ab3類2個体が出土している。V～VII層から出土している。石器は成品が多く、有舌尖頭器、半月形尖頭器、石錐、石匙、スクレイパーなどがVI～VII層から出土している。この集中区1と6から大半

の草創期の土器が出土している。

集中区3 河道2の南岸でテラス状の平坦部から南へ落ち込む斜面に位置する。土器はAb3類微隆起線文土器5点3個体分でⅡ層からの出土である。石器は両極石器7点、二次加工のある剝片2点、磨石1点、石核1点、使用痕のある剝片が1点出土している。石器はI・Ⅱ層から出土しているものが主体であるが、VI・VII層から出土しているものと石材が類似していることから、この一帯は耕作等により搅乱を受けた可能性もある。

集中区4 河道2の南岸でテラス状の平坦部に位置する。土器は出土していない。石器は石核4点と剝片10点である。

集中区7 河道2の東から北へ湾曲する南側平坦部に位置する。土器はAa1類土器の小型の無文土器が出土している。石器類は土器と同一層位から剝片が8点出土している。

集中区9 河道2の左斜面に位置する。草創期の土器はⅤ層から3点出土しており、その上のVI層からは前期と中期の土器が出土している。石器はスケレイバー、石核、剝片が出土しているが、剝片は主に耕作土からの出土で、スケレイバーのみⅣ層からの出土である。

集中区8 河道2の南岸でテラス状の平坦部に位置する早期の押型文土器の集中地点であり、すべて同1個体である。出土層位はⅢ～Ⅵ層とかなり幅がある。石器は剝片4点でⅠ～Ⅲ層からの出土であるため、土器との関係は薄いと考えられる。

以上のように遺物集中区の区分は平面分布によるもので、同一集中区でも遺物の出土層位には幅がある。同一個体の土器でも出土層位と標高差はかなりの幅がある(第26図)。

3 縄文時代草創期の土器について

土器は第1群A類とした縄文時代草創期前半の無文土器とB類隆起線文土器を中心に16個体分が出土している。ここでは土器の文様別に特徴を簡単に述べたい。2個体のAa1類無文土器は県内でも出土例が少なく、壬遺跡下層土器や、湯沢町大刈野遺跡(金子1988)など数例である。同一個体の土器の出土層位はかなりの幅があり、集中区1の無文土器と隆起線文土器の出土層位は重なる部分も多い。施文技法の差は時期的相違と考えられるが当遺跡では時期差はないものと考えられる。共伴する石器も有舌尖頭器・半月形石器など草創期に特有のもので、この意味では後期旧石器から縄文時代への過渡期と評価される大刈野遺跡の無文土器とは同一には扱えない。Ab1類隆起線文で施文する土器は3個体である。口縁部から横位に密接して6条施文するタイプと無文部を多く持つタイプ、斜位に隆起線文が施文されるタイプである。施文の技法も指あるいは工具とそれぞれ異なっている。Ab2類隆起線文+微隆起線文で施文する土器は3個体で、横位の隆起線文と垂下する短微隆起線文の組み合わせの文様もみられる。Ab3類微隆起線文で施文する土器は6個体と最も多く、ヘフ状工具による作り出し・結上紐の貼付けなどの技法が見られる。48～55の個体は胎土の質感・色調や器厚が極めて薄いことなど他の土器とは様相が異なる。時期的な相違とも考えられるが、出土状況からは他の土器との区別は付けがたい。また、繊細な交差する微隆起線文の施文技法も解明することができなかった。57のように外面は微隆起線によって施文し、口縁部に内面突起によって加飾を施すものもある。57～59は清津川対岸の干溝遺跡出土の土器と同一個体と思えるほど近似しているということから、当時の人々の交流または活動の範囲を推定する材料となり得る。



『新潟県中通中編「原の内代」』の図1を一部改変

第40図 県内縄文時代草創期遺跡分布図

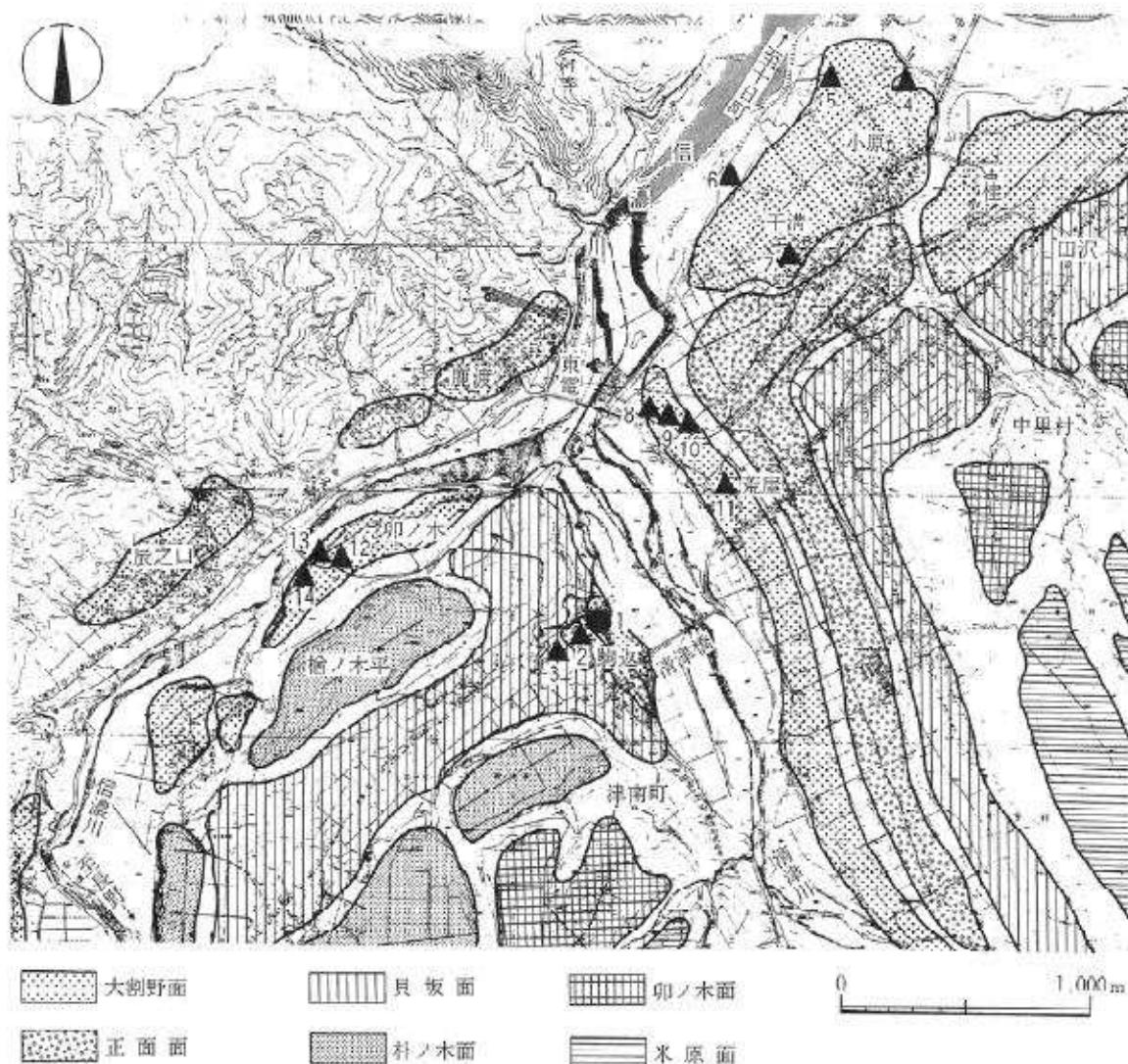
第22表 新潟県内の縄文時代草創期遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	土器	石器	遺構	その他
1	上山	山北町		○		
2	鏡口	朝日村		○		
3	平林	柿林村		○		
4	天王前	柿林村		○		
5	松山	新発田市		○		
6	川東地区	新発田市		○		
7	ト東野口	新発田市		○		
8	石仏	佐神村		○		
9	岩倉A	佐神村		○		
10	知江	佐神村		○		
11	村杉	佐神村		○		
12	萬原平A	佐神村		○		
13	居平	新津市		○		
14	吉ヶ沢B	三川村		○		
15	上ノ平A	二川村		○	ブロック1か所	
16	猿銀	津川町		○		
17	八田聲	上川村		○		
18	小瀬がい御塗	上川村	□	○	骨器、腕骨 歯骨	
19	東谷洞窟	上川村	○	○		
20	福島高凌	鳴町		○		
21	ケカチ堂	巻町		○		
22	福井	巻町		○		
23	新谷	巻町		○		
24	御手洗山	巻町		○		
25	有馬崎	分水町		○		
26	牛ヶ沢日	加茂市		○		
27	牛ヶ沢B	下田村		○		
28	鹿峰	下田村		○		
29	江口A	下田村		○		
30	蘿子A	下田村		○		
31	藏山	下田村		○		
32	荒浜	下田村		○	ブロック1か所	
33	長坂	下田村		○		
34	施野保北	柏崎市		○		
35	金沢	柏崎市		○		
36	耳取塚A	見附市	○			
37	糸保坂	見附市		○		
38	峠	見附市		○		
39	藤橋塚新田	長岡市		○		
40	上の沢	長岡市		○		
41	姫子打塲	長岡市		○		
42	山塹	越路町		○		
43	三仙生	小千谷市	○	○		
44	百家西C	小千谷市	○	○		
45	金塚	小千谷市	○	○		
46	天沢原A	小千谷市		○		
47	城之腰	小千谷市		○		
48	西ツ子山	小千谷市		○		
49	川井愛朱塚	小千谷市		○		
50	川井本塚	小千谷市	○			
51	松ヶ城	廣神村		○		
52	西宮	川口町	○	□	土坑	
53	木下屋敷	川口町		□		
54	清水上	柏之内町		○		
55	権現平	柏之内町		○	礎跡3か所	

No.	遺跡名	所在地	土器	石器	遺構・その他
56	布場平D	柏之内町		○	
57	長苔林	小出町		○	
58	大原	柏崎市		○	
59	四郎臺	川西町		○	
60	伊達八幡館	上日町市		○	
61	金屋	六日町		○	
62	原	板代町		○	
63	土城	中里村	○	○	
64	小丸山	中里村	○	○	
65	おざか酒本	中里村	○	○	
66	狐森	中里村		○	
67	干浦	中里村	○	○	
68	桂	中里村		○	
69	麻水無	中里村		○	
70	向田	中里村		○	
71	壬	中里村	○	○	ブロック複数
72	田沢	中里村	○	○	
73	中林	中里村		○	
74	一三塚 (B)	中里村	○	○	
75	鳥	津南町		○	
76	鹿渡り	津南町		○	
77	丁別当	津南町	○	○	
78	茶園敷	津南町		○	
79	墨敷田 I・II	津南町	○	○	
80	黒牧田山	津南町	○	○	
81	駒返り	津南町	○	○	
82	谷内田	津南町	○		
83	尻ノ口	津南町		○	
84	卯ノ木南	津南町	○	○	フタスコ状土坑
85	卯ノ木	津南町	○	○	
86	本ノ木	津南町	○	○	
87	柳ノ木平	津南町		○	
88	首畠	津南町		○	
89	格沢	津南町		○	
90	小牧平	津南町		○	
91	東野	津南町	○	○	
92	正面C	津南町	○	○	
93	道下	津南町		○	
94	堤ノ脇	津南町		○	
95	墨塙川東	津南町	○	○	
96	つぐね	津南町		○	
97	官ノ筋	津南町		○	
98	正面中島	津南町		○	
99	小坂平	津南町		○	
100	蓮瓦手	津南町		○	
101	下平原I	津南町		○	
102	柴ノ木平	塙沢町		○	
103	五丁衆	塙沢町		○	
104	石原I	湯沢町		○	
105	大刈野	湯沢町	○	○	ブロック14・土坑
106	鶴塙	妙高高原町	○		
107	大堀	妙高高原町	○		
108	八升十平	頸長町		○	
109	長者ヶ平	小木町		○	

◇遺跡番号は原則として北から南に配列したが、市町村で統一している。

◇遺跡は109か所あるが中には写真のみ、また表面採集により確認されたものも含む。



1. 屋敷田Ⅲ遺跡 2. 屋敷田Ⅱ遺跡 3. 屋敷田Ⅰ遺跡 4. おざか清水遺跡 5. 小丸山遺跡 6. 狐森遺跡
7. 干溝遺跡 8. 工遺跡 9. 田沢遺跡 10. 中林遺跡 11. 一里塚遺跡 12. 本ノ木遺跡 13. 卵ノ木遺跡
14. 卵ノ木南遺跡

第41図 周辺の遺跡と段丘分布図

「新燃火山灰アーカイブ3901」を加筆修正

4 石器(第42図)

第IV章2では、8か所の遺物集中区ごとに出土石器の諸特徴や一般的傾向を明らかにした。ここでは、伴出土器から時代時期を判断できる石器について他遺跡の石器と比較検討を行うとともに、石器製作等と関連する石器をとりあげ、当遺跡の性格を考察してみたい。

まず、無文土器や隆起線文土器と共に集中区6の石器について、特徴的な点を少し述べてみる。

有舌尖頭器(30)は雁層から無文土器と共に出土している。尖頭部分は欠損しているが、舌部の形態からみた場合、「基部から直線状の縁切をもつ逆二角形の舌部が付くもので、基部は両者の接合部である基部端のみに観察される」(増田1983)という分類に含まれる。このような形態の有舌尖頭器は津南町本ノ木遺跡(芹沢ほか1957)や中里村中林遺跡(芹沢ほか1966)、田沢遺跡(芹沢ほか1968)、上川村小瀬が沢洞窟(中村ほか

1960)等でもみられるが、特に、舌部の形態は中林遺跡出土のものに類似している。

半月形尖頭器(31)はⅦ層から出土し、隆起線文十器と共に伴する。基部が欠損しているため、全体の形状は明確ではないが、「両面加工で、平面の形態が両尖頭を中心に左右非対称となり半月状を呈する」尖頭器(小野田1978)に含まれると考えられる。直線的な側縁と人さく湾曲する側縁とが両端部で交叉する点や横断面がきわめて薄い点、押圧剝離が側縁部から器体中央部にまで及び、その後に側縁部位の微細な調整加工が施されるという点など、形態上あるいは、製作技術上で類似している半月形尖頭器としては、上川村小瀬が沢洞窟(中村ほか1960)、中里村田沢遺跡(岸沢ほか1968)、壬遺跡(小林編1983)、向田遺跡(國學院大学考古学研究室1983)、山形県高畠町日向洞窟(高畠町教委1971)などの例がある。二次加工が基部側から施され、先端部へ進んでいる点で、中里村の向田遺跡出土のものと特に共通している。

石匙(33)は隆起線文土器と共に伴し、VI層から出土している。縄文時代草創期の縦長石匙は上川村小瀬が沢洞窟(中村ほか1960)、中里村壬遺跡(小林編1983)、秋田県岩瀬遺跡(利部ほか1996)等で出土している。壬遺跡や岩瀬遺跡の石匙は片面加工で周縁にのみ調整が認められ、素材の背面を大きく残している。小瀬が沢洞窟のIV層出土の右匙は両面加工で、ほぼ全面に素材の深部まで丁寧な調整が施されている。抉り部も比較的浅く、当遺跡出土の石匙と類似している点が多い。

打製石斧(86)は集中区6から西方向に約2m離れたVI層からの出土である。折断面部分では、基部に向ってフィッシャー、リングが観察でき、正面から裏面に向って破損したと考えられる。縄文時代草創期の石斧におけるこのような欠損は、富山県内で発見されている神子柴型石斧で多くみられ(麻櫻1988)、本県上ノ平遺跡A地点(沢田ほか1994)出土の石斧の破損状況にも似ている。特に、富山県八木山大野遺跡(大沢町教委1984)の石斧は側面から見て、斜め方向に破損している点で当遺跡の石斧の破損と類似している。

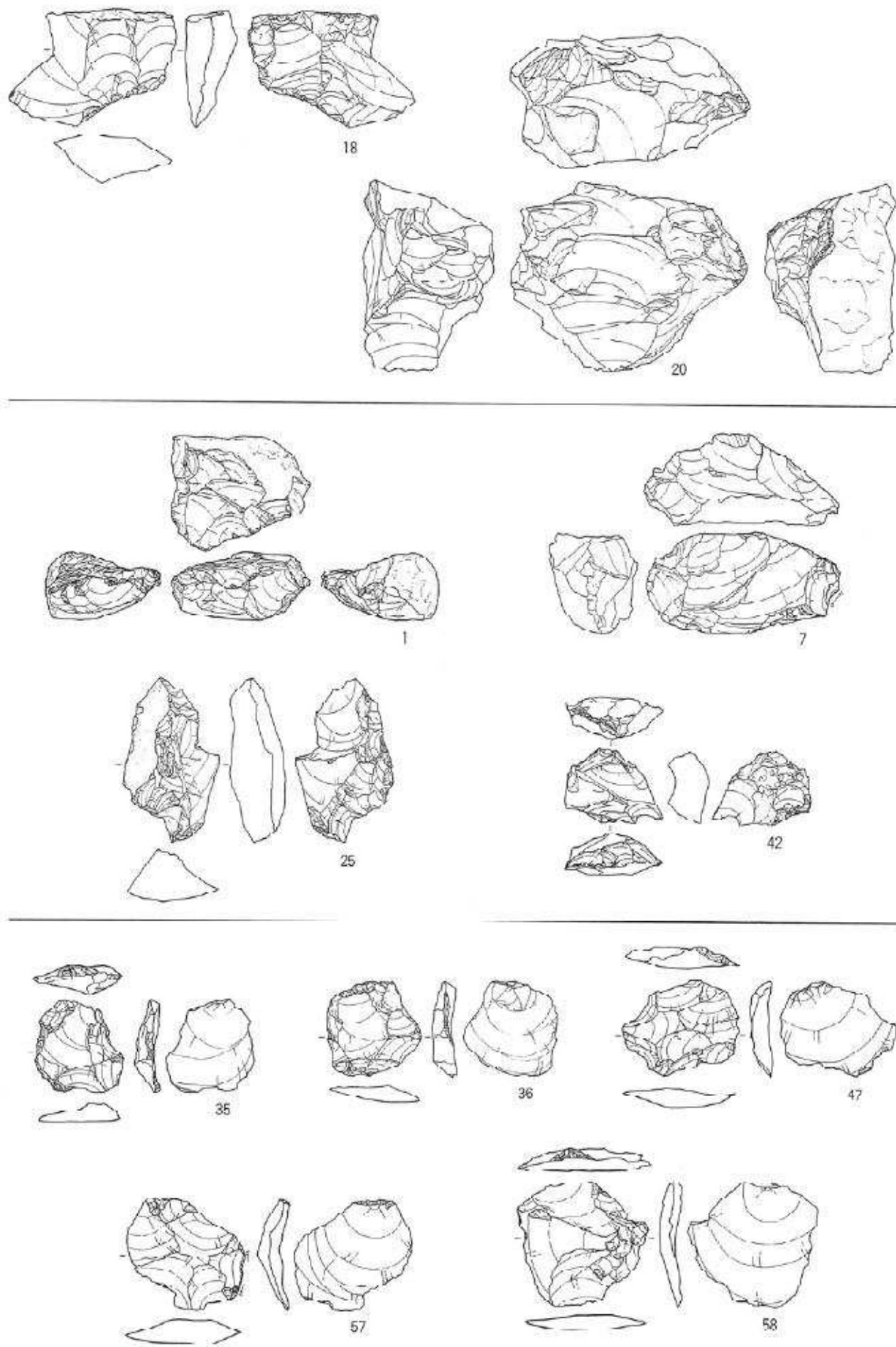
次に、集中区3、集中区4から出土している石器についてみてみると、円環の両極を打撃するという石器製作の特徴が数点の石器から観察される。剥片を得るための作業であると考えられるが、18・20においては両極打撃ののち、両極石器として利用された可能性が高い。特に、20においては正面の両側縁で打撃によるツブレがはっきりと観察される。1・7・25・42においては、両極打撃ののち、剥離作業が継続して行われた石核である。この石核は全体的に不規則な打面転位を繰り返しながら剥離作業が進められているが、9のように打面調整を行いながら、剥離作業を進める石核もみられる。

また、剥離作業の過程で何回かの剥離調整を繰り返した痕の残る剥片が集中区6を中心に多くみられる。正面の両側縁が求心状の剥離痕に覆われている35・47・57・58がその例である。35・36においては微細な剥離痕を伴っていることから、スケレイバー的な使い方をした可能性も考えられる。

集中区3及び集中区6においては、前述したが、同一母岩の石器が多く出土している。接合関係こそはほとんどみられなかったが、出土した石器の大半は数種類の母岩のそれぞれに含まれる。石器の多くは剥片と碎片で占められていたことなども考え合わせると、剥片生産を主体とした石器製作との関連が考えられる。

また、遺物の出土が集中区3では河道2の左岸から、集中区6では河道1の右岸から、それぞれ河道の落込み部分に集中していることから、廃棄あるいは流込みの方向が推定できる。

母岩の共有関係については、集中区3については集中区4と、集中区6では集中区1とで、数点認められた。位置的にも互いに隣接することから、それぞれ(集中区3と集中区4、集中区1と集中区6)同時期に形成された集中区であると考えられる。



第42図 石核、両極石器、剥片類

(縮尺は図版と同一)

要 約

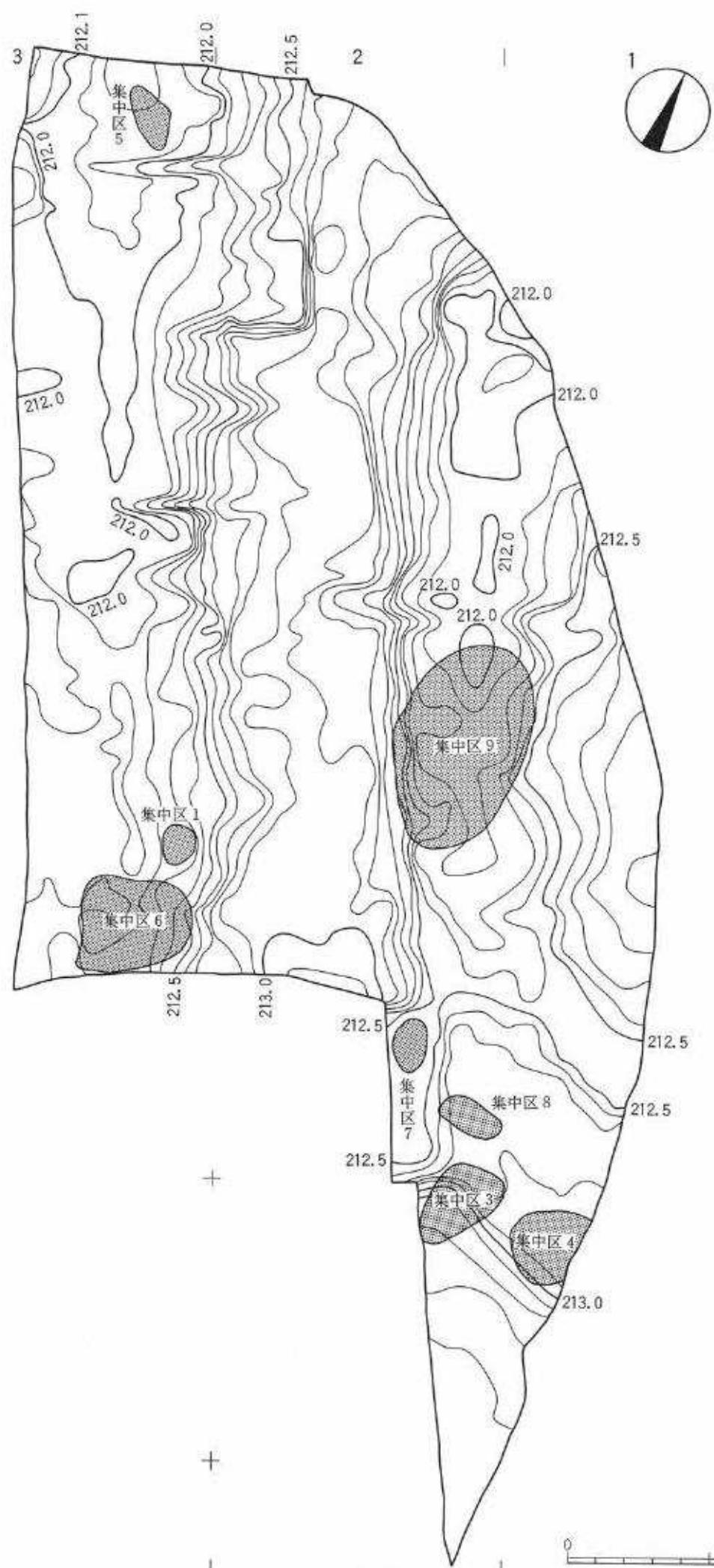
- 1 屋敷田Ⅲ遺跡は新潟県中魚沼郡津南町大字下船戸乙字屋敷田1609番地ほかに所在する。遺跡は清津川左岸の河岸段丘上に位置し、標高は約213mである。
 - 2 発掘調査は一般国道117号線第一次改築工事に伴い、平成5年度及び6年度に実施した。調査面積は1,000m²である。
 - 3 調査の結果、2筋の河道跡とその堆積土から遺物集中区8か所が検出された。時代時期の推定できるものとしては、縄文時代草創期の集中区1か所、縄文時代早期の集中区1か所、弥生時代の集中区1か所である。
 - 4 土器は縄文時代草創期前半の撫文土器、隆起線文土器が16個体92点が出土している。さらに、縄文時代早期の押型文土器、条痕文土器、縄文中期の土器、弥生時代から古墳時代の土器が少量出土している。
 - 5 石器は総計539点で、その大半は集中区3・6・9からの出土である。特に、集中区6からは、他の縄文時代草創期の遺跡から出土している石器と類似している有舌尖頭器や半月形尖頭器、石匙などに加え、石核や多くの剥片類、碎片等合計で250点余りの石器が出土している。また、接合はしないが、母岩別に分類できる石器が約230点ある。その大半が河道の落込み部分で出土していることから、石器製作に関連した石器の廃棄あるいは流れ込みの可能性が考えられる。集中区3でも同一母岩の石器が出土している。その中には隣接する集中区4との共有関係が認められる石器もある。さらに、集中区3・4においては、凹凧の両極を打撃するという石器製作の特徴のみられる石器が数点出土した。両極打撃のうち、さらに剥離作業を継続する石核と、両極石器として利用されたものに分けらる。集中区6の剥片の中には、剥離作業の過程で何回かの打面調整を繰り返したり、さらにその打面調整剥片をスクレイバー的に使用したなどの特徴がみられる。
 - 6 平成7年度の第一次調査で疊層の直上から集中して出土した破碎礫の中には石器との明確な違いが認められないものもあったが、その後の調査や分析等により、両者の相違の根拠を得ることができた。旧石器から縄文時代草創期の石器と、いわゆる偽石器とを比較検討する資料の一つになると考える。
- 自然科学分析及び当遺跡周辺の地質に詳しい研究者による現地調査などの結果、屋敷田Ⅲ遺跡の立地する段丘が大割野(I・II)面、屋敷田Ⅱ遺跡の段丘が正面面、屋敷田Ⅰ遺跡が貝坂面であることが明らかになった。また、それらの段丘の形成時期や地形変遷も推測できた。清津川及び信濃川の段丘に立地する諸遺跡の今後の調査の貴重な資料になるものと考える。

引用・参考文献

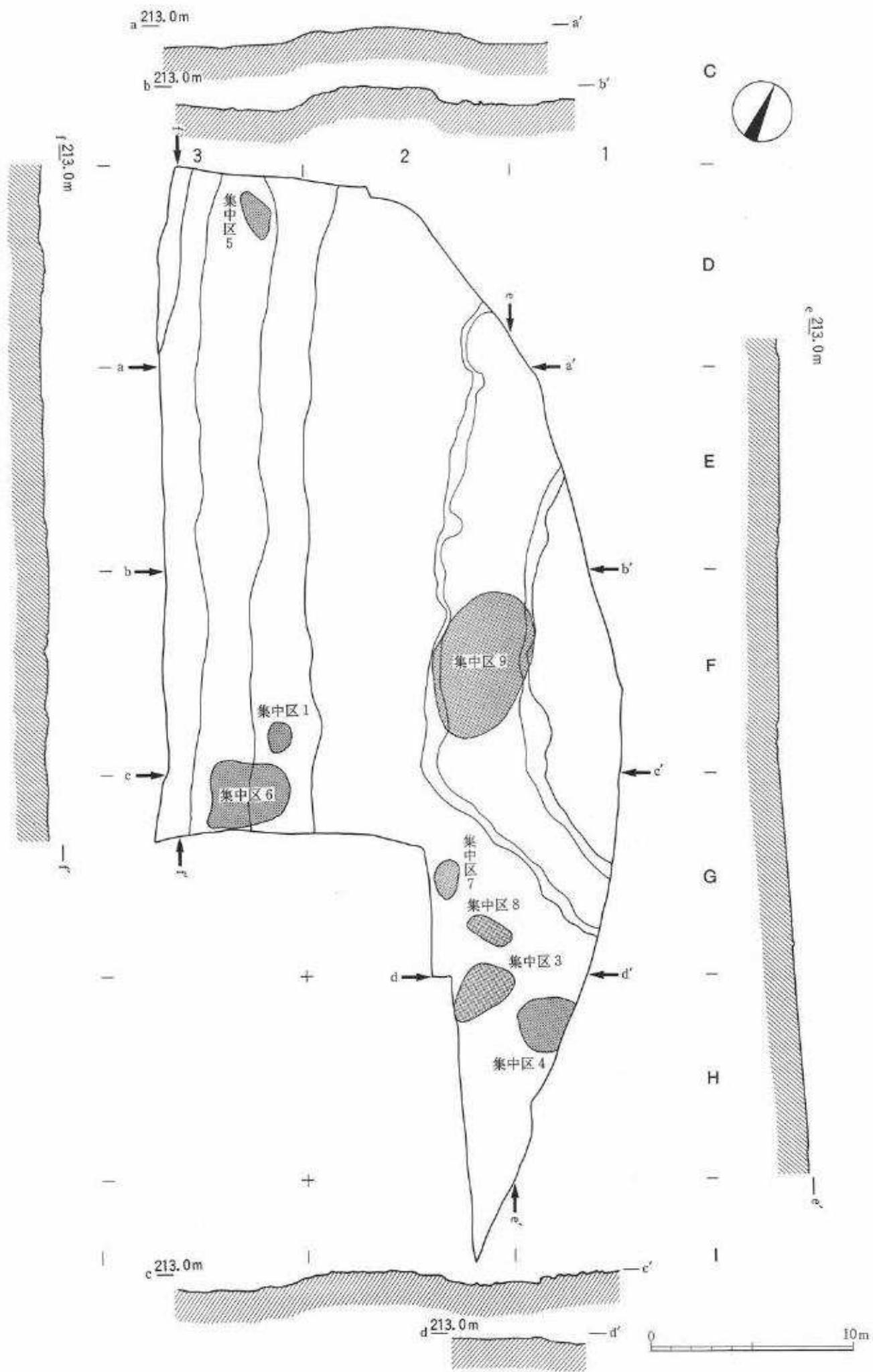
- あ青木 勝・内川隆志ほか 1992 「千歳跡—第6次調査—」 中里村教育委員会
- い右坂圭介・佐藤雅一 1994 「小丸山遺跡・おざか清水遺跡」 中里村文化財調査報告書第7輯 中里村教育委員会
- 石沢寅二 1976 「笠尻遺跡」『苗場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書』津南町教育委員会
- え江口友子ほか 1996 「百塚西C遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第78集 新潟県教育委員会
- 江口友子ほか 1997 「金塚遺跡・三仏生遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 江坂輝弥 1976 「沖ノ原遺跡」津南町文化財調査報告書10 津南町教育委員会
- 江坂輝弥・渡辺 誠 1977 「沖ノ原遺跡発掘調査報告書」津南町文化財調査報告書12 津南町教育委員会
- お小熊博史・立木宏明 1994 「新潟県における旧石器時代・縄文時代草創期研究の現状(3)」『長岡市立科学博物館研究報告』No.29 長岡市立科学博物館
- 小熊博史・前山精明 1993 「新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟人会実行委員会
- 小田山美子 1993 「縄文にいがた」No.12 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田山美子 1994 「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成5年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野田正樹 1998 「半月形の両面石器に関する一考察」『斤陵』3号 甲斐斤陵考古学研究会
- か利部 修ほか 1996 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXII 岩瀬遺跡」秋田県文化財調査報告書第263集 秋田県教育委員会
- 樺原考古学研究所 1991 「一万年前を掘る」吉川弘文堂
- 加藤晋平ほか 1994 「縄文文化の研究3 縄文土器」雄山閣
- 金子拓男 1964 「新潟県泉竜寺遺跡における晩期住居址について」『上代文化』34 國學院大学考古学
- 金子拓男・戸根与八郎ほか 1975 「苗場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡報告書(ト袖遺跡、平川原遺跡)」中里村教育委員会
- 全子拓男 1988 「大刈野遺跡」湯沢町埋蔵文化財報告第9輯 湯沢町教育委員会
- く栗島義明 1986 「渡来石器考一本ノ太論争をめぐる諸問題」『JH石器考古学』32 旧石器文化談話会
- こ小林達雄 1980 「土遺跡」國學院大学文学部考古学研究室
- 小林達雄 1981 「土遺跡1981」國學院大学文学部考古学研究室
- 小林達雄 1982 「土遺跡1982」國學院大学文学部考古学研究室
- 小林達雄 1983 「土遺跡1983」國學院大学文学部考古学研究室
- 小林達雄 1987 「土遺跡1987」國學院大学文学部考古学研究室
- 小林達雄・原秀三郎編 1993 「新成古代の日本7中部」角川書店
- 駒形敏朗・小熊博史 1989 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(6)」『長岡市立科学博物館研究報告』第24号 長岡市立科学博物館
- さ齋藤基生・金子拓男ほか 1974 「新潟県中魚沼郡中里村森上遺跡発掘調査概報」中里村教育委員会
- 坂本 彰ほか 1995 「花見山遺跡」港北区ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書16 財団法人横浜ふるさと歴史財团
- 佐々木洋治 1971 「高畠町史(考古資料編)」高畠町
- 佐藤雅一ほか 1993 「信濃川水系における縄文時代草創期遺跡の様相」『環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 佐藤雅一ほか 1994 「干溝遺跡・県営圃場整備事業粘土原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(その1)」中里村文化財調査報告書第6輯 中里村教育委員会
- 佐藤雅一 1995 「屋敷田Ⅱ遺跡」津南町文化財調査報告書第18輯 津南町教育委員会
- 佐藤雅一 1995 「泥坂遺跡」津南町文化財調査報告書16輯 津南町教育委員会
- 佐藤雅一ほか 1996 「平成8年度 津南町遺跡発掘調査概要報告書」津南町文化財調査報告第19輯 津南町教育委員会
- 佐藤雅一 1997 「神山遺跡群遺跡確認調査概要報告書」津南町文化財調査報告書第21輯 津南町教育委員会
- 沢田 敦ほか 1994 「上ノ平遺跡A地点」新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- し島立 桂 1988 「木ノ木論争とその周辺」『旧石器考古学』37 旧石器文化談話会

- 白石浩之 1990 「木ノ木遺跡の意味するもの—縄文時代草創期研究の視点—」神奈川考古第26号 神奈川考古同人会
- 才籐本道之助 1991 「図録 石器入門事典」柏書房
- せ芹沢長介・中山淳子 1957 「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」「故作研究」12 国書刊行会
- 片沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有古尖頭器の研究」日本文化研究所研究報告2
- 芹沢長介・須藤 隆 1968 「田沢遺跡の発掘調査予報」「考古学ジャーナル」27 ニューリイエンス社
- た高橋 保ほか 1992 「五丁歩遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 新潟県教育委員会
- 高山清司ほか 1986 「埼玉考古 埼玉考古学会30周年記念 シンポジウム資料」埼玉考古学会
- つ津南町史編さん委員会 1984 「津南町史」資料編上巻 津南町
- て寺崎裕助ほか 1996 「清水上遺跡II」新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- な中川成夫ほか 1958 「麦有地方の考古学的調査」「麦有郷」新潟県文化財年報3 新潟県教育委員会
- 中里村史専門委員会 1985 「中里村史」資料編上巻(原始・古代・中世) 中里村史編さん委員会
- 中里村史専門委員会 1988 「中里村史」通史編上巻 中里村史編さん委員会
- 中澤 究 1994 「埋文にいがた」No.8 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中澤 究 1995 「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成6年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中村孝三郎 1959 「新潟県中魚沼郡津南町清津銚文早期下別当遺跡」NHK二ノ一 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1963 「卯ノ木押型文遺跡・貝塚遺跡」長岡市立科学博物館研究調査報告5 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎・小林達雄・金子哲男 1963 「新潟県中魚沼郡中里村泉童寺遺跡調査報告」「上代文化」33 國學院大学考古学会
- 中村孝三郎ほか 1961 「室谷洞窟」長岡科学博物館考古研究室調査報告第6冊 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1960 「小瀬が沢洞窟」長岡科学博物館考古研究室調査報告第3冊 長岡市立科学博物館
- 長野県 1988 「長野県史考古資料編全一巻四」遺構・遺物
- に新潟県 1983 「新潟県史」資料編1 原始・古代・考古編
- ひ広田永二・中澤幸男 1994 「津南町の縄文時代草創期遺跡」「新潟考古」第5号 新潟県考古学会
- ふ藤巻正信 1991 「城之腰遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 新潟県教育委員会
- ま麻柄一志 1988 「神子柴型石斧の機能—破損と石質に関するノート—」「旧石器考古学」37 旧石器文化談話会
- 増出一裕 1981 「有古尖頭器の再検討—本州・四国の出土例を中心にして—」「旧石器考古学」22 旧石器文化談話会
- や山内清男 1960 「縄文土器文化のはじまる頃」「上代文化」30 國學院大学考古学会
- よ横浜市歴史博物館・財団法人横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター 1996 「縄文時代早創期資料集」

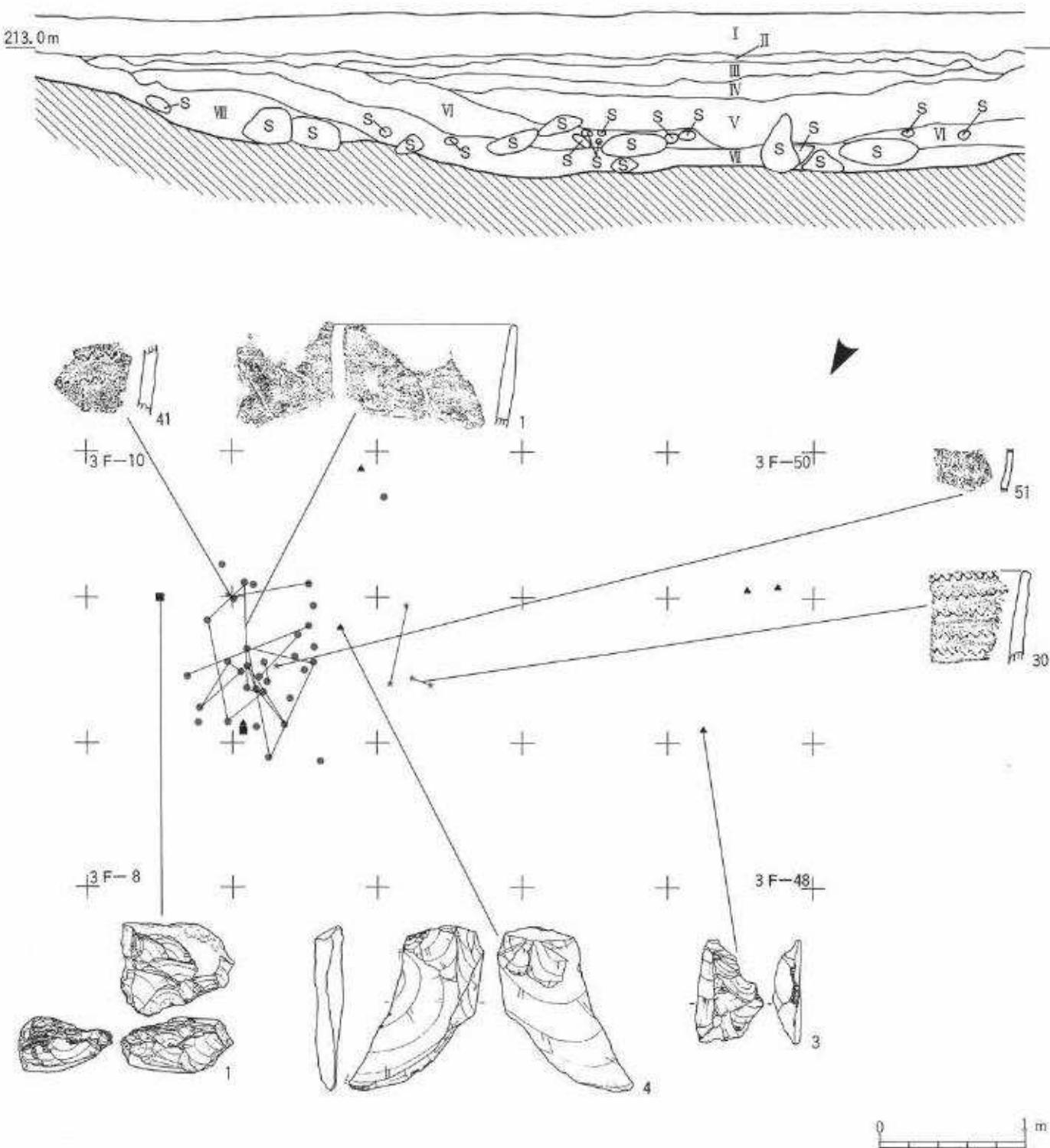
図 版



全体図 1

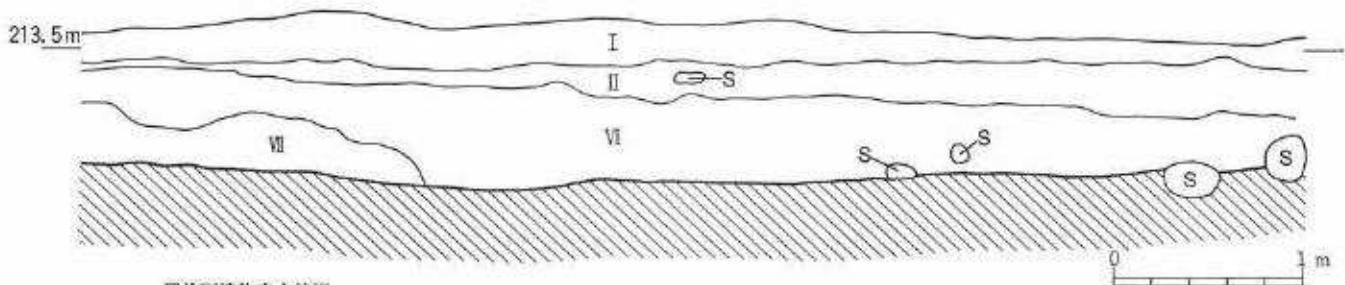
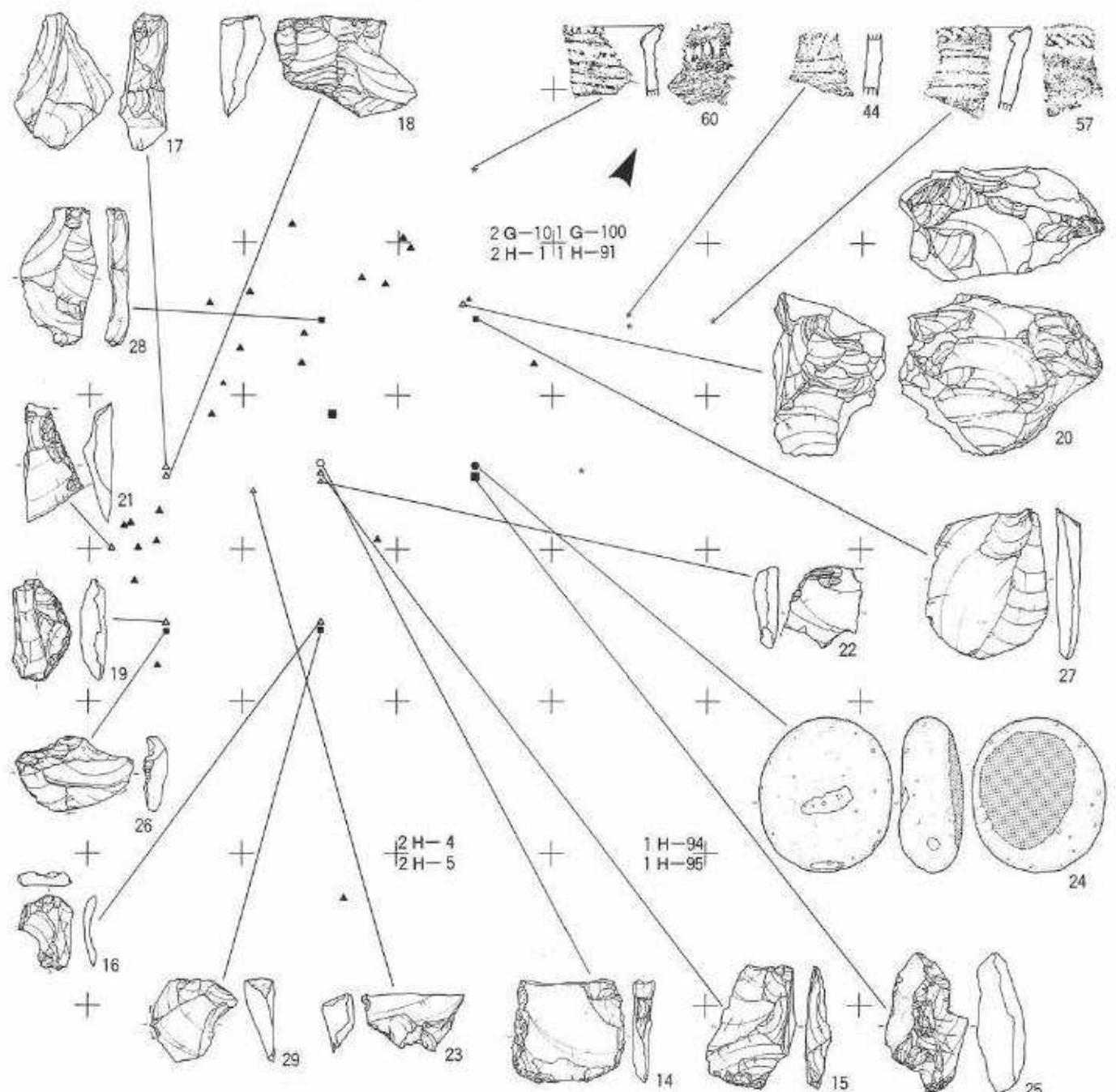


全体図2



集中区1 遺物分布図

- ★ 尖頭器
- ▲ 環 器
- 磨 石
- 無文土器
- * 石 鏈
- 未成品
- 隆起線文土器
- * 石 匙
- 石 核
- 押型文土器
- スクレイパー
- 使用痕のある剥片
- 瓢状石器
- ▲ 刻 片
- △ 楔形石器
- △ 二次加工のある剥片
- 打製石斧
- 破 片
- 使用痕のある砾片

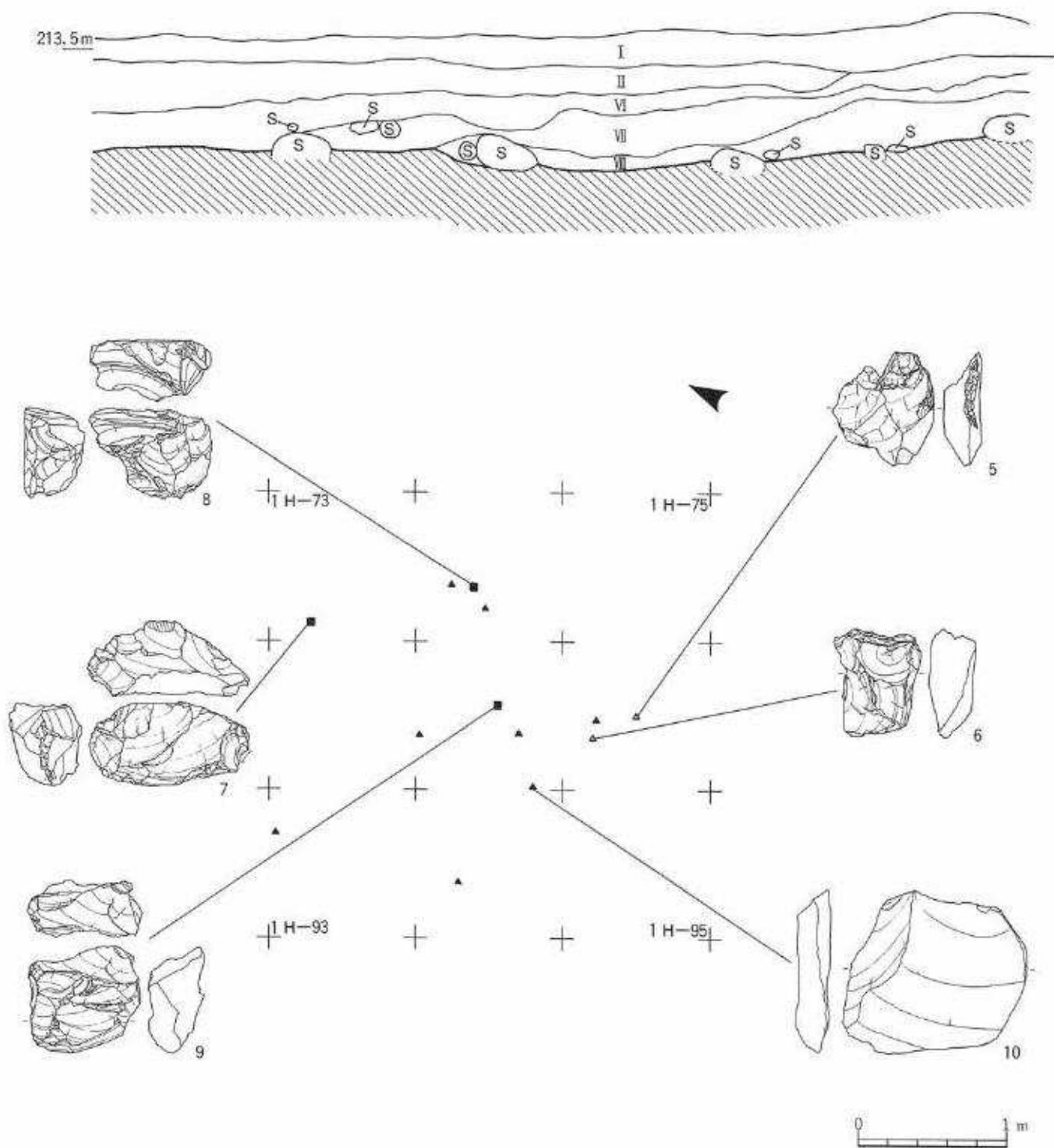


集中区 3 層位別遺物出土状況

層位	土 器	石 器	類別	件数
I		22~25		2
II	44~45·57·59·60	14~19·24·25·27~29		11
III				
IV				
V				
VI		20		5·1
VII		21·23		16·8
堆				3·13

- * 尖頭器
- △ 磨石
- 研磨器
- ◆ 碟器
- ★ 石斧
- 未成品
- 石核
- 隆起線文土器
- スクレイパー
- 石核
- 押型文土器
- 路状石器
- 使用痕のある剥片
- △ 両極石器
- ▲ 剥片
- ▲ 二次加工のある剥片
- 破片
- 打製石斧
- 使用痕のある碟片

集中区 3 遺物分布図

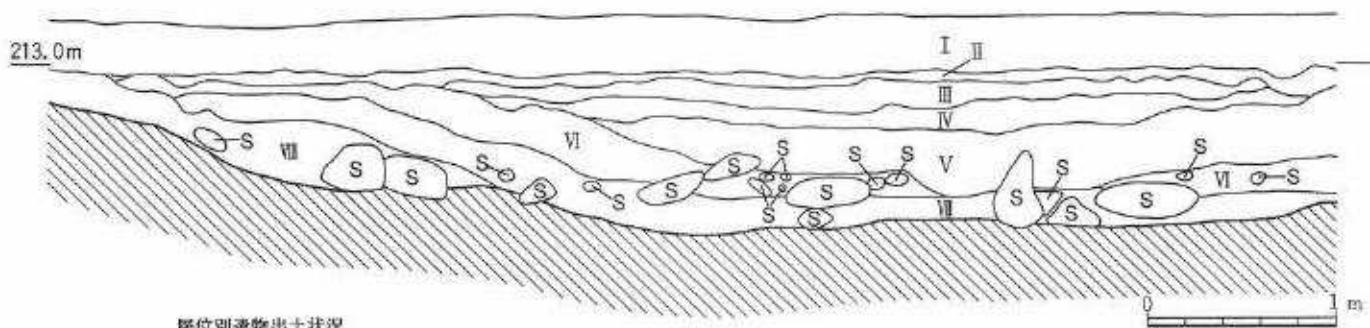
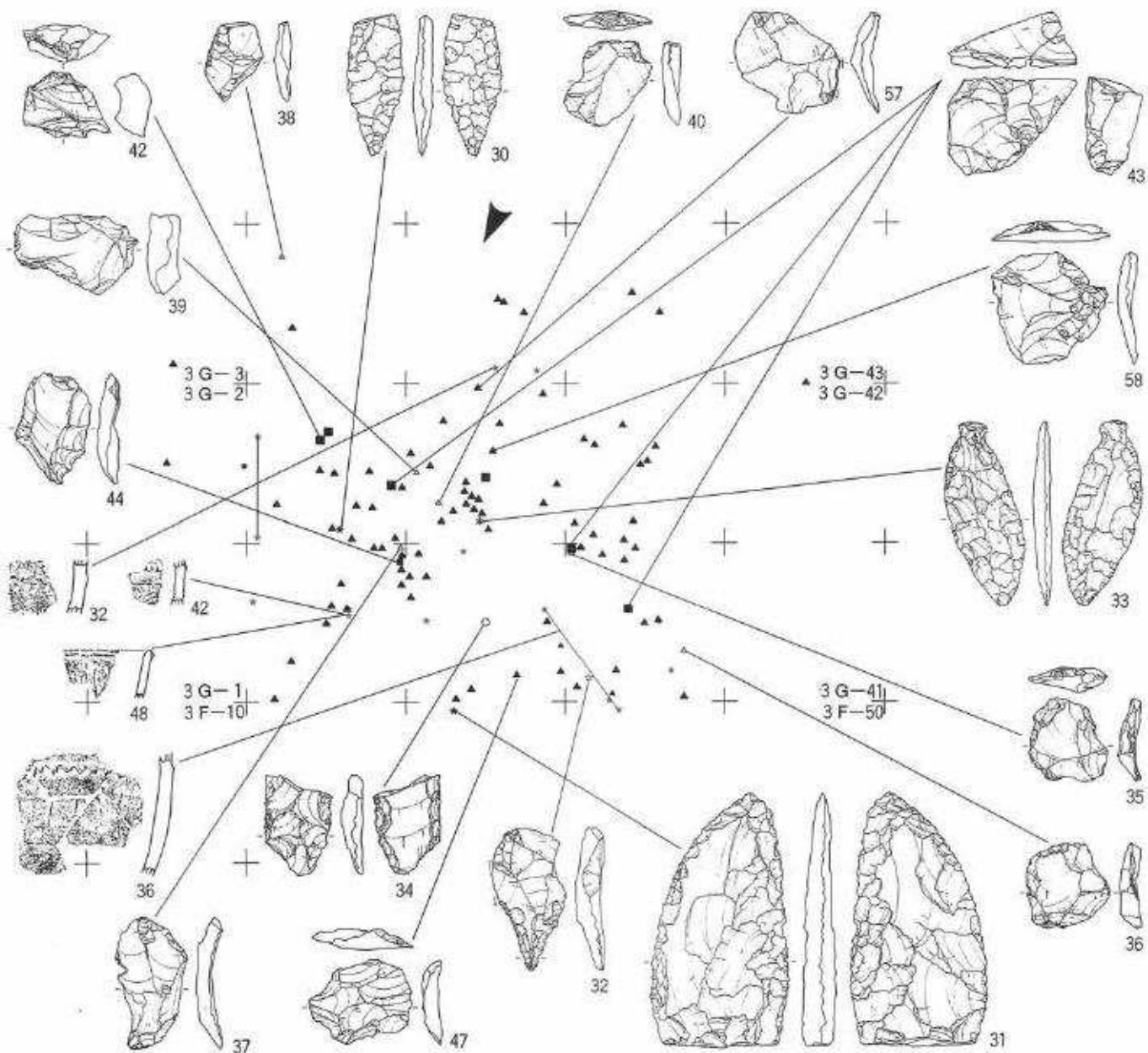


集中区4 層位別遺物出土状況

層位	土 器	石 器	剥片	
			刮削器	劈打器
I				1
II		5-10		3
III				
IV				
V				
VI		6-9		4
VII				1
VIII				

- ★ 尖頭器
- ◆ 磨石
- 未成品
- 石核
- ▲ 使用痕のある剥片
- ▲ 剥片
- △ 二次加工のある剥片
- 打製石斧
- ▲ 碎石
- ◆ 使用痕のある砾片
- ▲ 積文土器
- 隆起線文土器
- 押型文土器

集中区4 遺物分布図



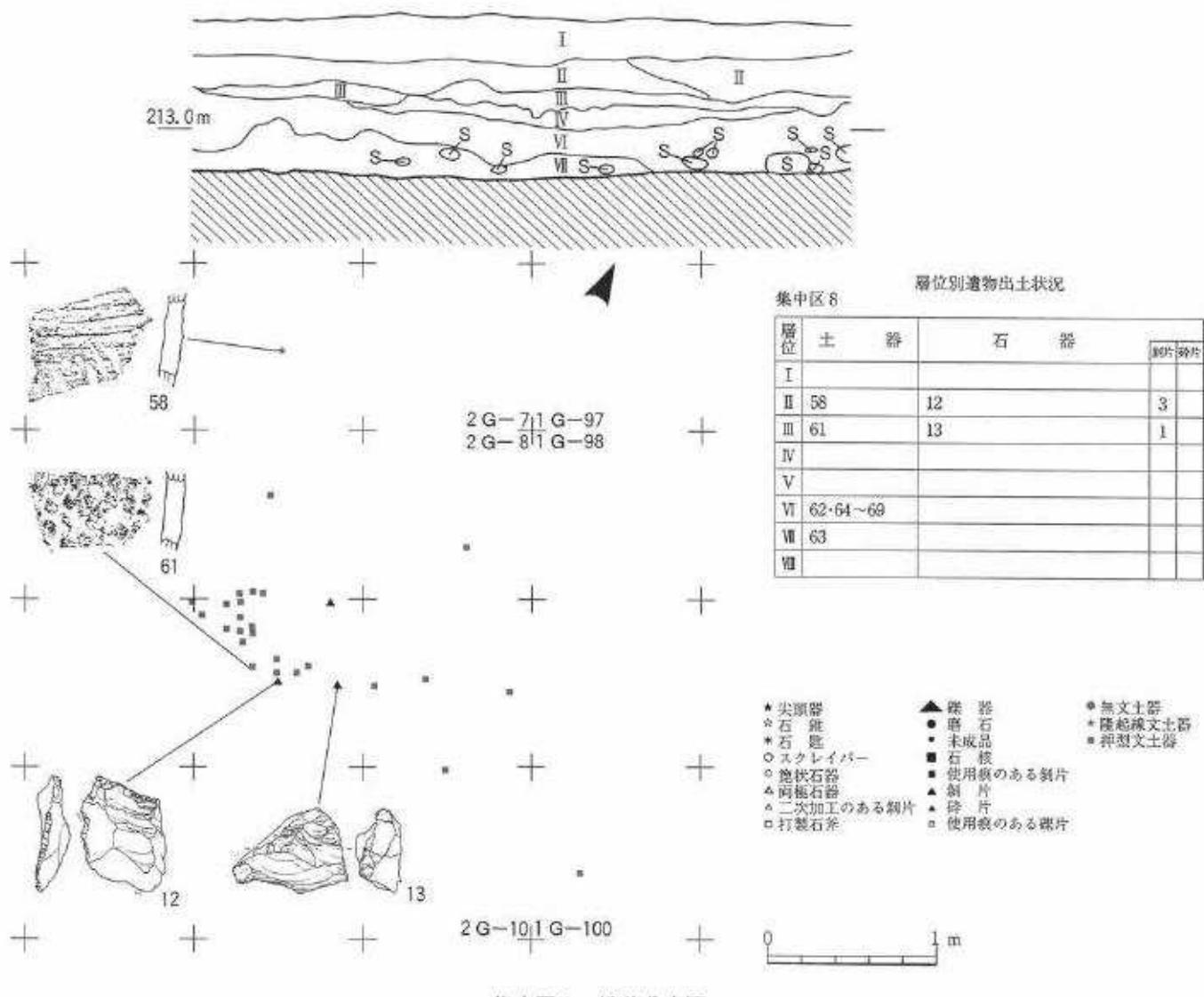
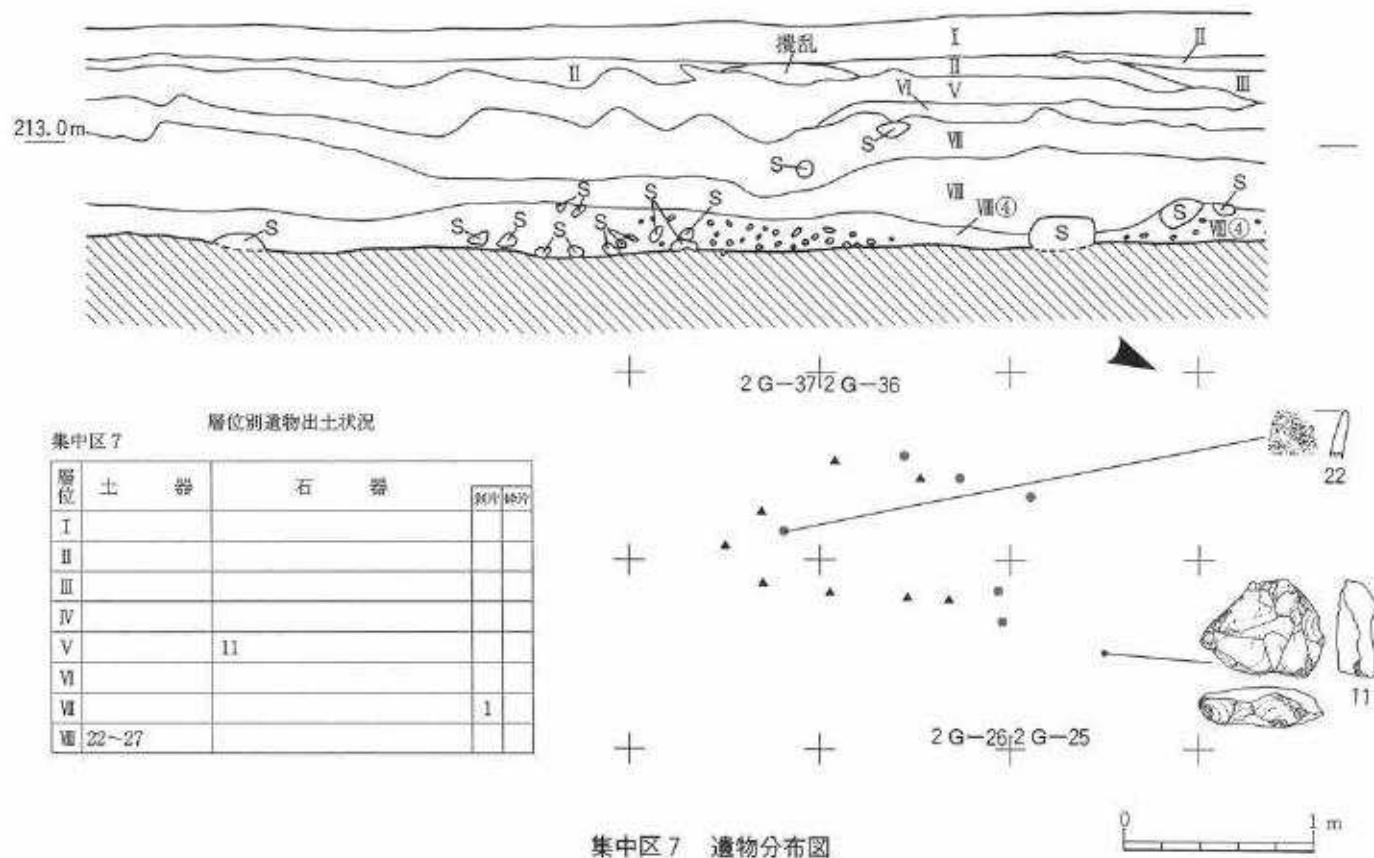
集中区 6

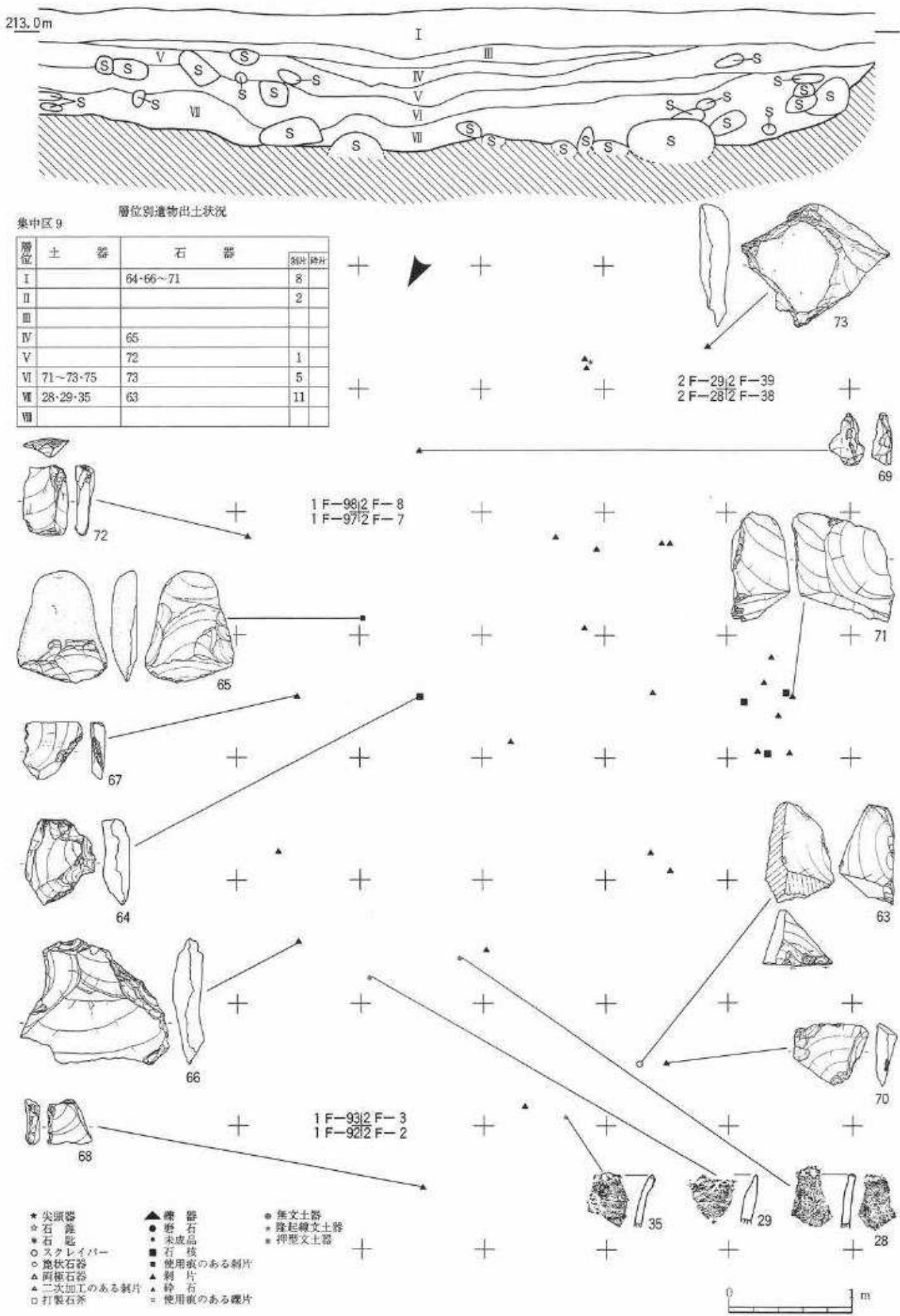
層位別遺物出土状況

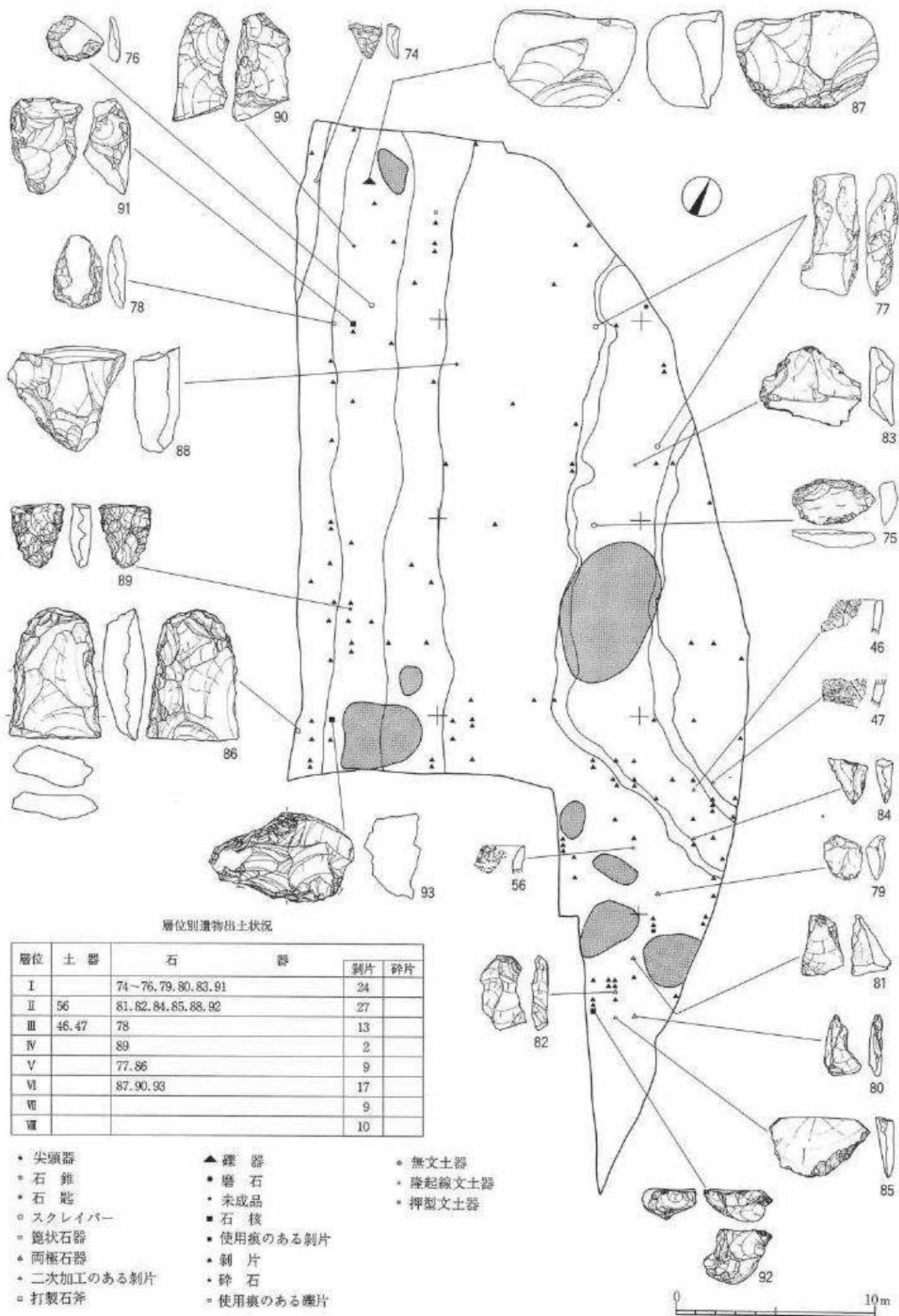
層位	土 器	石 器	剖片
			片
I			1
II	34-45-46		4
III			6 1
IV	35-47-48		9
V	34 36-49~54		36 7
VI 42-43-48	32-33-36-37-39-40 32-33-55~59		65 36
VI	38-49-50-52~55 31-37~40-43-44-60-61		26 5
VII	30-41-42-62		

- ◆ 積 器
- 磨 石
- ★ 未 成 品
- 石 核
- 使用痕のある剖片
- ▲ 刮 片
- ▲ 二次加工のある剖片
- 碎 石
- 使用痕のある積片
- 無文土器
- ★ 隆起線文土器
- 押型文土器

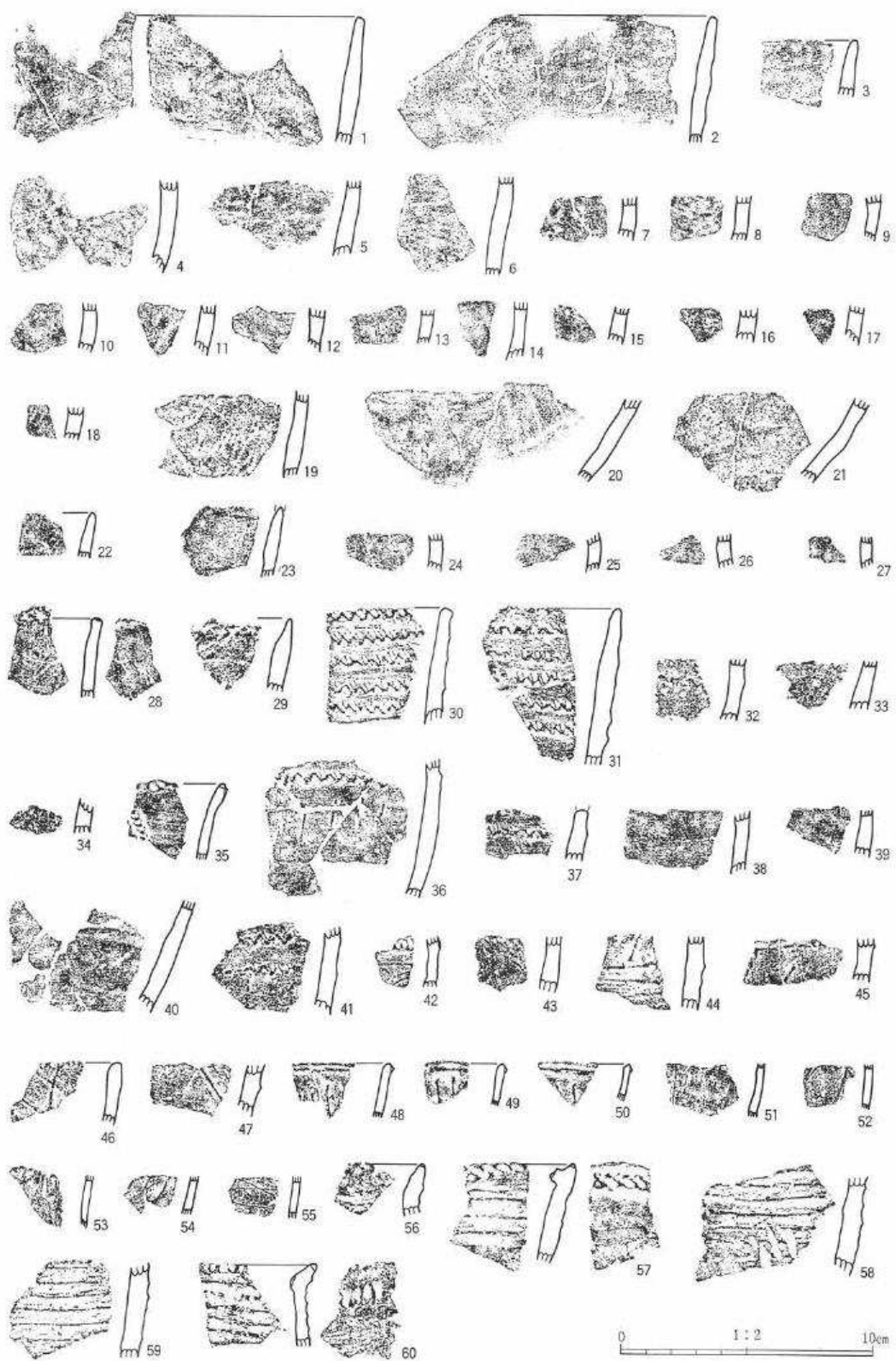
集中区 6 遺物分布図



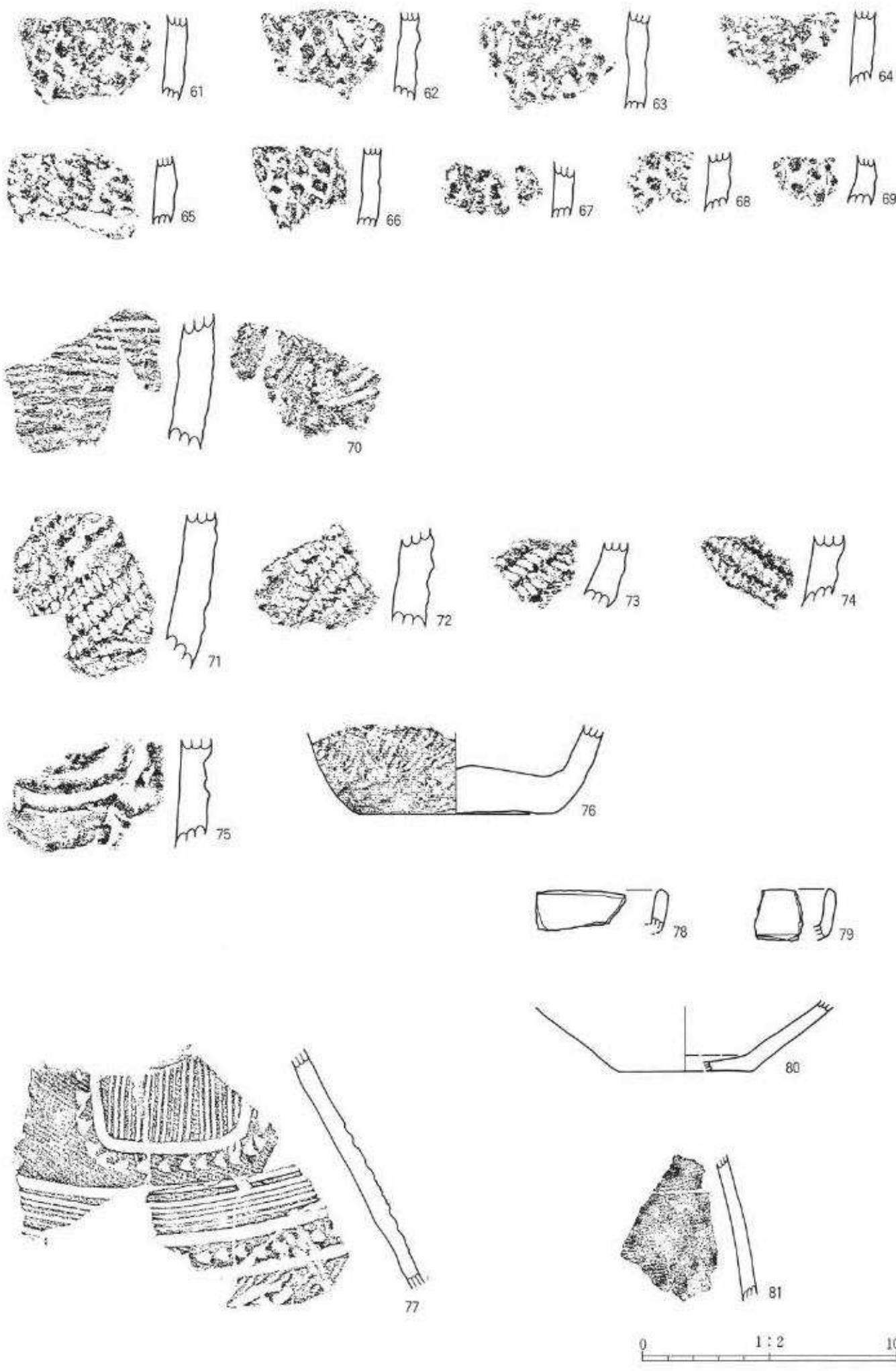




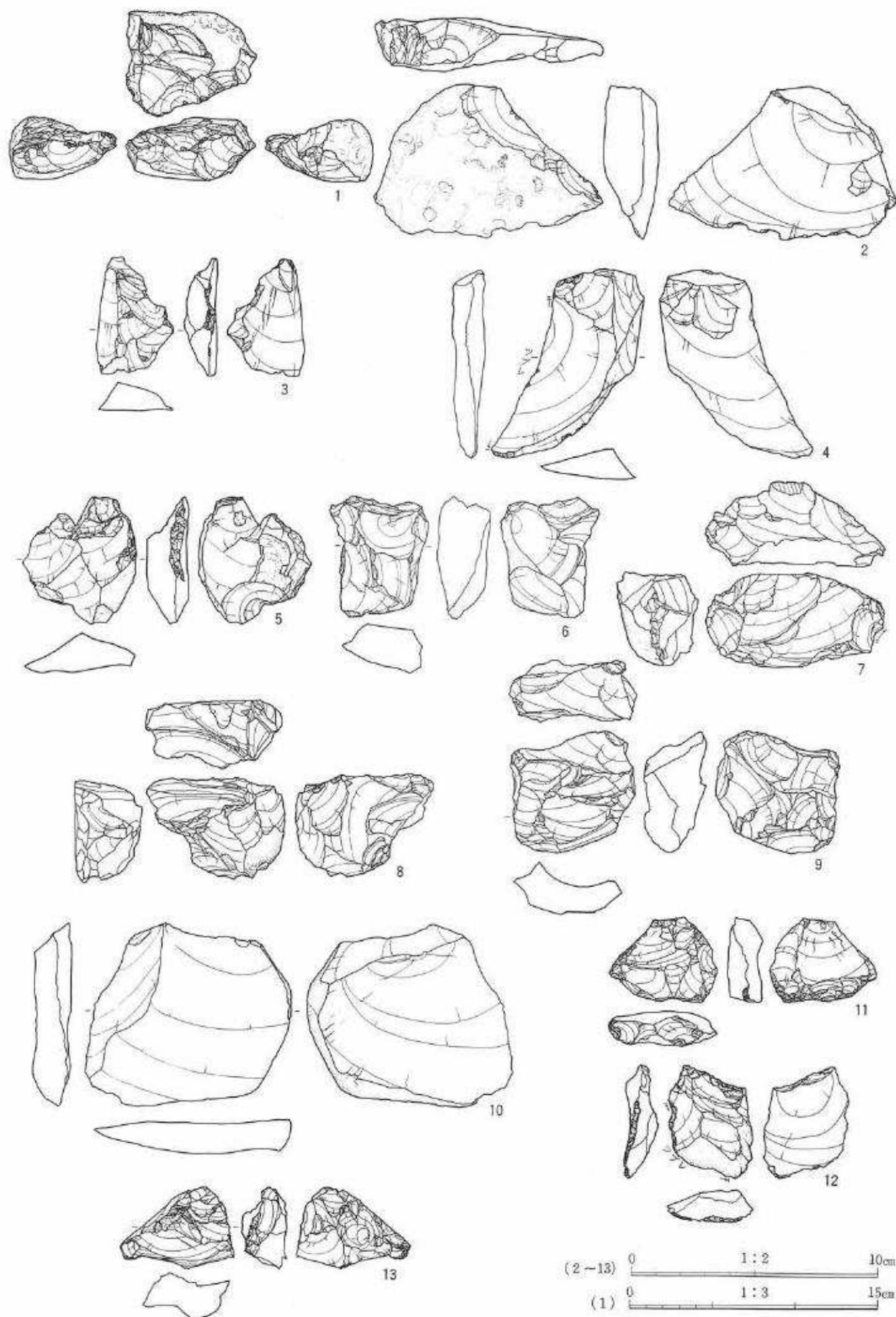
集中区外の遺物分布図



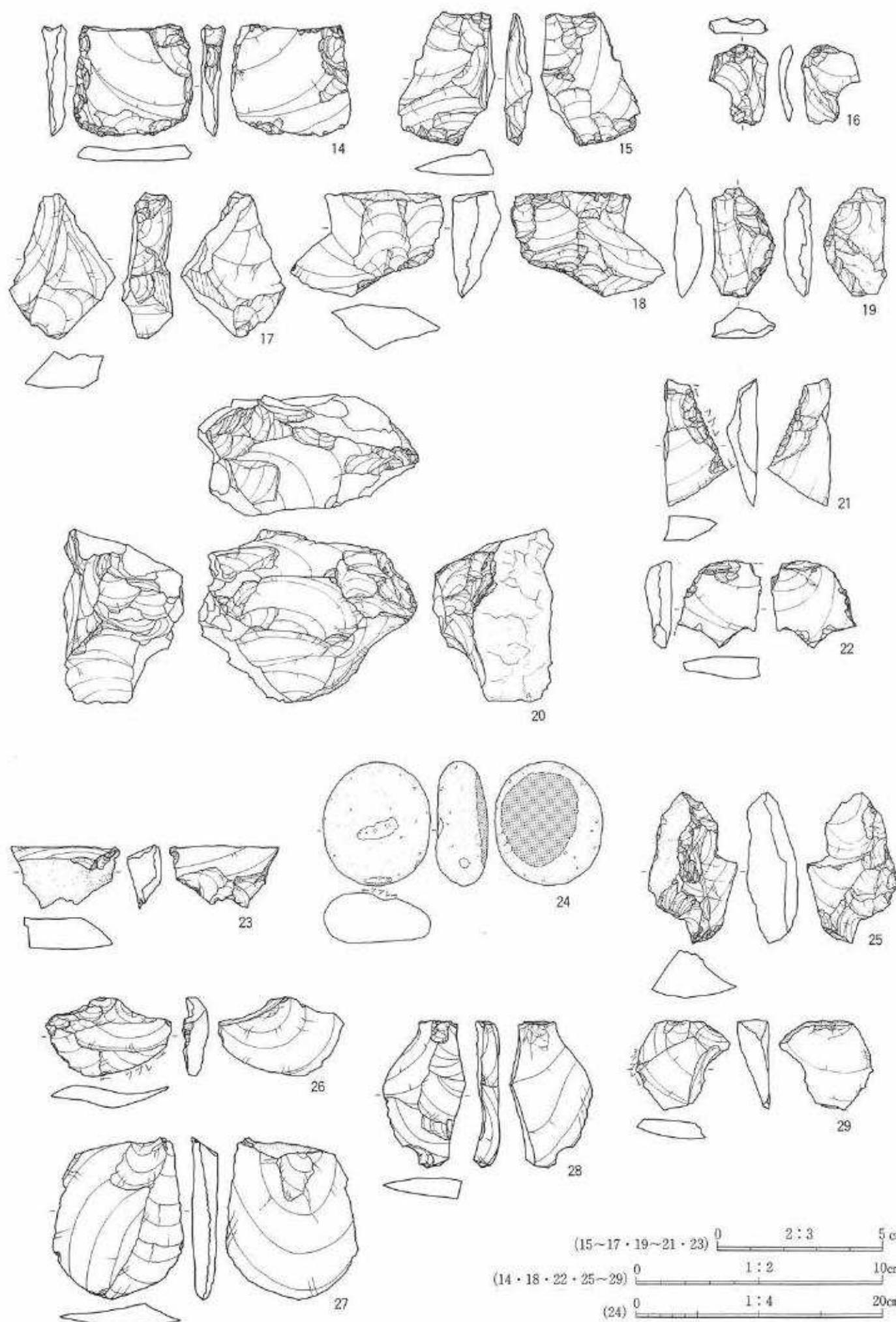
土器実測図1



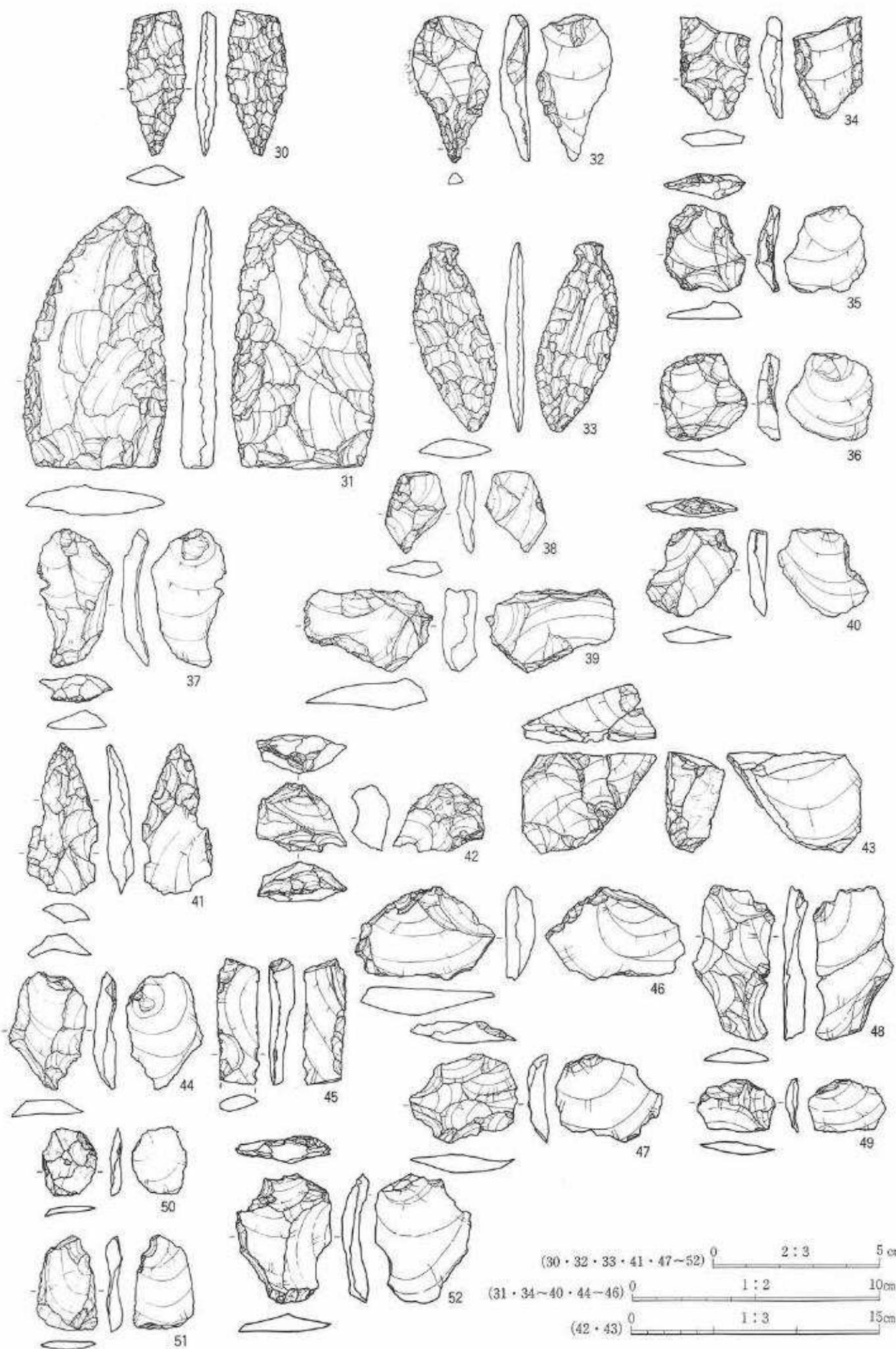
土器実測図 2



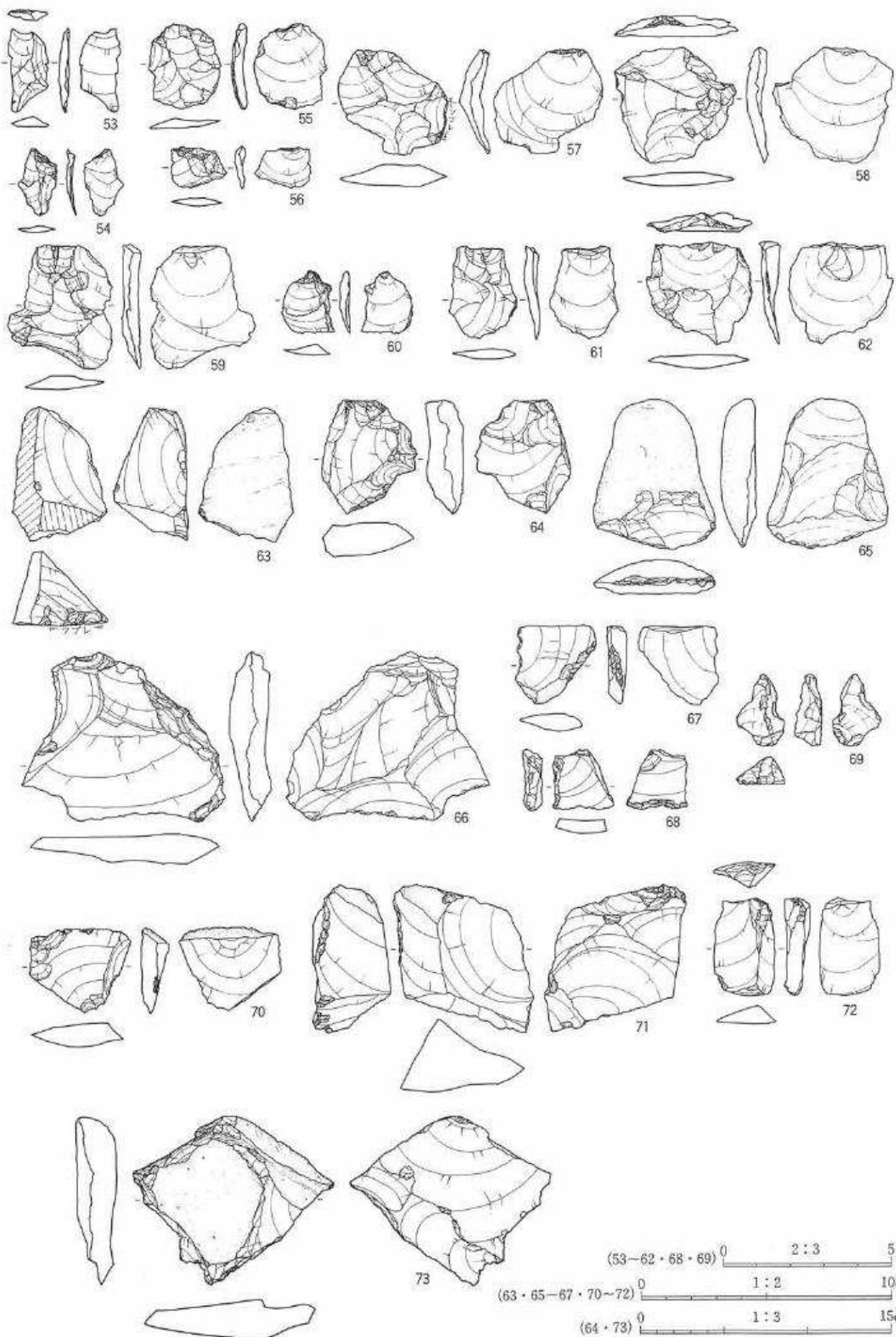
集中区1・4・7・8 石器実測図



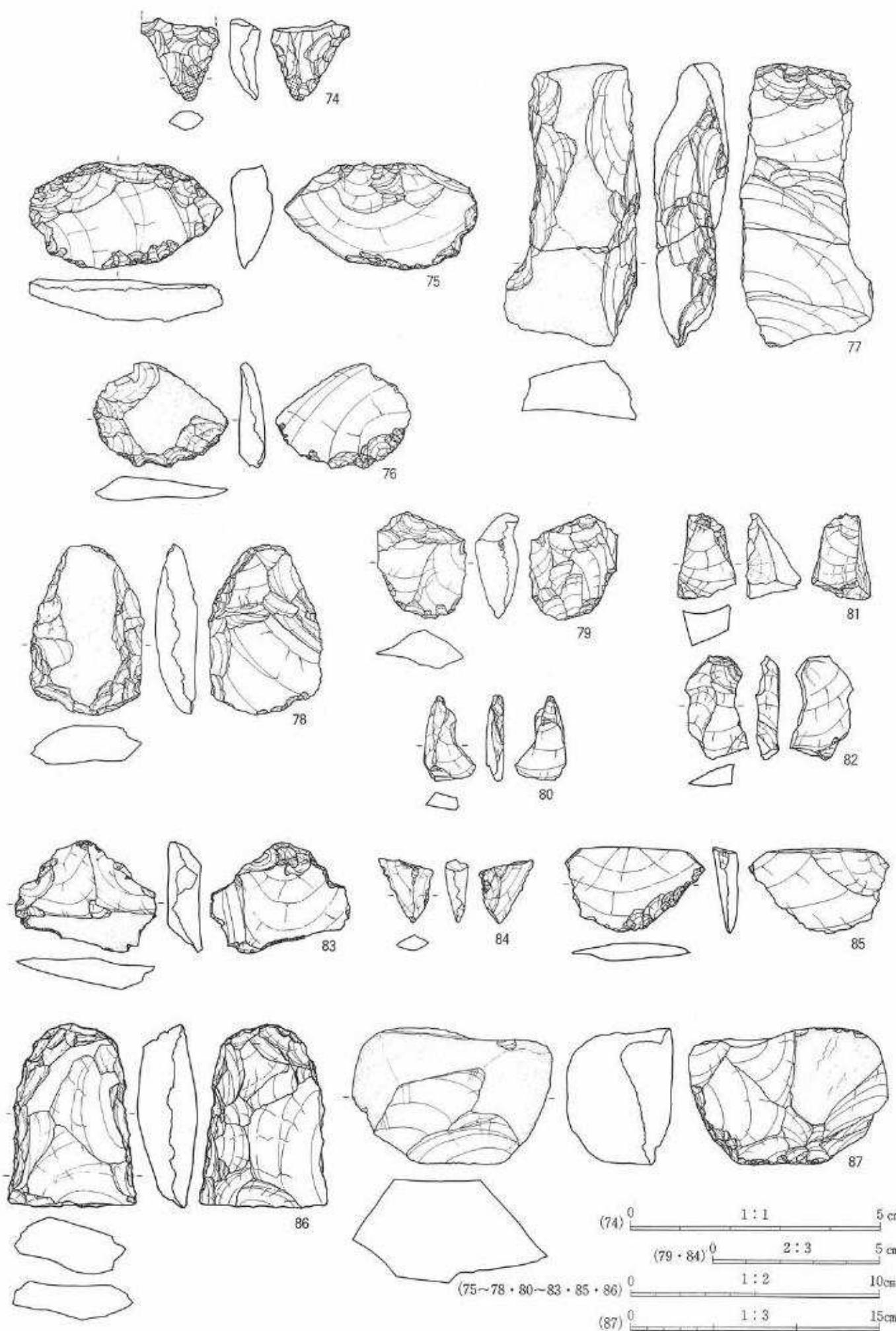
集中区3 石器実測図



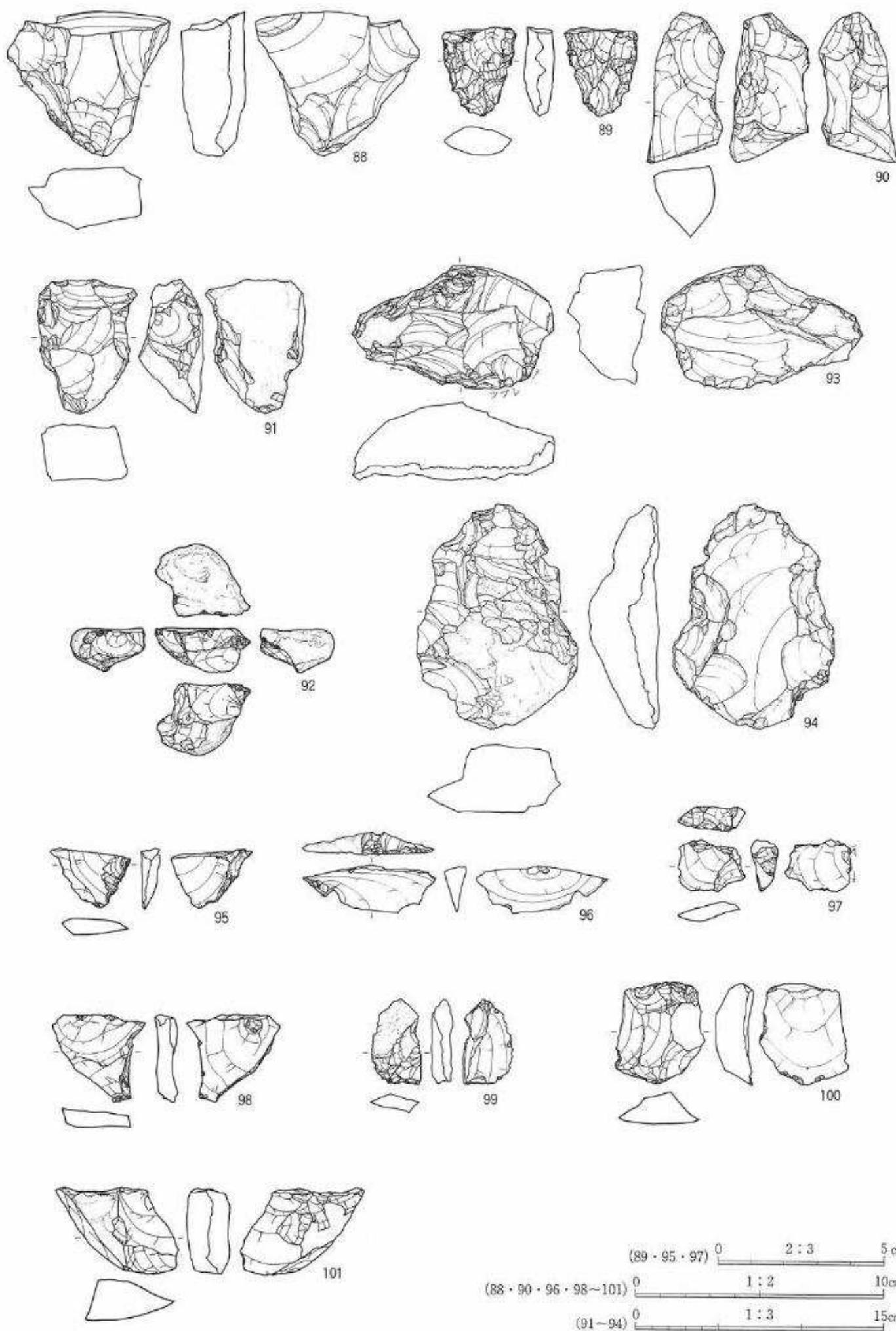
集中区6 石器実測図



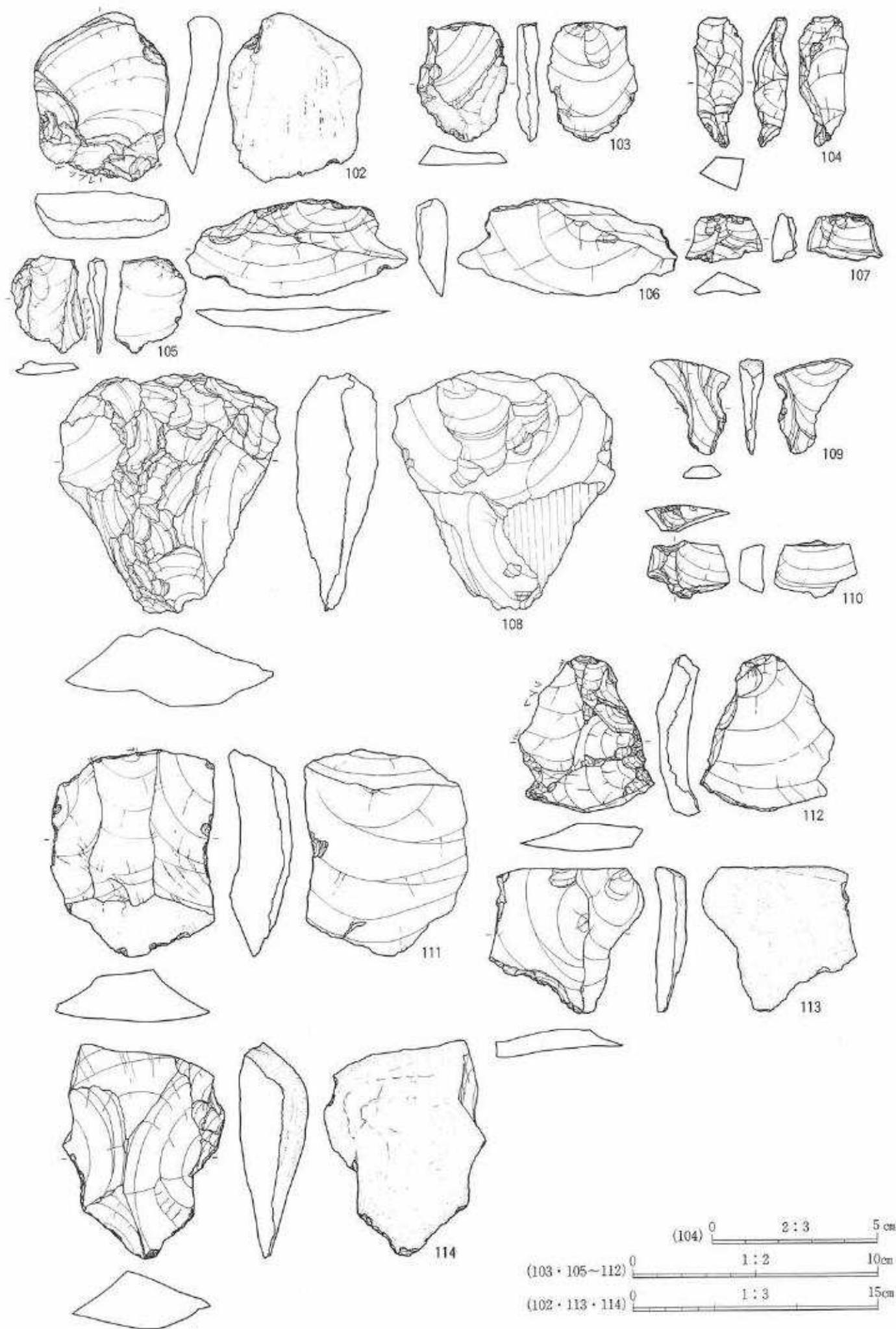
集中区6・9 石器実測図



集中区外石器実測図1



集中区外石器実測図 2

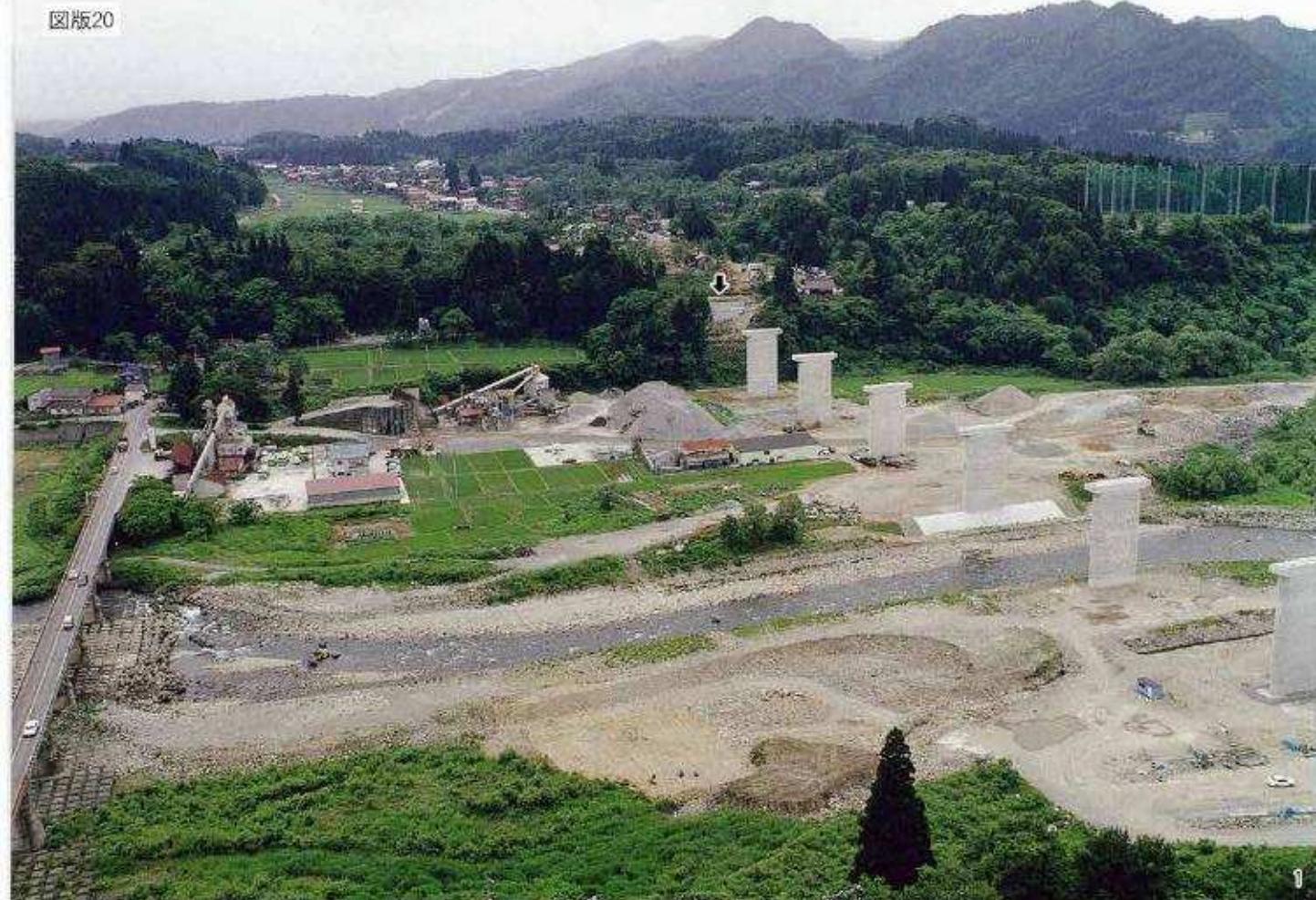


集中区外石器実測図 3



遺跡周辺の航空写真

日本地図センター発行
1947年11月1日米軍撮影



1



2

遺跡遠景(1. 北東から 2. 東から)



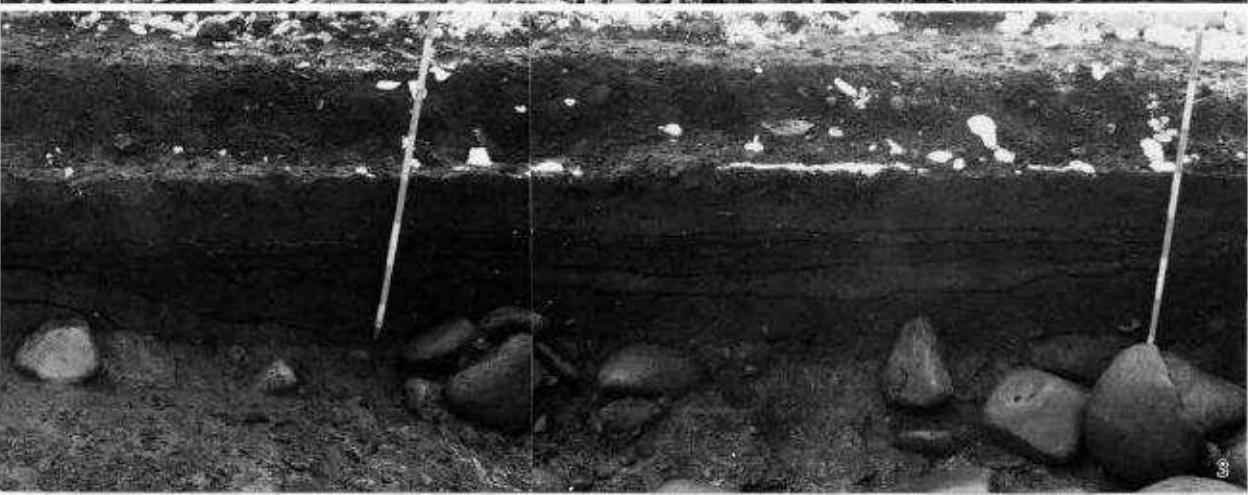
平成6年度調査区完掘(1. 南西から 2. 北西から)



1. 調査前現況



2. 平成5年度調査状況



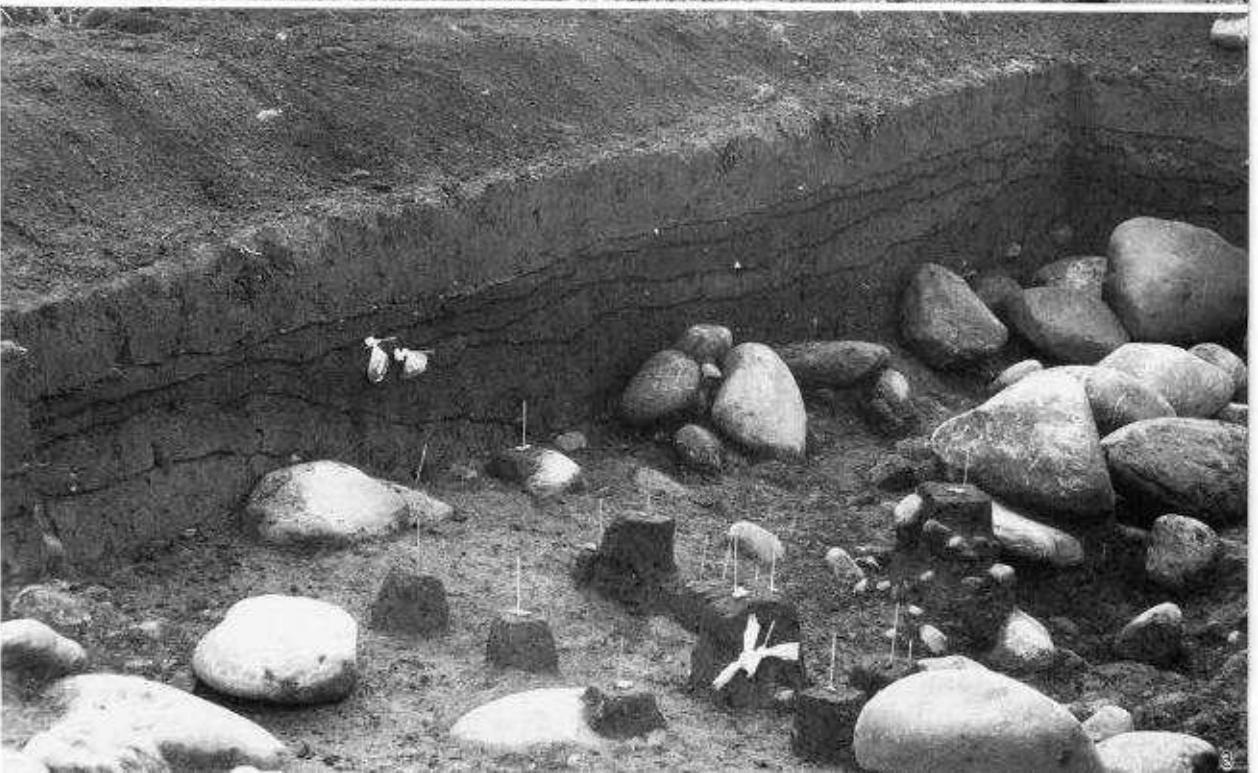
3. 河道2断面



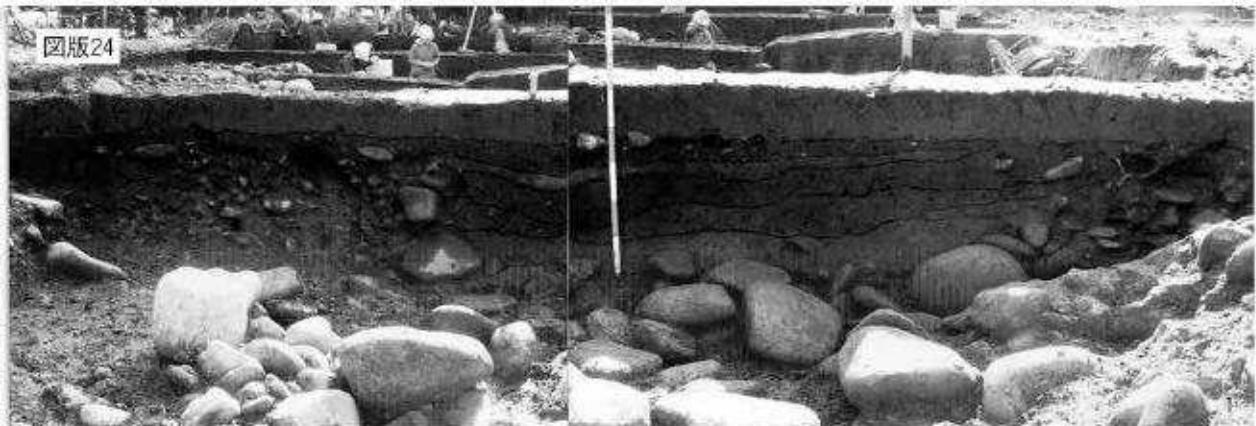
1. 平成 5 年度調査区
完掘 〔南から〕



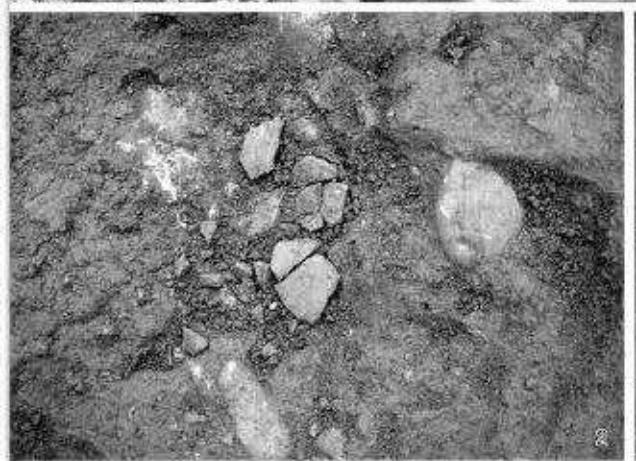
2. 平成 5 年度調査区
完掘 〔北から〕



3. 集中区 1
遺物出土状況



1. 河道1断面



2. 無文土器出土状况
3. 石匙出土状况



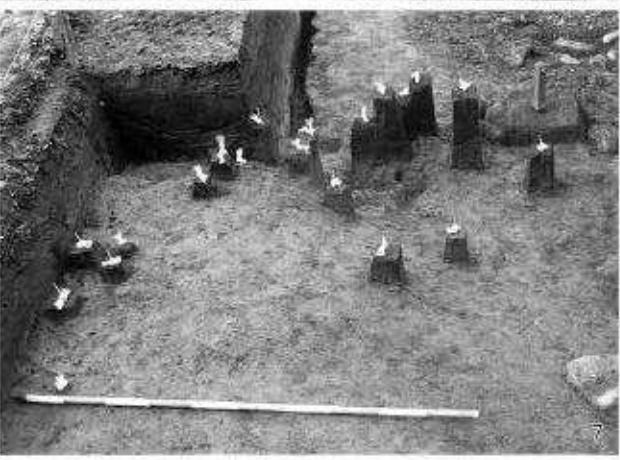
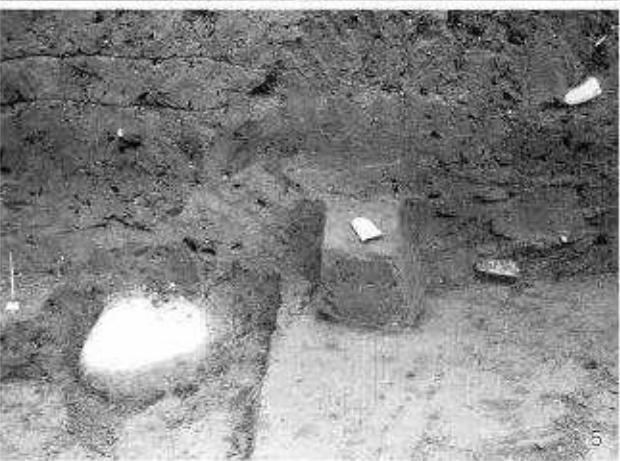
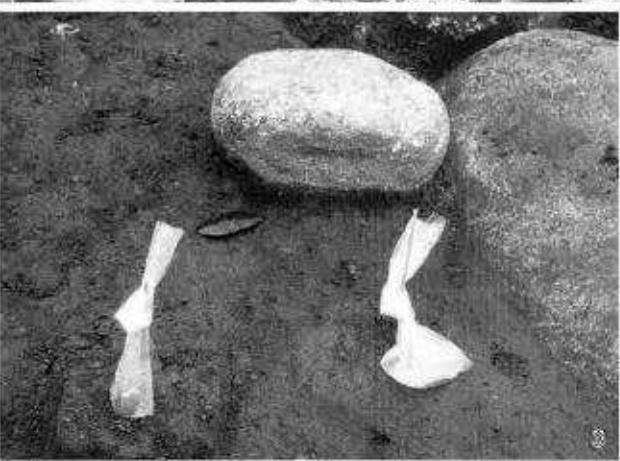
4. 半月形石器出土状况
5. 打製石斧出土状况



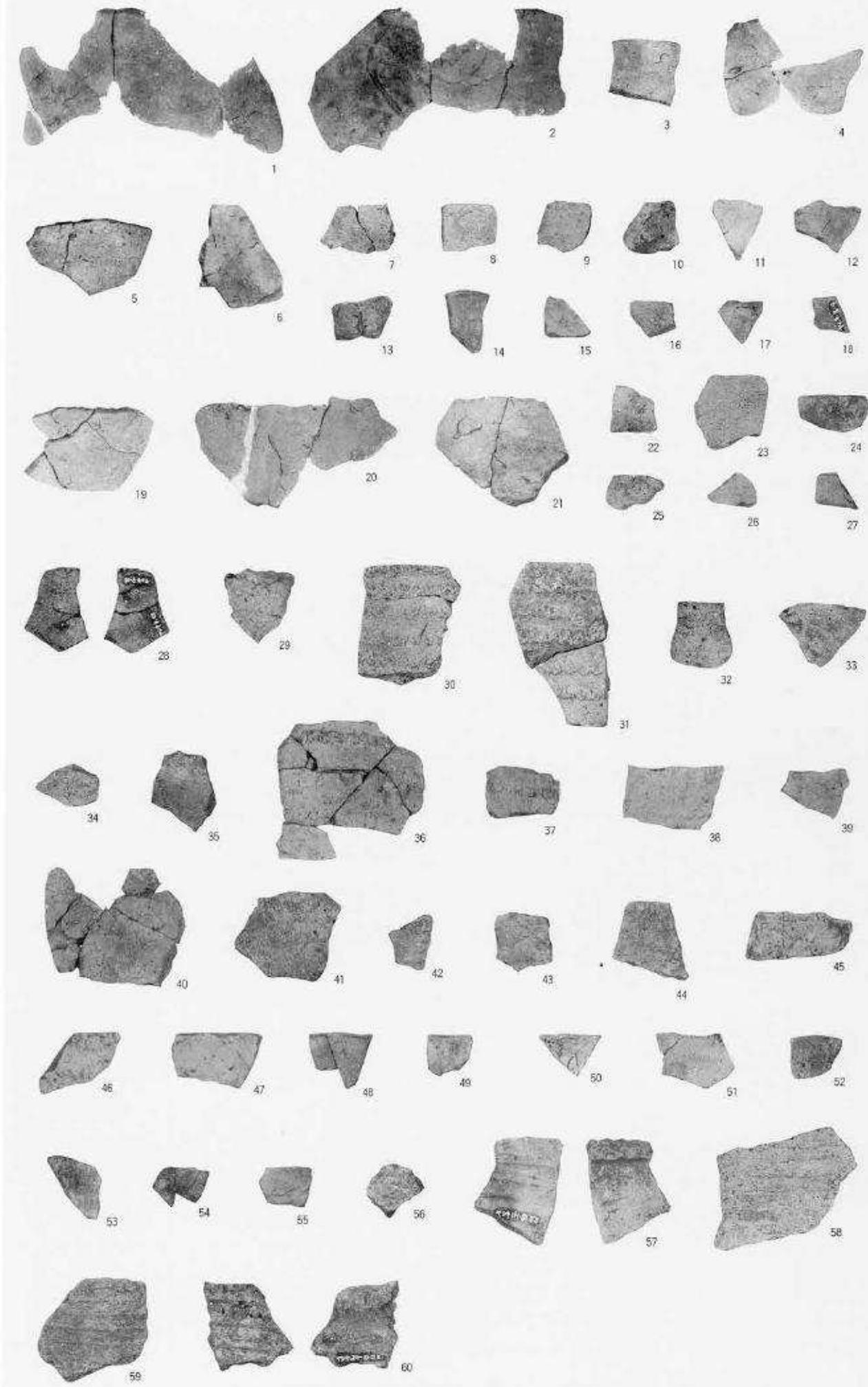
6. 集中区1
遺物出土状况
7. 集中区3
遺物出土状况

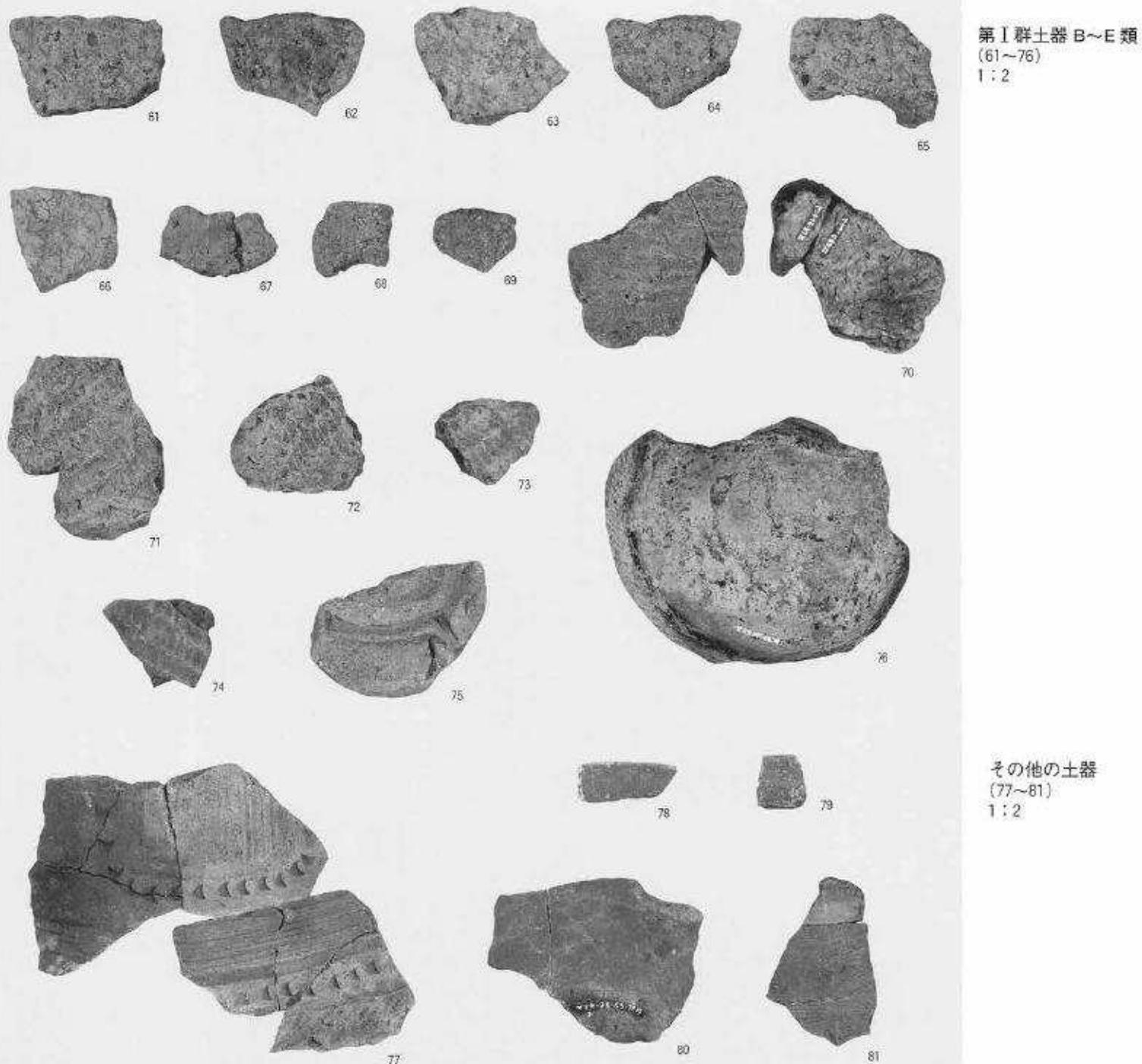


8. 集中区8
押型文土器出土状况
9. 集中区5
弥生土器出土状况

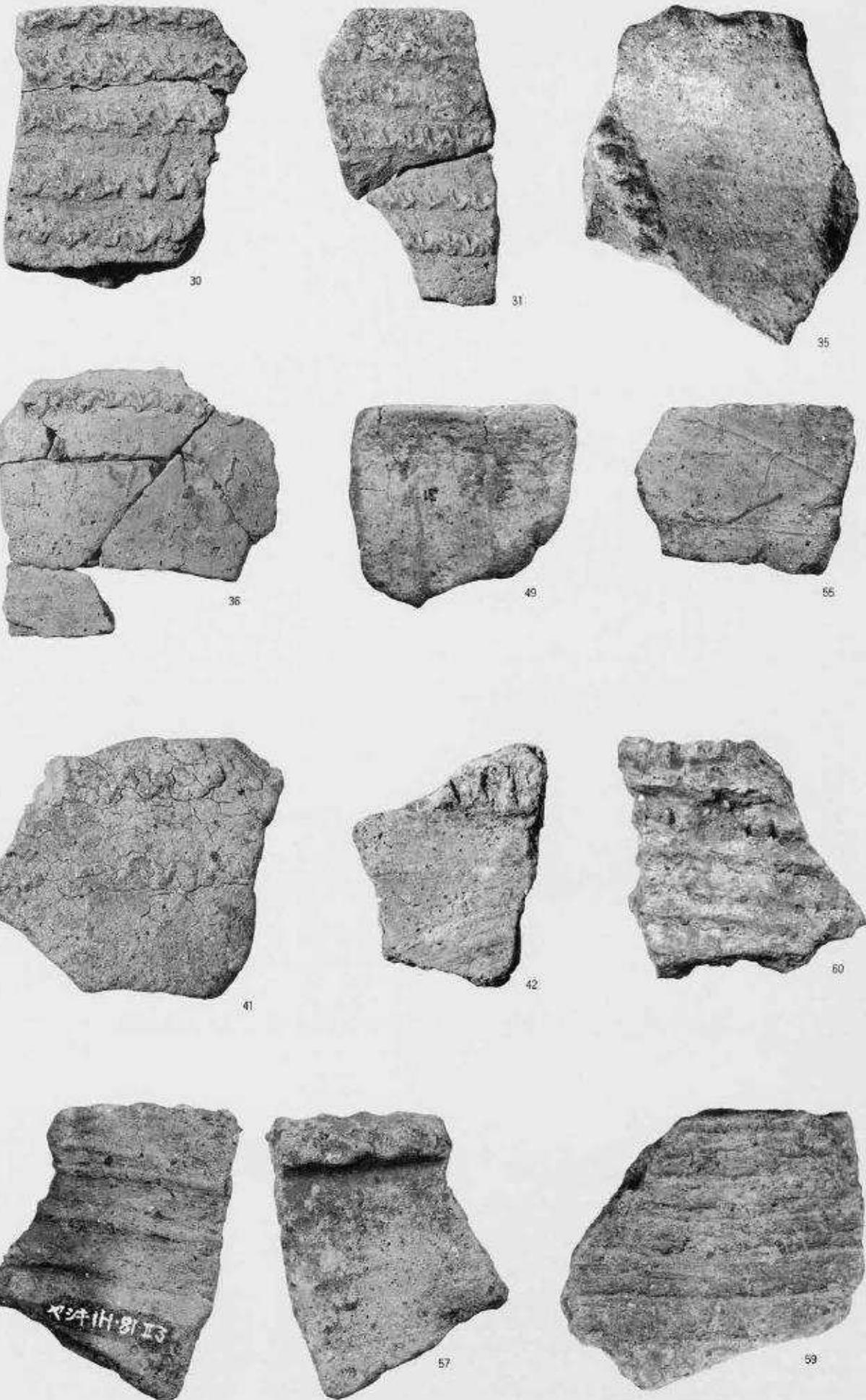


第I群土器A類
(1~60)
1:2





第Ⅰ群土器 A 類
文様



第Ⅰ群土器 A類
口縁部・擬口縁部・
接合部断面



集中区1石器

石核

(1)

1:3

剥片

(2~4)

1:2



集中区4石器

两棱石器

(5~6)

2:3

石核

(7~9)

剥片

(10)

1:2



集中区7石器

未成品

(11)

1:2



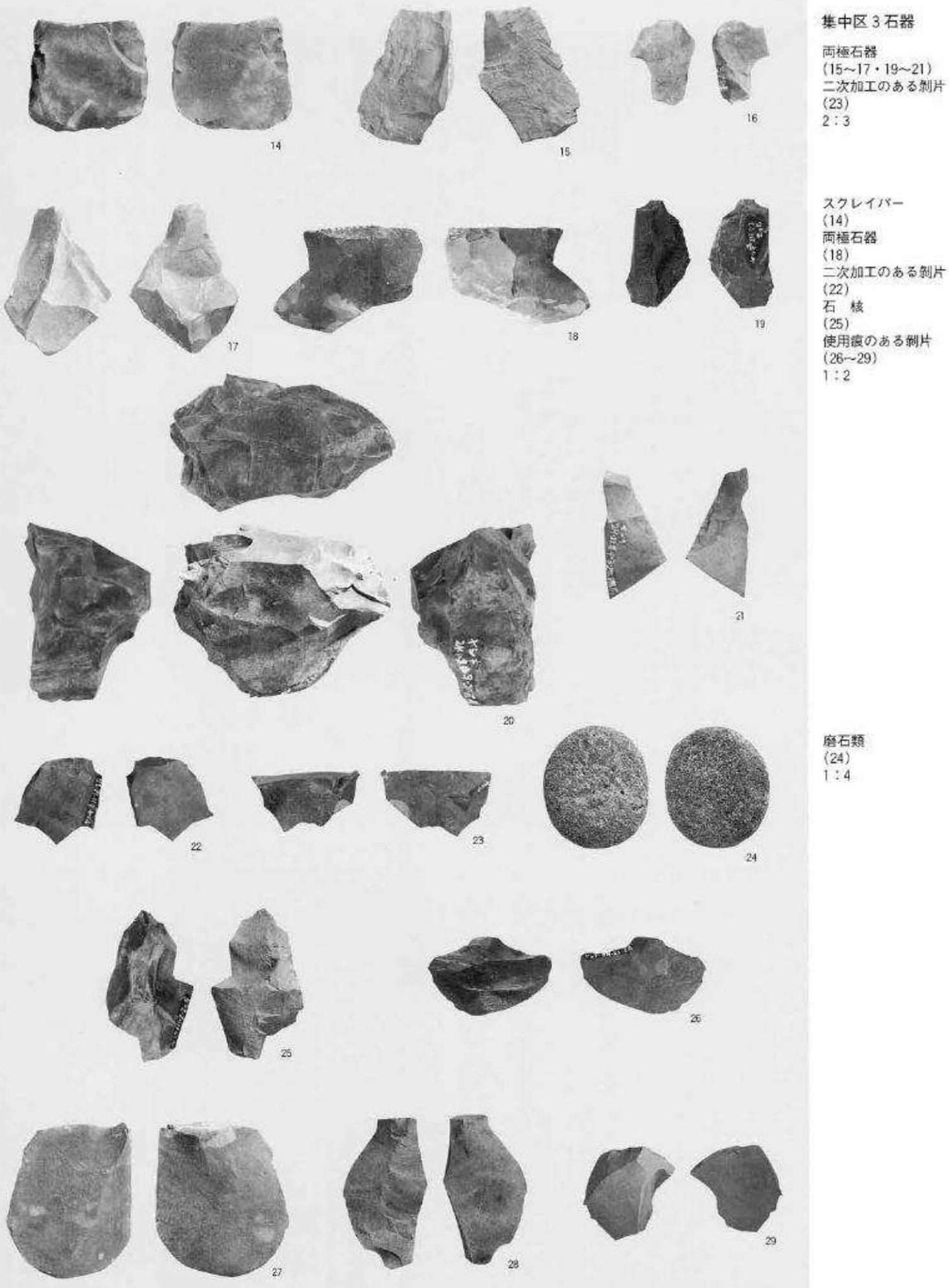
集中区8石器

剥片

(12~13)

1:2



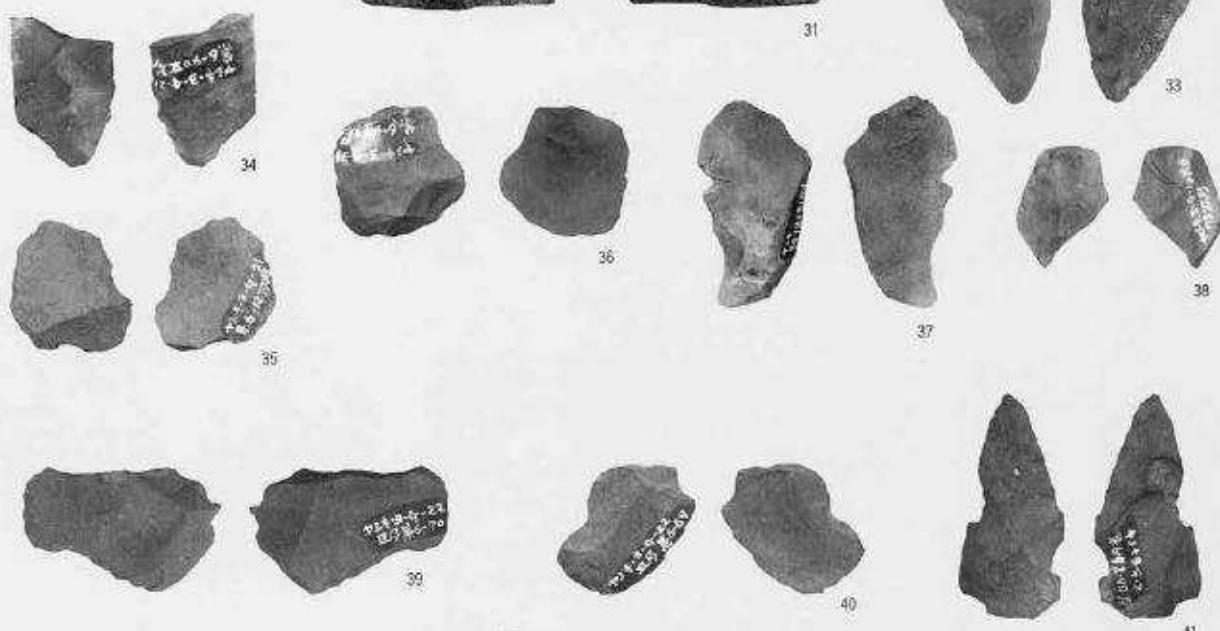


集中区6 石器

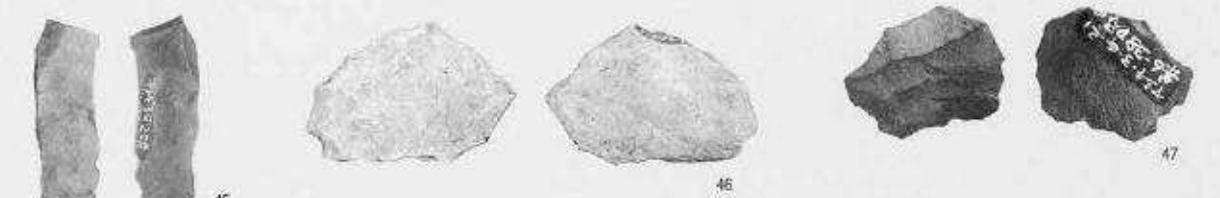
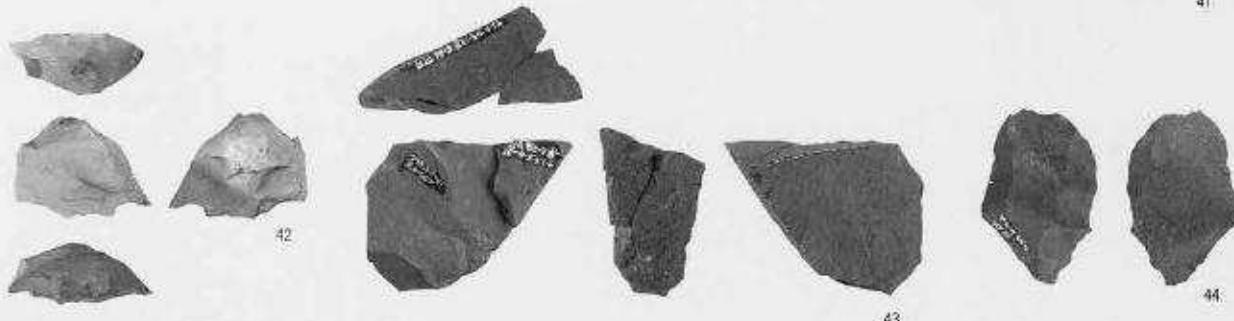
有舌尖頭器
(30)
石錐
(32)
石匙
(33)
未成品
(41)
剥片
(47~52)
2:3

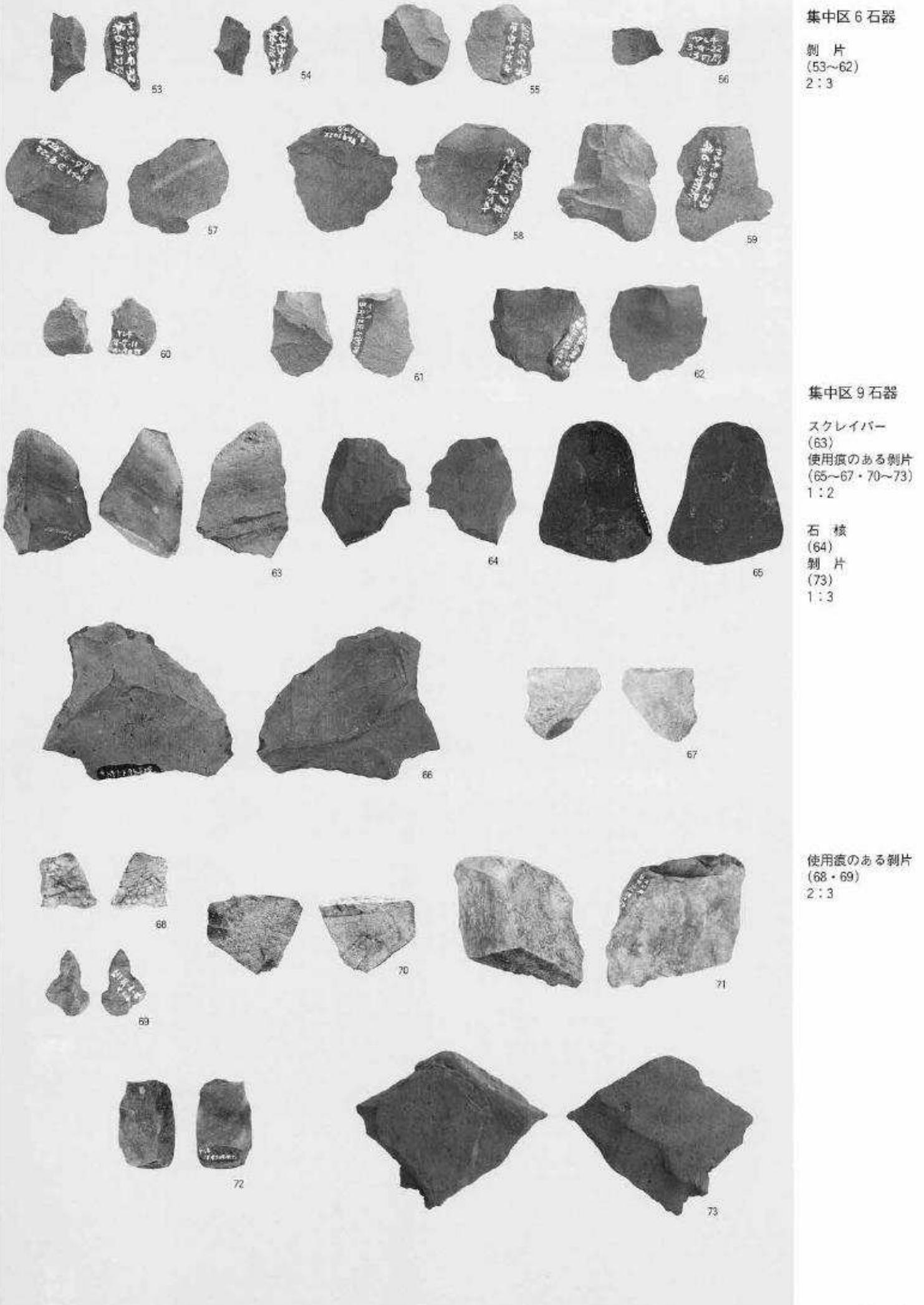


半月形尖頭器
(31)
スクレイバー
(34)
二次加工のある剥片
(35~40)
使用痕のある剥片
(44)
剥片
(45・46)
1:2



石核
(42・43)
1:3





集中区外の石器 1

石錐
(74)
1:1



スクレイバー
(75~77)

範状石器

(78)

両極石器

(80~82)

二次加工のある剥片
(83・85)

打製石斧

(86)

未成品

(88・90)

1:2

両極石器

(79)

二次加工のある剥片

(84)

未成品(89)

2:3



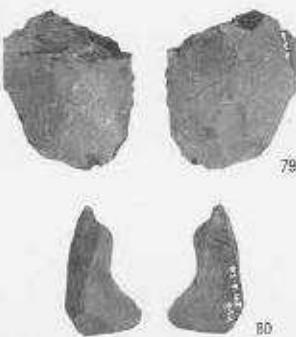
75



77



76



79



81



80



82



78



84



85



86



87



88



89



90

集中区外の石器 2

石 棱
(91~94)
剥 片
(102)
1:3

91

93

92

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

107

106

108

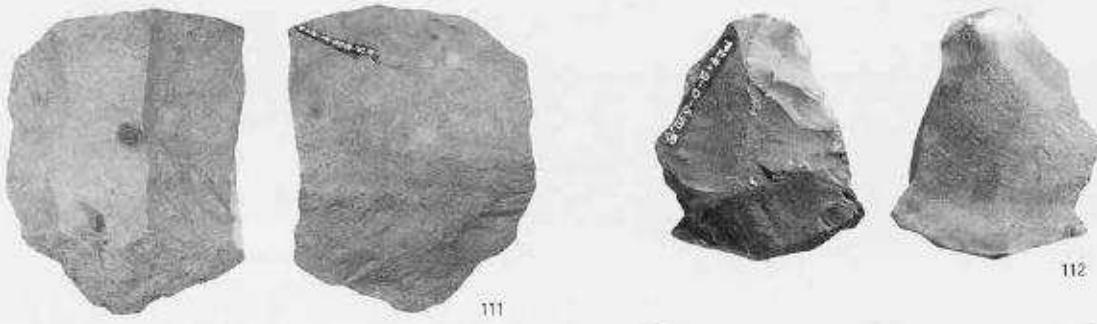
110

使用痕のある剥片
(95)
剥 片
(97・104)
2:3

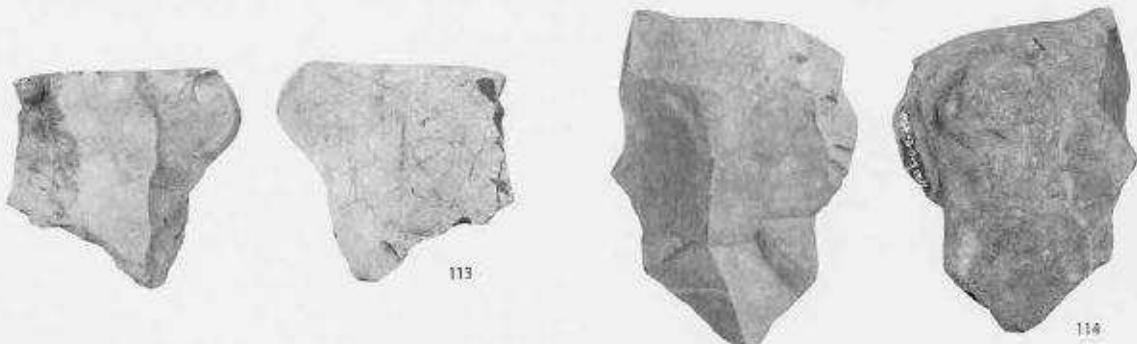
使用痕のある剥片
(96)
剥 片
(98~101・103・
105~110)
1:2

集中区外の石器 3

剥片
(111・112)
1:2

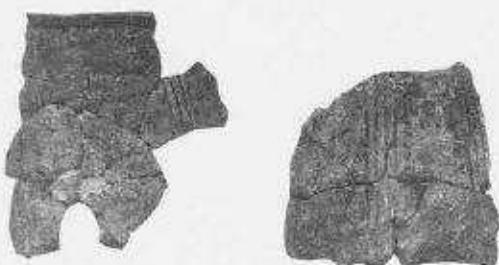


剥片
(113)
使用痕のある砾片
(114)
1:3



H. 6~7
第一次調査
出土土器

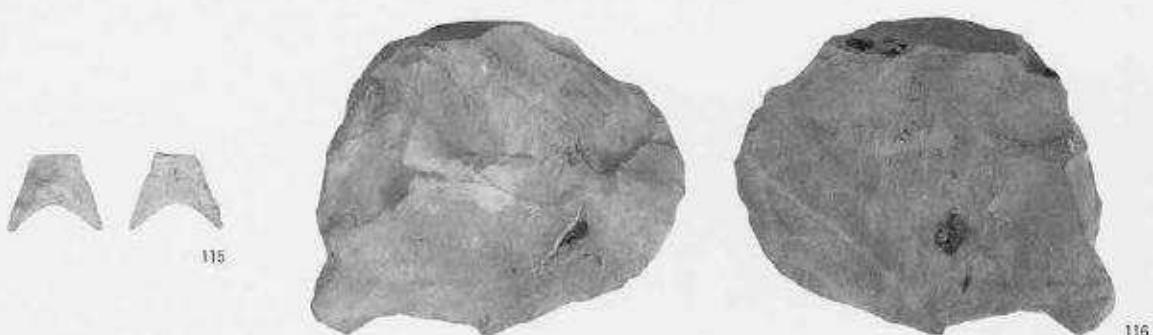
五領ヶ台式土器
1:3



H. 6~7
第一次調査
出土石器

石鐵
(115)
2:3

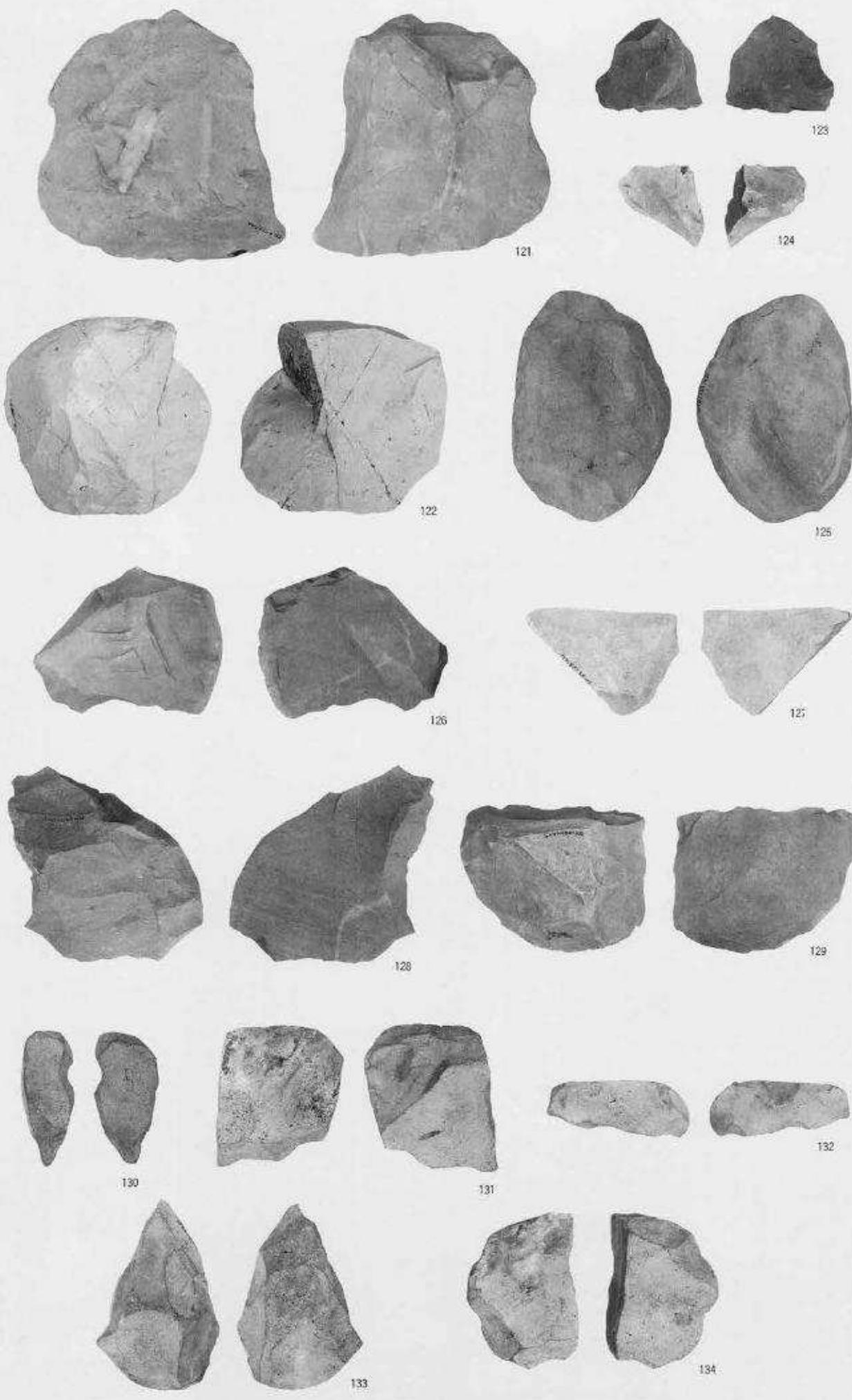
スクレイバー
(116~118)
二次加工のある剥片
(119)
使用痕のある剥片
(120)
1:2



H. 6～7
第一次調査
出土石器

縛器
(121・122)
石核
(123)
剥片
(125～129)
破碎砾
(131～134)
1:3

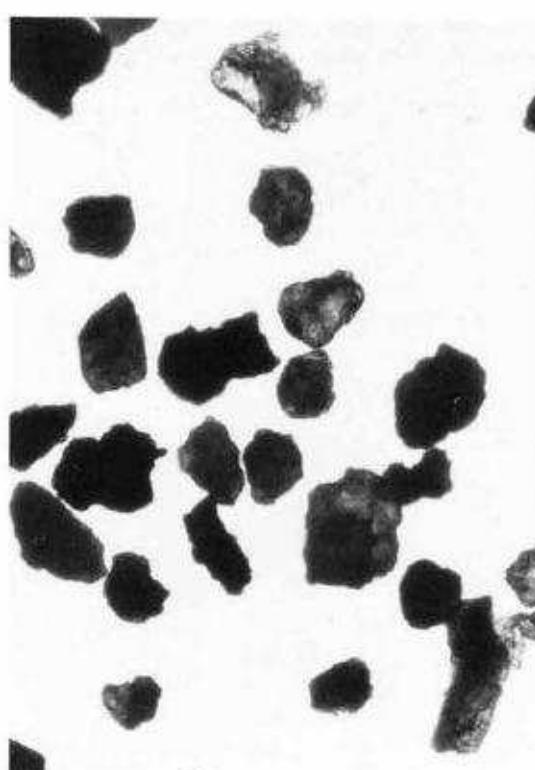
剥片
(124)
破碎砾
(130)
1:2



試料中の火山ガラス及び軽鉱物



1. As-K火山ガラス(Hグリッド: 試料番号16)

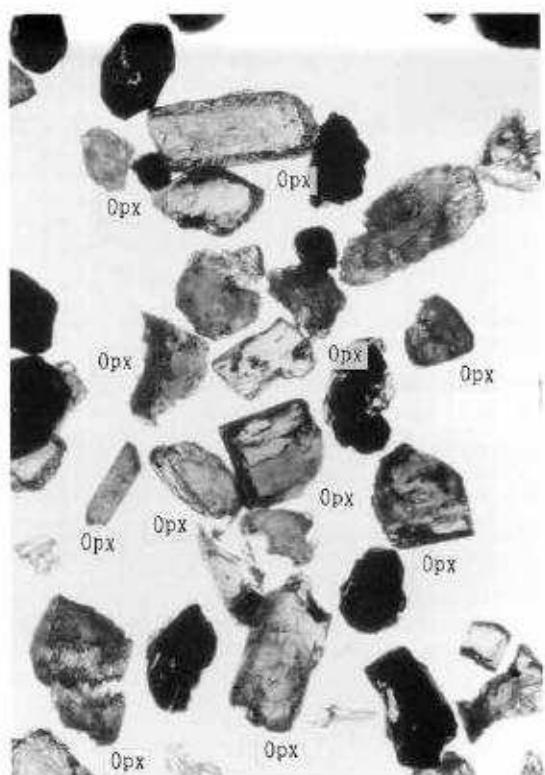


2. 軽鉱物(Hグリッド: 試料番号22)

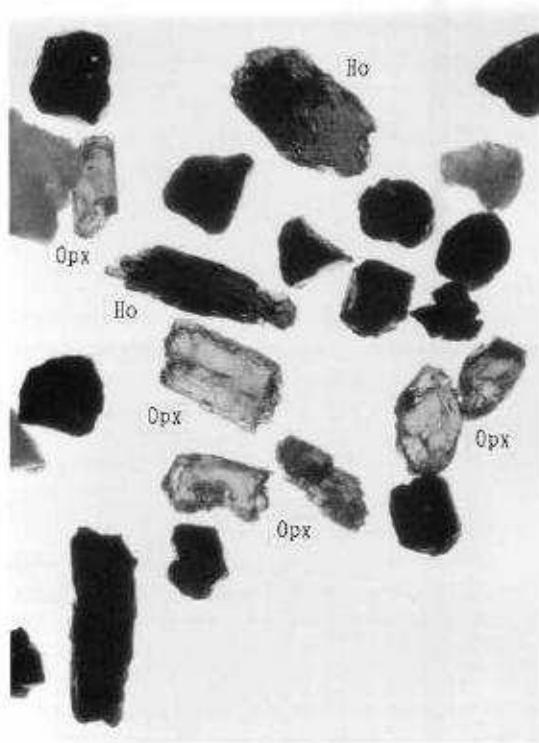
3. As-K火山ガラス
(G3グリッド: 試料番号25)

0.5mm

試料中の重鉱物及び火山ガラス



1. 重鉱物(C 地点: 試料番号 5)



2. 重鉱物(C 地点: 試料番号 14)



3. As-K 火山ガラス(B 地点: 試料番号 6)



4. AT 火山ガラス(B 地点: 試料番号 16)

Opx: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 Ho: 角閃石

0.5mm

ふりがな	やしきださんいせき							
書名	屋敷田Ⅲ遺跡							
副書名	国道117号線第一次改築関係発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第88集							
編・著者名	中澤 敦・江口友子・甲田 治							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市新津市大字金津93番地1 TEL. 0250-25-3981 FAX. 0250-25-3986							
発行年月日	1998年3月31日							
所 収 遺 跡	所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積 [㎡]	調査原因
		市町村	遺跡番号					
屋敷田Ⅲ遺跡	新潟県中魚沼郡津南町大学下船渡乙字屋敷田1609番地ほか	175	180	37度02分27秒	138度14秒	第一次調査 1993.10.12～1993.10.25 1994.05.20～1994.06.23 1995.04.18～1995.06.13 第二次調査 1993.10.26～1993.12.10 1993.04.12～1993.08.24	5,000	道路(清津橋)改築に伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物			特 記 事 項	
屋敷田Ⅲ遺跡	遺物包含地	縄文時代 草創期・早期		無文土器 隆起線文土器 押型文土器 有舌尖頭器 石匙 半月形石器 石斧			河道跡二筋	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第88集

国道117号線第一次改築関係発掘調査報告書

屋敷田Ⅲ遺跡

平成10年3月30日印刷

平成10年3月31日発行

発行・編集 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市新光町4-1

電話 (025) 285-5511

財新潟県埋蔵文化財

調査事業団

〒956-0845

新潟市大字金津93番地1

電話 (0250) 25-3981

FAX (0250) 25-3986

印刷 長谷川印刷

新潟市小針1-11-8

電話 (025) 233-0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第88集『屋敷田Ⅲ遺跡』正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄録	市町村コード	175	15482

屋敷田Ⅲ遺跡正誤表

頁	行	誤	正
56	22	<u>B類</u> 隆起線文土器	隆起線文土器